
伏魔殿の常識は

ポンカス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伏魔殿の常識は

【Nコード】

N9254W

【作者名】

ポンカス

【あらすじ】

突然親からの仕送りが途絶え、不如意を迫られそうになった大学生の城山仁。アルバイトを探すことを決意した矢先、異形の生物に襲撃される。その翌日、アルバイトの決まらない彼のもとに、公安を名乗る少女が現れる。「力を貸してください」当惑する城山だったが、破格の条件に首を縦に振った。

一応、自分が書いている兄妹モノの一連ですが、少し外伝的なストーリー構成にします。時間軸としては、「妹の異世界譚」の約一年前の話になります。前作を読んでいたほうが理解がし易い部分もあり

ますが、多分初見の方でも大丈夫だと思います。わかんないけど。それとガチで15禁なので、15歳未満の方は読まないで下さい。それでは、自分は大人だという方、まあ読んでみようかと思う方はお付き合い下さいませ。

第一話：NO WORK、NO LIFE

9月2日（FRI）

雑居ビルの階段を下りてくると、途端にむわつとした空気に包まれた。朝もまだ早いのに油蝉がジクジク鳴いている。城山仁はビルの外階段を見上げる。白い外壁に赤錆の混じった小汚い中層ビル。仁が時折赴く麻雀屋がテナントとして入っている。

見上げた階段の先から男が降りてくる。切れ長の目に、尖った顎、男にしては色白で、色男に分類して差し支えない容貌だった。

「暑いな」

「ああ」

男二人はありきたりな感想を取り交わして、並んで歩き始めた。あまり会話が弾まない一因は、彼らが昨日の朝からパチンコ屋へ並び、そこで終日スロット台で遊んだ後、その足で雀荘へと向かったためだった。すれ違う人々は皆駅から出てきてこれから勤務に向かうであろう勤め人たち。一様にパリツとした背広で軍隊のようにきびきび歩く。対して彼らは間逆。遊び疲れてねぐらへと戻る。

「それにしても　大丈夫なのか？」

色男の方、川瀬良一かわせりよういちが相方の方も見ずに言った。街路樹の下、雑草が草いきれを吐き出し、アスファルトの照り返しも相まって足元を不快に温める感覚。

「何がだ？」

「お前、親父さんに見限られたんだろう？　こんなフラフラしてて大丈夫なのか？」

そこで川瀬はやつと城山の方を見た。二人は互いに相手のことについてあまり詮索しない主義だった。そんな川瀬にとつても、城山の様子はいささか心配であった。昨日のスロットについても終日最高設定を打ち切り、先程の麻雀にあつても役満をあがるなんて幸運が

あつたにも関わらず、どこか思い詰めたような顔をしていた。どこで最高設定と判断したか、何を引いて波に乗ったとか、或いは配牌はどうだったか、どんな牌姿を辿ったとか、いつもは多少は楽しそうに語るであろう内容も、さっぱり彼の口から聞かれない。

「ああ、その話か。多分何かバイトすることになるんだろうな」

ほんの少し寂しそうな顔をして城山は言う。それは二人で今日のように遊び尽くす機会が減ることへの寂しさか、純粹に労働を嫌う彼が半強制的にその労働を余儀なくされているせいか。

「しかし…… 学費も自分で出すことになるんだろう？」

「ああ、多分」

「まあそりゃそうか。お前の単位の取得が芳しくないせいだもんな？」

城山は彼にそのように説明していた。二年生の前期が終わった時点でほとんど留年は決まったようなものである。その状況に親が腹を立てた。以降は経済援助をしない。そういった仔細だと。城山の首肯を見ると、川瀬は続けた。自分も同じような状況であるにも関わらず、未だ親のスネを齧ることを許されているという負い目のようなものと、城山への申し訳なさのような感情が手伝って、川瀬を饒舌にしていた。

「でも俺の知り合いにも学費と生活費、バイトで稼ぎながら大学通ってる奴も居るからな。やってやれんことはない筈だぜ」

川瀬は知らない。城山の父が何の連絡もなしに口座への振込みを打ち切ったこと。城山には妹が一人居り、その子への支援もまた前触れなく途絶えたこと。つまりは自分の息子娘らへの援助の一切をやめてしまったこと。

「ああ」

生返事をしながら、城山は昨日の朝のことを思い出していた。

朝、城山は妹に起こされた。奈々華ななかといって、城山とは四つ離れて

いる。今年高校に上がったばかりだった。昔は随分仲の良かった兄妹だが、最近では互いの部屋へと足を運ぶこともなくなっていた。だからそんな珍しい事態に、城山は何かあったのかと尋ねた。彼女は父からの仕送りが振り込まれていない、と答えた。言われて城山はその日が定期的に父からの仕送りがある日だと理解した。というのも、彼は随分長い間、その金に手をつけていなかった。奈々華は兄妹等分でその金を割り、自分の分だけを下ろして生活費や小遣いとしている。兄の方はギャンブルで生計を立てており、放置していたわけである。

「どうしよう?」

彼らの父は表向きは海外出張ということにしているが、実際のところ兄妹は父がどういった仕事をしているかはおろか、今現在どこで何をしているのかも知らない。だから、

「どうしよう、ったって」

こういう事態になってしまった場合には対処の仕様がなない。連絡先も勿論知らない。

「とりあえずキミは俺の分に残してある残額でしばらく暮らして」
兄の方は当然、こういう事態も想定はしてあった。最悪の想定としてだが。

「で、でも」

「いいから」

城山は瞳に力を込めて妹を見た。

「……う、うん。わかった。ありがとう」

当座はそれでしのげるとして。

「俺はこれから仕事を探してみるよ」

奈々華は彼女に非があるわけでもないのに、終始申し訳なさそうに遠慮をしていたが、実際高校生の彼女に働かせるわけにもいかず、城山は何とか説得してその場はお開きとなった。

「並の仕事じゃ厳しいんだよな」

川瀬と別れた後、城山は呟いた。川瀬の知り合いの話、それは自分ひとりだけの費用を捻出すれば事足りるから出来ている。城山の場合二人分。つまりは学生の身分で扶養家族を一人設けているようなものだ。幸いにして今年度分の学費は二人とも払い込まれているので、今年に限っては生活費だけをどうにかすれば済む。だがこの事態がいつまで続くとも、ましてや終わるのかもわからない状況。そして城山は根拠のない楽観視は嫌いな主義で、今後一切父からの仕送りはないものとして考えている。もともと彼は父を嫌っており、そんな感情からあまり口座の金に手をつけたがらず、それをしないために必死にギャンブルを勉強している次第。しかし学費や家賃については頼っているという不十全で半端な反抗をしていることも自分で理解していた。そんな中……これは転機だ。そう思ったかった。これでも異論はない。責務であると考えてる。

「だが……」

問題は、それだけを果たせる報酬が見込める仕事。城山は思案顔のまま、私鉄に乗り込んだ。

第二話：変調

自宅の最寄り駅で降りると、改札を抜ける。ベッドタウンとして都心から少し離れたこの街へとこの時間に戻ってくる人間というのは、ろくでもないもので、当然数としては多くなく、日本はまだ安泰なのかもしれないなんて下らない思考が城山の脳裏をかすめた。

財布に定期をしまつと、前を向く。視界の先は広場のようになっており、中央には噴水がある。端には整然と花壇が並ぶ。さらに花壇の向こうには喫煙スペースが半ば押しやられるようにあり、城山はそこへのろのろした足取りで向かう。十メートルほど先にはロータリーがあり、バスやタクシーが時折行き来している。

シャツの胸ポケットからタバコを取り出すと、百円ライターで火をつける。それを合図にしたようだった。

周囲の空気が変わったような気がして、城山は軽く顔を上げる。どこがどう変わった、という説明は難しい。ただ彼の第六感としか言いようがない。そのくせ微細ではない。まるつきり世界が変わってしまったかのような違和感。いや、自分が今のこの世界からして異質なのだ。疎外感と言った方が適切なのだろう。じとりと嫌な汗が背中を流れるのを感じた。

「な、なんだ？」

城山の耳朶を打った自分の声は、妙に響いて現実感がなかった。そこで初めて気付く。音がない。いや、それだけじゃない。周囲から人の気配がしない。首を巡らせてみるが、やはり人の姿を見つけれない。先程まで走っていたバスや、駅に入ったファストフード店も変わらず在るのに、先程までそこに満ちていた人間が居ない。子供の頃見たアニメで、鏡の世界というのが出てきて、そこは現実世界と何一つ変わらない様相なのに、生物だけが居ない箱庭のような世界だったのを思い出す。あれと酷似していると。

城山はわけあってこういつた超常現象というものに、他の人間より慣れてる自信がある。だから驚きはしても取り乱したりはしない。そも常人であれば、この状況にあつてなお状況が把握できていないであろう。とにかく城山の目つきが変わる。野生の獣のように辺りを油断なく窺い、じつと息を殺した。タバコを危険物でも取り扱うかのような慎重な手つきでスタンド灰皿へ落とす。やはり大きな音を立てて消える。今度はそれが合図になった。

「きゃああああ」

若い女性の悲鳴だった。耳を澄ませていた城山はすぐに声のした方角へと駆け出す。聞き覚えのある声だった。

ロータリーは長く湾曲しており、端から端、という表現も円状だと適切ではないのだが、彼がいた場所から一番遠い場所に声の主はいた。駅ビルの入り口付近、腰を抜かしている。城山はその姿を見て、彼女がここにいる理由まで推察できた。このビルの一階には銀行のATMがあった。

「大丈夫かい？」

城山は落ち着いた声を出し、女性に向いた。その間にも視界の端できつちりと女性の前方を窺っていた。女性は背中まで届く黒い長髪を振り乱し、弾かれるように城山を見た。声を掛けられて初めて城山の存在に気付いたらしい。恐怖と驚きに固まっていた表情が、ゆつくりと安堵の色へ変わっていく。女性はまだ歳若く、学校の制服を着ていた。

「お、お兄ちゃん！」

女性、奈々華はわなないていた形の良い唇で兄を呼ぶ。黒く大きな瞳の端にはうつすら光るものもあった。

「立てる？」

黙って首を横に振るのを見て、城山は小さく鼻から息を漏らして、女性の眼前に背を向けて立った。必然対峙する。女性を今尚恐れさせているモノと対峙する。それはやはりこの世の理から外れたよう

な存在だった。

「鹿、いやライオンか」

体は鹿だ。栗色の体毛はツヤがあり、しなやかな筋肉で張り詰めた四肢は動物特有の瞬発力を内に秘めている。頭は獅子だ。剥き出しの敵意を込めた瞳は猛々しく、口から覗く僅かに黄ばんだ牙は人の体のどの部分にもない鋭利さを持ち合わせている。

「キメラって奴か？」

言って、自分で首を振る。キメラ自体見たこともないくせに、どうもしっくりこない。しかし、城山は目の前の生物にそういった人工的な雰囲気を受けなかった。コレはコレで一個の完成された、自然のままの生物である気がした。まだUMAといった方がおさまりが良い。その生物は、奈々華に牙を剥いた後、少し相手の様子を見ていたようだが、城山がやって来たことにより、また見のようだ。外貌に似合わず存外慎重な生き物、というのが城山の寸評。しかし半分は鹿なのだから見た目通りとも言えるのかも知れない、などとうでもよいことを考えていると、威嚇するように、生物がグルルと低く唸った。

「そうですね。最近暑いですね」

「絶対そんなこと言ってないよ」

兄が来たことにより、少し奈々華にも余裕が出てきたらしく、軽口に乗る。だがその声は小さく兄には聞こえなかったようだ。対照に、また生物が大きく唸った。

「そうですね。じゃあ死んでください」

城山が腰を落とし、グンと飛び出す。初速からトップスピードのよくな速さで、獣がピクリと反応した頃にはもう半分以上間を詰めていた。動く前に相手に害意、殺意を気取らせない。しかもそれが動物相手である。並大抵のことではない。しかし相手も顔だけとはいえ肉食獣。瞬時に判断し、飛び掛る。城山の腕に噛み付いた。後手を踏んだとはいえ、獣は恐らく勝利を確信した。こうすれば獲物は必ず逃げようと身を退く。本能と反射。そうなれば自分が押し込ん

で相手の上を取れる。後は噛んで噛んで噛み千切ってやればいい。だが城山は違った。助走でついた力も、もとの膂力も獣の上をいていた。加えて、傍目には命知らずにすら映るほどに勇猛だった。だが彼の自己評は違う。もとより相手より上回っていることを十分に理解している。肉食獣を前にしても、狩られる側だという認識は毛ほども持ち合わせていなかった。とはいえ平素の彼がここまで無鉄砲に敵に突っ込むことはないが、肉親を守るためには構えていたのでは分が悪く、打って出るしかないという状況が、この強殺劇に繋がった。

押し負けた獣が地に落ち、その上に城山がのしかかる。蹴り上げられないように四肢の間、腹に腹を合わせるように身を潜りこませた。獣は首を後ろに振れないため、彼の腕を引きちぎることもあたわず、さりとして顎の力だけで押し潰すには、彼の腕は異様に逞しい筋肉の壁に包まれていた。おまけに獣にとってこのような状況は初めてのことであり、動揺も少くない。

城山の空いている方の手が獣の目に伸び、抉る。ジググと嫌な音を立てて眼球が潰れる。生暖かい血やら体液やらが城山の指に絡みつき、獣は耳を覆いたくなるようなけたたましい悲鳴をあげる。口が開いて城山の両腕を自由にしてしまう。そこからは一方的だった。体の比較的柔らかい部分、腹に両拳を浴びせて弱らせ、首筋に爪を立てる。しかし爪で以ってではなく指を捻じ込むようにして進む。獣が物凄い力で暴れ、城山の腰が一瞬宙に浮くが、指先に込めた力は決して緩めず、ズブリズブリと肉を抉り分けていく。血は先程から噴出し続けている。壊れたスプリングラーのようだ。しかし生き物の血は無限ではなく、それはこの威容の生物も例外ではないらしく、徐々に血の勢いは弱まっていき、岩清水のようになる。その頃には体から力は抜け落ちており、顎があがった状態で事切れていた。それを確認すると、城山はすっと立ち上がる。妹の方を向いた顔の半分以上が獣の血でべっとりと赤くなっていた。

「大丈夫だったかい？」

城山仁には力があつた。

第三話：DISTANT

獣を倒したのがキツカケか、徐々に世界が元の在り様へ戻りつつある気配を感じ、城山は慌てる。今の彼が元の世界ではどう映るか。

「ちよつと待つてて」

城山は近くにあったバス停のベンチを指差してから駆け出し……

かけて、もう一言。

「何かあつたらまた大声出して」

言われた奈々華はまだ状況もつかめず、近くで果てている獣とその周りの血溜まりをぼんやり見つめていた目を上げて曖昧に頷いた。兄の方はそれを見て本当に駆け出した。

近くに公衆トイレがあつたのは幸いだった。肌に付着した血糊は洗い流せたし、黒いシャツを着ていたため、上半身も血がついている風には見えなかった。下は半パンのジーンズを履いているが、少しずつエンジンから黒へと変わりつつある血しぶきは、コレはコレで模様だと言つて誤魔化せるレベルになっていた。さらに幸運だったのは、朝の通勤ラッシュを終え、トイレに人が居なかつたことも付記できる。

獣を倒して五分ほどすると、周囲からガヤが聞こえてきて、本当に間一髪だったということがわかつた。城山にとっては獣と対峙したことより、その事実の方がよほど肝が冷えた。

「また警察沙汰なんてことになったら、あの子に迷惑を掛けるところだった」

戻りがてら、そんなことを呟く。唯一の不安材料、駅前の交番も無事通り過ぎて安堵の溜息の後に口をついて出た言葉だった。目的の少女が腰掛けるベンチが見える。丁度バスが停まつたらしく、運転手に対して手を振って乗らないとジェスチャーしていた。城山が近づいていくと、パツと明るい顔をして、次いで腕の怪我を見やり、

沈痛な顔をした。トイレットペーパーを包帯に見えるように幾重にも巻いていた。

「腕……」

「ああ、大丈夫だよ。心配ない」

「でも」

「大丈夫だから」

冷たくはないが、妙な距離を感じさせる声音。城山は顔を逸らし、獣が息絶えていた辺りを見やった。流水紋を彫られたタイルがあるだけで、他には何もなかった。強いて言うなら黒くなったガムの殻がごびりついているくらい。

「なくなっちゃった」

「……いつ？」

「丁度皆が戻ってきたくらい」

皆、とは人間のことだろう。

「なんかいつの間にか…… あれなんか空気が変わったな、って周りを見回してるうちに、次見たらなくなってた」

城山はそっか、と呟いた。鼻の頭を掻きながら思案顔。

「あのね」

「うん」

「……助けてくれてありがとう」

「ああ、うん」

「すっごく怖かったけど、その…… 来てくれて嬉しかった」

答えず、獣が横たわっていたあたりまで歩く。やはり何の痕跡もなく、城山の眉間に皺がよる。小さな血痕の一つもない。

「あの、お兄ちゃん」

振り向く。

「膝小僧」

「え？」

「膝小僧、ジャリがついてる」

奈々華は少し恥ずかしそうに手で払った。

奈々華が駅前に行った理由は、城山が想像したとおりのものだった。もう一度振込みがないか確かめに来たというのだ。続けて、非常にバツが悪そうに城山の言われたとおり、貯まっていた彼の金を下ろしたとも言った。要領が悪いな、と城山は思った。こちらが察していることくらいあっちも分かっているだろうに、わざわざ報告して気まづくなることもないだろうに、と。気にするなとだけ返すと二人は黙りこくってしまった。

駅から十分ほど歩くと、彼らの家の近所まで戻ってきた。その頃には太陽も随分高いところまで昇っていて、遠くにはぼんやりと陽炎の揺らめきも出始めていた。二人の右手、黄色い派手な色の家を過ぎる。住人も金髪のパンチパーマと派手な頭髪をした、おっさんのようなおばさんが一人と襟足だけ長い子供が二人ほど居る。ヤンキーハウスと城山は呼んでいる。ここを過ぎれば自宅までもう二分とない。

「ここって、旦那さん見たことないよね？」

久しぶりに口を開いた奈々華は、しかしどうでもいいことを言った。城山の方も同じ事を考えていたので、内心苦笑する。腐っても兄妹だ。

「単身赴任とかじゃない？ それかあんなだから離婚したか？」

城山は知っているが、そのおばさん実は駅前のパチンコ屋に入り浸っている。ろくに回らない釘でMAXタイプのパチンコに際限なく入れているのはあの店では大抵の人間が知っている。

「……うちと一緒かな」

「どうかね」

また会話が途切れる。ベージュの煉瓦風タイルの外壁が見える。彼らの借家。城山はふと、気になった。

「うちって家賃いくらだったけ？」

「9万8千円」

城山は礼を言つて概算する。今年の彼の月平均の利ざやが大体6万前後だ。今のままでは家賃すら払えないことになる。加えて、彼のやっていることは当然運の要素が多分に絡み、負け越す月だってあるわけだ。そういった上下の振れを平均して、最終的にプラスに持つていくというのが、ギャンブルの勝ち方、本質である以上それは仕方ないのだが、家賃はそんなことお構いなしである。毎月同じ日に同じ額を納めなければ叩き出されるだけ。

「口座にあったのは？」

「……三十万と少し」

このままでは三ヶ月と暮らせないだろう、ということ。わかつてはいたことだが、こうして数字として現実を突きつけられると、城山も少し言葉に詰まる。自分で思うよりも難しい顔をしていたのか、奈々華が心配そうに覗き込む。

「大丈夫。すぐにバイト見つけるよ。最悪休学みたいな真似しても良いし」

「そんな……」

「今の状況なら仕方ないさ。ボンジュールワークを貰って帰るんだつたね」

隔週発行の無料求人雑誌、その名が兄の口から出てくるとは奈々華は夢にも思わなかった。悪魔の書とまで蔑んでいたのは彼が高校生の時だが、基本的にそういった精神性は変わっていないはずだとは容易にはかれた。つまりそれほどまでに追い込まれている、ということだ。

城山は安心させるような優しい顔つきで一つ笑うと、先に歩いて家の鍵を開けた。残暑の太陽に照らされた鉄のドアノブは生温い感触で、気色悪いと兄妹共に感じた。

第四話：蛇

三好ハルが現場まで出張ということは普通はないことだった。組織の中核とまではいかないまでも、若くして中間管理職のような立場に居る彼女は出世街道をひた走るホープでもあった。そんな彼女が隔月で現場に数度足を運ぶ期間がある。視察のようなものでもあ
るし、同時に査定も兼ねていた。本日の査定対象は十河由弦、組織の枝葉の中で珍しい女性である。歳は三好の一つ下。そのせいもあ
つてか二人は比較的殺伐とした職場にあつて良好な関係を築いてい
る。とはいえ三好は当然公私は弁えている。査定はあくまで平等に
行う。ボードに留めた査定書、ボールペンを鞆から取り出し、十河
の戦働きをつぶさに見物するつもりだった。

「……かなり楽な相手の筈よ。音邑おとむらさんの予知では、鬼火程度のは
ず」
駅と隣の私鉄百貨店のビルを渡す歩道橋の手すりに腕を乗せて三好
は微笑む。ここからだとロータリーが見渡せる。少し通勤ラッシュ
から外れているためか、あまり人通りは多くない。
「わかつてます。わたし一人でもやれます」

十河の表情は対照的に少しだけ強張っていた。鼻白むように言った
部下に対して、三好がさらに言い募ろうかという時、

「……きます」
周囲の空気がピンと張り詰めたようだった。隔離世かくりよ、彼女等はそう
呼ぶ。幽世ではなく、隔離世。そこには人はほとんど居らず、寡数
存在する人間は、通常の世から隔離されたものだけ。有り体に言っ
てしまえば獲物。偶然に迷い込むのではなく、意図的に呼び込まれ
る。だからこそ、そこにあちら側の意図があるからこそ、隔離世と
呼ぶ。

今回のターゲットはどこだろう、今回の被害者はどこだろう、目を
皿のようにして二人は探す。ほどなく見つける。見つけて、

「ちよ、ちよつと話が違うわ」

三好が悲鳴のような声を出した。

「速獅子はやしし！」

二人同時に声を上げる。と、近くのビルから不思議そうに出てきた少女が一人。キョロキョロして、やがてその異形を見つけて固まった。高校生だろうか、とても整った顔立ちをしている。

「まずいですよ！ どうします？」

「どうもこうも…… あんなの三人掛かりでやっと討伐命令が出せるくらいよ？」

完全に平静を失ってしまった三好というのは非常に珍しい光景だが、十河にもそれを楽しみむ余裕などない。見るうち、少女の方へ獅子が歩み寄っていく。耳をつんざくような悲鳴を上げるが、あれほどの妖魔になると、獲物の悲鳴くらいで昂ぶりも驚きもしない。ゆっくりと追い詰めるように、ややもすると感情があり、それが嗜虐に歪んでいるかのように、歩いていく。

「まずい！」

十河が階段へと向かう。

「待ちなさい！」

「しかし！」

十河は止まらない。三好は彼女の面接も執り行った。志望動機に、弱い人間を守りたいというのがあったことを思い出す。それは時として力にもなるが、時として蛮勇と化す。そんな危うい気炎なのだ。今回は後者である。まだ歳若く、査定も初めてというような若輩の彼女が敵う相手ではない。小さく舌打ちして三好が後を追う。と、急に十河は立ち止まった。

「ど、どうしたの？」

声を潜めて話しかける。少し近づいたことにより、相手に聞かれなしか、そんな心配をしてしまう。そんな保身を考えてしまう自分と彼女は対極かもしれない、三好は場違いなことを考える。

「あれ……」

十河が指差した先、一人の男が妖魔に飛び掛り、そして押し倒すところが三好にも見えた。何か言いかけた口が開いたまま言葉を見失う。その間にも男は獅子の目を抉っていく。男の顔が二人にもはっきり見えた。細い目で、顔の起伏もあまり顕著ではなく、平凡な顔立ちのその男は、何の感情も顔に浮かべていない。パンチを獅子の腹に繰り出す肩の筋肉が隆起していた。剛健で柔らかかった。無駄という無駄が一切なく、最低限の動きで拳には最大限の力が込められてるように思えた。そのうち男は獅子の首に指を突き立てる。ほじくるようにゴリゴリと食い込ませていくと、無音の世界にあって、二人の耳にまで不快な音が届いた。一瞬、男がせせら笑ったように見えたのは三好だけだろうか。それも気のせいかも知れないというような感覚で、ずっと無表情であったと言われればそのようなように思う。獣が抵抗する力が弱まっていき、やがて動かなくなつた。唾を飲むのも忘れて二人は金縛りのように見入っていた。すると……男が二人の居る高架の方を見た。恐ろしい顔をしていた。三好も十河も体の芯が一瞬で凍てついたような錯覚を覚えた。恐ろしい顔というのは先刻から見ている無表情のことだ。あの顔で獅子を兇戯のように殺し、そして今二人の間を同じ顔で見た。男が見たのは一瞬で、すぐに立ち上がって少女の方へ話しかける。そこでやっと三好は動けた。トスンと尻餅をついて、やや尻が痛むのが嬉しかった。十河も腰が砕けたように膝を付いた。

第五話：GIRL'S PARANOIAC

「アレ、何だっただんたろうね？」

家に入るとポツリ奈々華がこぼした。アレ。動物と呼んでいいのかすらわからないのだから、そういう表現に落ち着くのだろう。さあ、と城山。

「なんだっただんたろうね」

言いながら黒いチエツクのシャツを脱ぐと、下に着たTシャツまでジワリと赤黒い血がついていた。シャツの方はリビングの床に置くことも躊躇われた。綺麗に磨かれていて、汚れ一つない。それをしているのは他ならぬ目の前の妹だった。

「着替えてくる」

シャツをくると翻して肩に掛ける。その背に奈々華、

「ご飯、作るから一緒に食べよう」

城山は少し黙った後、じゃあご相伴に与ろうかなと答えて、階段を上って行った。

兄が風呂に入って着替えている間に、妹は即席で朝食とも昼食ともつかない時間帯の食事を用意していた。シーザーサラダにぬめこの味噌汁、ハンバーグは昨日の残り物だと言っていた。マイタケをバター醤油で炒めたもの。五目御飯も市販のパックを使ったものだと申し訳なさそうに言った。

「いや、十分だよ。ありがとう」

二人同時にいただきますをして、城山は早速味噌汁に口をつけた。味噌汁自体随分久しぶりに飲む。彼の食生活は良い感じに荒んでいる。即席の味噌汁すら作るのが面倒くさいなどと言い出す男である以上仕方のないことも知れない。何年ぶりに口に作る奈々華の味噌汁は彼の知る味と寸分の違いもなかった。

「ああ。おいしいなあ」

ありがとうと返す奈々華は寂しそうに笑っていた。しばらく二人は

黙々と箸を進めていた。観るともなくつけたテレビから、今日も残暑が厳しいというアナウンサーの声が聞こえてきた。

「ねえ、アレの仲間っているのかな？」

「……」

箸でハンバーグを四つに切り分けながら、城山はどうだろうね、とつまらなさそうに言う。

「アレについては俺にもわからないから」

そっか、と返した奈々華のトーンは明らかに元気がなかった。

「エアコン、随分汚れてる」

「え、うん。ごめん。ちょっと上の方は届かなくて」

城山がぼんやり見つめる先には今も稼働中のエアコンの上部。奈々華の返答を聞いて恐縮したような顔をした城山が対面に目を向ける。「嫌味のつもりなんかじゃないんだ。こっちこそ気付かなくてごめん。後で掃除しておくよ」

奈々華はコクンと頷いた。リビングは二人の共同生活空間。掃除は分担と決まっている。とはいえ城山の方はリビングで過ごす時間というのは一日に一時間とない。自室にすることが大半で、生活家具に加え、電子レンジや小型冷蔵庫なんかも運び込んでいて、さながら一人暮らしの様相だった。必然リビングの様子などには疎い。奈々華もそれは重々知っていて、たまにカップ焼きそばの湯を捨てているくらいでしか、リビングで見かけることはない。そして挨拶もそこそこに自室へと戻っていくのだ。

「でも、悪いことって重なるものだね」

「どういうこと？ という顔で城山が片眉を下げる。」

「お金が大変なのに、よくわからない生き物まで出てくるなんて……」

「……」

「大変というほどの相手でもなかったんだが……」
言いかけて奈々華が自分の体をかき抱くようにしているのに気付いた。指先が小さく震えいてる。

城山の胸に様々な感情が去来する。それらが入り乱れる様は、正し

く迷いといえた。城山は知っている。人が何かに迷う時、大抵答えはわかっている。それを十全するにあたって、障害があることが原因なのだ。心理的であつたり物理的であつたり。

「……ご馳走様」

箸を置いた城山。その音にピクリと体を震わせた奈々華が立ち上がった城山を見る。あ、と小さく奈々華は呼び止めかけた。けど結局彼女の頭にあつた言葉は露となつて、代わりにお粗末さまでしたとだけ口にした。俯いてしまふ。その様子は城山にとって耐えられるものではなかつた。

「キミが嫌じゃなければ……」

「え？」

「キミが嫌じゃなければ、俺が守るよ」

城山はまるつきり事務的な口調で言つた。自分の分の食器を重ねて持ち上げ、最後に照れたような、申し訳ないような、気弱な笑顔を浮かべた。

「あんなのにまた襲われても大丈夫だから」

それだけ言つて流しへと向かいかけた背へ遅れて声が掛かる。

「お兄ちゃん！」

「へ？」

「いやじゃない！ いやな…… わけがないから」

お願いしますと頭を下げた奈々華の声は少しかすれていた。

「アレを誘うですつて？」

十河が大きな声を出した。対して三好は随分落ち着いた調子で、そうよと返した。西日の差す室内に居るのは十河と三好だけ。誰かに聞かれる心配はないのだが、それとは別で三好は煩そうに、なおも纏る十河を三白眼で見つめた。

「聞き分けな子ですね。だから一度接触してみたらと、言つたでしょう」

「その接触自体が危険だと言っているのです！」

新調した畳に十河がドンと拳を置いた。三好に割り当てられた部屋は、彼女の趣味から和装である。漆喰の壁には浮ついた装飾はなく、カレンダーが画鋏で留めてあるだけで、小窓も簡素なものだった。

「そうは言うけど、流石に相手も野獣ではないのだから、真昼間から荒事になるわけではないでしょう」

落ち着いてはいるが、それは自己に暗示を掛けているかのように、さつきから繰り返された言葉だった。すっと目を細めて三好はちやぶ台を挟んで対面する十河を見るが、納得した様子は微塵もなかった。信楽焼きの茶碗のへりに目を落とす少女からは反駁の言葉を探している空気が感じられなかった。

「今は少しでも戦力を強化しておく必要があるのは、貴方もわかっているでしょう？」

先に言葉を重ねたのは三好で、それは正論で、十河も額に手を当てて渋々頷いた。

「ですが、アレの目を見たでしょう？ わたしは今まで生きてきてあんな目をする人間を見たことがありません」

それは三好にしてもそうだった。だが何となく、本当に何となくではあるのだが、アレが酷薄さだけでああいう目をしているわけではないような気がしていた。

「とにかく、わたしは反対です」

三好はこれ見よがしに溜息をついてから、

「貴方がわたしを心配してくれるのは嬉しいのだけど、人事の最終決定はわたしにあるのですよ？」

いささか卑怯ではある、とは自覚していた。是非を話しているのであって、権能の話をしているのではない。だがこう言ってしまったのは、十河としては黙るしかなく、果たしてその通りになった。

「……無茶はしない。危ないと思えばすぐに身を退くから」

「はい……」

お気をつけてとだけ蚊の鳴くような声で残すと、十河は部屋を辞し

て行った。ごめんなさいと見送った三好は、膝元に置いたクリアファイルを取り上げる。渦中の人物の来歴が仔細に載っている。

「城山仁…… 吉と出るか凶と出るか」

それを胸に置いて、パタンと仰向けに引っくり返った。天井の木目が、あの感情の全く見えない瞳に見えてきて、くるりと寝返りを打った。

第六話：接触

9月4日（SUN）

まずいな、とは思っていても、何ら良い方策が浮かんでくるわけでもなく、城山は頭を抱えたい気分だった。職のことである。求人情報誌を手当たり次第漁り、インターネットも駆使して探してみているものの、如何せん条件が厳しすぎるのだ。城山の見立てでは当座をしのぐだけでも月20万程度の収入は欲しい。バイトを掛け持ちして月30日くらい働けば何とかなるかもしれないが、それにしても来年以降の二人の学費を出そうと思えば月々いくらか貯金しなければいけないことか。そもそもそんなに働いていたら城山は発狂しかねない。

「ああ。はねられるしかないのか？ 月2回くらいはねられたらいいけるか？ 現行犯以外では立証されにくいって聞いたこともあるし……」

左腕を見る。消毒とかゆみ止めを塗布して包帯を巻きつけただけの応急処置だが、病院にも行かないで快方に向かっている。無駄遣いしたくないというのもあるが、実際明らかに肉食獣に噛み付かれたような傷痕を見せるわけにもいかなかった。奈々華は幾度か病院を勧めたが。

「ああ。ひよつとして煙草もやめなきゃならんか？ つーかパチ屋なんて行ってる暇なくなるのか？」

げっそりした顔をする。言ってる端から煙草へと手が伸び、ラスト二本になっているのに気付く。ふいーと息を吐いて立ち上がる。はたと気付く。今履いている短パンは一昨日血潮を浴びてそのまま洗濯もしていない。なにやら生臭い匂いがしたので、外に一日干しておいたのだが、今度は何と表現していいのかわからない匂いを放ちだしたので回収して芳香剤を掛けたら何とかなるかもしれない

レベルに落ち着いた。城山は普段コインランドリーを利用しているのだが、ものぐさがたたって週に一度くらいしか行かない。

「まあ、いいだろう。コンビニ行くだけだし」

一つ伸びをして、部屋を出る。奈々華と廊下で鉢合わせた。

「あ、おはよう」

「う、うん。おはよう」

「あのね、今から朝ごはん作るけど、良かったら……」

「いや、悪いし。俺は外で済ませるつもりだから」

「……うん、わかった。ごめんね」

こっちこそ、悪いねと互いに謝り合ってから、城山は階段を下りて行く。一昨日は夕飯も共にしたのだが、それ以来奈々華はこうしてちよくちよく飯に誘う。城山はこう思っている。ありがたいことだが、甘えすぎちゃいけない。自分が彼女を守るのは、義務なんだ、と。

今年の夏はしつこい。コンビニへと歩くだけでベツトリと汗をかき、それをシャツが吸って重たくなって余計に足運びを悪くする。頭がじりじりと焼かれているのがわかり、城山は帽子でも被ってれば良かった、いやあれを被ると蒸れるんだ、なんて取りとめもないことを考えながら歩いていった。

「そっぴい、飯も食ってなかつたな」

奈々華は朝飯だが、城山のは夕飯である。時刻は午前8時半。城山は帰ったらシャワーを浴びて眠りに就く頃合だ。コンビニで済ますか、どこかファミレスでも行くか、牛丼屋は遠いな、などと頭の中で地図を巡っていると、

「すいません」

女声がした。城山は自慢ではないが、人によく声を掛けられる。道を歩けば外国人や不案内なよそ者に道を尋ねられ、パチンコ屋に行けばお年寄りに目押しを頼まれたりする。慣れたもので、小間使い

のようにはいはいと振り返る。随分若い女性、というより少女だった。歳の頃は奈々華とさして変わらないように映る。やや短めの髪を横で結んでいて、猫の髪飾りで前髪を左右に分けて留めている。目元がすつきりしていて、唇が薄く、小顔だった。美人と分類して良いような顔立ちだった。城山はちよつと顎を触ってから用件を聞いた。

「道をお尋ねしたいんですが？」

「ええ。どちらに行かれるんですか？」

駅前のファミリーストランの名を少女は告げた。城山は簡潔に道を示した。それじゃあと立ち去ろうとすると、

「ごめんなさい。もしよろしければ案内していただけませんか？」

何しろこちら辺は初めて来たものですから……」

「すいません。僕はお腹が空いていて、眠たくて、煙草が吸いたいです。ズボンも臭いんです」

「は？ズボン？」

「あ、いや。なんでもありません。兎に角そういうわけですから今度こそ去ろうと思ったところで、少女にシャツの裾を引っ張られる。城山は億劫そうに振り返った。

「あの、お腹が空いてるんなら、わたしと一緒に行きませんか？」

お礼にご馳走しますよ？」

「……」

城山は黙考する。だがすぐに頭を振って悪いからと断る。それでも少女は誘う。ファミレスの気分じゃないとも言ってみた。それでもご馳走しますから、と押し返してくる。あんまりしつこくて城山の方が折れてしまう。何より道端ですったもんだしている時間にも汗が噴出しているのが大きかった。わかりました、と溜息混じりに答える。まあ美人局にしても宗教勧誘にしても、最終的には城山には一番原始的で確実な解決手段があった。

白い建物に赤い看板がトレードマークの全国展開のファミリース

トランに着いた。そこまで大きくないがいつも食事時は混み合っている。味がとても良いわけでもなく、接客に目を瞠るものがあるわけでもなく、料理が早く出てくるわけでもないが、立地の勝利というヤツである。

「ここですよ」

城山は立ち去ろうとするが、少女にまたしても裾をつままれる。

「望みどおりご案内差し上げたじゃないですか？ これ以上何か？」

「ご馳走するとお約束したじゃないですか」

「いいですよ。うんこもしたくなってきたし、もう帰ります」

「う…… おトイレならここにもありますよ」

飯を控えた相手に汚い話題を振れば怒って帰してくれるかと考えたのだが、どうも相手はそれ以上にしつこいらしく、城山はあからさまに嫌な顔をする。

「貴方なんですか？ ストーカーですか？ 遠くからコソコソ見ていたり、逆ナンみたいな真似してうんこをさせないようにしたり……」

「う…… おトイレはどうぞご自由に！」

コホンと咳払いする。

「それより、気付いてらっしゃったんですね？ お人が悪い」

「……」

「そうです。わたしは一昨日の貴方の圧倒的な力を見込んで是非お願いしたいことがあります、このような形を取らせていただきませんでした。ご不快になられたのであれば謝ります」

そう言って少女は頭を下げてみせた。城山はその頭の天辺にある渦巻きを思いきり突っついてやりたい衝動に駆られた。

「お断りします。失礼ですが随分図々しいお話だと思えます」

「勿論タダでは申しません。見合う報酬をご用意させていただきます」

少女が顔を上げて瞳を輝かせる。

「……」

「失礼ながら貴方のご近況は調べさせていただきました。ご入用でしよう?」

城山の顔からついに貼り付けていただけの愛想笑いすら消えた。少女は怯んで半歩後ずさりかけた。かけたが、どうにか踏みとどまって城山の目を真正面から見据える。

「悪いようには致しません。お話を聞いてくださるだけでも良いんです!」

第七話：COULD YOU HELP ME？

人間は溺れば藁をも掴むというのは本当なのだな、と城山は思う。常識で考えて、どう見ても城山より年下の少女に彼を満足させられるような報酬を用意できる資力があるというのはかなりレアケースである。考えられるとすれば余程の金持ち。そういう一回転でフリーズをひくような幸運を夢見てしまふ。

「信じられないです。一体どれほどトイレに居るんですか」

「いえ、僕が本気を出せばこんなものではありませんよ？」

「ただ溜め込んでるんですか！」

額に手を当てて首を大きく振る少女。

「写メールがありますか？」

「見ません！」

城山は座ったはしから腰を浮かしてポケットに手をつ突っ込みかけて、残念そうな顔をして座りなおした。少女はまたコホンとわざとらしい咳払いをする。先程も感じたが、城山はそこに随分芝居がかった雰囲気を感じていた。無理に威厳のようなものを出そうとしているかのような。

「自己紹介が随分遅れてしまいました。わたしこういう者です」
テーブルの対面からすつと名刺が伸びてくる。

< 国家公安委員会 異質犯罪対策部 部長 三好ハル >

下の方には携帯の番号が載っている。

「イタズラ電話をしても良いですか？ 毎日」

「やめてください！ というか他に着目する点が幾つもあるでしょう！」

「良い名前ですね。ハルさん」

「え？ そ、そうですか。ありがとうございます」

「まあ今は夏ですけどね」

「……」

城山の前に料理が運ばれてくる。ロースカツ定食だ。盛り合わせのキヤベツに胡麻ドレッシングを掛けながら言う。

「聞いたこともない部署ですね。まあもともと公安の部署なんて一つも知りませんが」

「テキトーですね」

「異質犯罪つてのは、あの妙ちくりんな生き物が起こす害悪のことですか？」

「妙ちくりんという言葉を久しぶりに聞きました…… そうです、よくわかりましたね」

「犯罪、ねえ」

「何か？」

「いえね、あれと対峙してみたんですけど、確かに多少は知恵はあるでしょうけど、そこまで自律した意思があるようには思えませんでした。犯罪というには……」

「食べながら喋るなど教わりませんでしたか？ ご飯粒が飛んで来たんですけど？」

「あ、すいませーん。ドリンクバー追加お願いします」

「聞いてください」

三好は溜息を吐いて、先に頼んだドリンクバーで持ってきた珈琲を啜る。しかしすぐ口を離してやや顔を顰めてガムシロップをあけて注いだ。これで三つ目だ。

「最近この辺りで変死体が見つかる事件が多発しているのはご存知ですか？」

「ええ。ミイラになった女子大生、バラバラにされたサラリーマン、首だけ見つからない小学生……」

「そう。そういうった事件の真相は…… 全部貴方が対峙したような異形のものたちの仕業、異質犯罪というくりになります」

「へえ」

興味なさそうに城山は呟く。カツの配分を間違えたのか、ご飯が多くあまってしまっていて箸を宙に彷徨わせていた。

「まさかあんな化け物、わたしたちは妖魔と呼んでいます、あんなの仕業ですと公表するわけにもいきませんかでしょう?」

「そうですね」

「聞いていますか?」

「はい。チヨリソー頼んで良いですか?」

「……どうぞ。続けます」

近くに居た店員にチヨリソーと生ビールの追加を頼む。注文を繰り返してウエイトレスが去っていくのを待ってから三好は話を続ける。「これは追々話すつもりだったんですが、貴方が仕留めたもの他にも多くの妖魔が居ます。当然中には高い知能を有するものも居ます。また貴方が仕留めた獣染みたものでも、実際に獲物呼び込むという意思を持って行動しています。ですからわたしたちとしては犯罪と呼称するにあまり抵抗はありませんね」

「なるほど」

「そしてわたし達はそういった多種多様な妖魔たちの魔の手から一般人を守ることを目的に結成された組織です」

「なるほど」

「わたし達は力を欲しています。人々を守る力。いくらあっても足りすぎるということはありません」

「なるほど」

「ですからわたし達に貴方の力を貸して欲しいんです」

「チヨリソー食べますか?」

「いいません。わたしの話信じていただけましたか? お力添えを願えますか?」

ふむ、と城山は小さく頷いてから、ややあつて口を開いた。

「貴方のお話はどこまで本当かは知りませんが、一応信じるに足るものはあるでしょう。僕はその妖魔だか羊羹だかを見て退治したわけですし、貴方の話には筋が通っている。またこんな手の込んだ嘘を言って貴方へのメリットがない。愉快犯にしては現状で高くない」

伝票を持ち上げてひらひら振った。

「では……」

「まあ待つてください。助力は条件次第ですね」

これは失念していたという風に、三好は神妙な顔つきになる。

「大体幾らくらい貰えるんですか？」

「一番稼いでいる者で月に300万ほどでしょうか」

「……随分安いですね」

「……」

「命を懸けて民草を守っているにすれば、そこらの野球選手よりも薄給だ。白球を追うより薄給だ」

「……」

「白球を追うより……」

「聞きましたから！ 正直に言っただけ。我々はあまりお金がありません。まだ部署自体の歴史が浅く、地位もない。わたしだってもっと多く得て然るべきだとは思いますが」

そう言うどぐつと下唇を噛んだ。

「なるほど、そっちにも色々あるというわけですか」

「……お恥ずかしながら」

「妖魔、でしたっけ？ それが出るようになったのはそんなに最近なのですか？」

「正確にはそうだと判明したのが最近、ということでしょうか」

「どういふことですか？」

「ある意味幸運だったのです」

珈琲カップを包むように持って三好は言った。喜んで良いのかどうなのか、判断しかねるといふような顔をした。

「妖魔は昔から居続けたのだと思います。もっともそれも確証を持つて言えるものではありませんが……人が妖魔を見つけれられるというのは矢張り偶然以外の何者でもありません」

「……俺みたいに？」

コクンと三好が頷いた。つまりはそういうことだった。

「それほどまでに生存率は低いのですか？」

「え？」

「あまり強くはないと思ったのですが、まあ一般人には無理か」

「……」

「それで俺のようにあのけつたいな世界から生還した人間が最近になつて現れたと？」

「ええ。しかも幸運なことに、二人もです。そしてその二人ともが政府の高官だったことも幸いしました」

それは考えてみればそうかもしれない。例え一般人が生きて戻ってきたとして、どこに話せば信用してもらえるか。それなりに立場ある人間が、秘密裏に人を動かして調べさせて初めて意味を成す。

「それではそのお二人が発起人というわけですか」

「そうなります。今まで変質者や残酷犯の仕業と断定されていた事件も、実は冤罪が幾つかあるのかもしれないですね」

「一応公権力側の人間としてその発言はどうなんですか？」
三好は苦笑する。

「それで、お返事をお聞かせ願いたいのですが？」

もう少し給与の詳細を教えて欲しいと城山が頼むと、本当はダメなのですけどと断った上で、鞆の中から査定書を引きずり出した。城山はゆつくりと目を通すと、はいとだけ言った。

「それは了承の意ですか？」

「一つ、僕が公務に当たって何か物を壊したりしても罪に問われたりしませんよね？」

「はい。身柄の保障については通常の公務員、いえそれ以上の待遇をお約束します」

城山はスツと右手を差し出す。先程頼んだチヨリソーの付け合せのポテトを素手で食べたせいでヌルヌル光っていた。なんとも言えない表情でその手を掴んだ三好は、宜しくお願ひしますと言ってすぐに放した。

第八話：心地良い睡魔に誘われて

早速、ということ彼らのアジトへと向かうことになった城山。道すがら雑談をする三好は緊張から解放されたせいも、よく喋った。城山の方は時折聞き流すような感じになってしまったのは、腹も一杯になって本格的な睡魔がやってきていたからだ。一旦家に戻った城山の車で向かっていた。働くのだったら早目に道を覚えておきたいと言った頃にはまだそこまで眠くはなかったのだが、冷房を掛けて優しく車に揺られているうちに怪しくなってきた。三好のお喋りはそういう気配を察したせいもあるのかもしれない。

「第一印象と随分違いました」

「そうですね」

「とても怜悯な人なのかと思えば……」

その先は控えた。城山は眠い頭でも彼女の言わんとしていることは何となく理解した。

「テキトーでふざけた男。ズボンが臭い」

「ズボンは知りませんが」

「まあテキトーもそうかもしれませんが倫理観が希薄だと思っておいて下さい」

「ええ。警察に止められたらわたしの手帳を見せて追いついてくれなんて…… 飲酒運転ですよ？」

「知ってますよ。まあ本格的にやばそうだったら車停めて寝ます」

「そうならわたしはどうすれば良いんですか？」

「知りませんよ。一緒に寝るもよし、歩いて駅まで行って帰るもよし」

見たまま三好は城山より二つほど若く、18だと言う。よくそんな歳でイチ部署の責任者を任されたものだと言つて、曖昧に笑っただけで、城山はそれ以上その話題はしなかった。

「……そこを左ですよ」

城山がハンドルを切る。後ろからファーンとクラクション。

「あ、いけね。指示器出すの忘れてた」

「ちよつと本当に大丈夫なんですか？」

ずつと喋り続けているというのに、眠気がおさまらない。やむなく城山は近くにあった公園の外周に車を停める。少し奥まっついてあまり警察に見つからなさそうな場所をちやつかり選んでいる辺り、本当に三好が去っても良いと言う意思表示だった。

「ダメです。もう瞼と背中がくつつきそうです」

「寝るんですか？」

「はい。八時間も寝れば大丈夫だと思います」

「信じられない人ですね。ココは話を進めて行く場面でしょうか？」

フレッシュな気持ちですぐに職場に行つて早く馴染もうとするものでしょう？」

寝息が聞こえてくる。ブシューと変な音が口の端から漏れている。

三好はここに来て凄まじい後悔に襲われていた。こんなヤツを勧誘してしまったのは失着ではないだろうか。というより、この男は本当に一昨日見た男と同一人物なのだろうか。世の中にはそっくりな人間が三人は居る、という話もよく聞く。なのに…… 城山の屈託のない寝顔を見る。知らず毒気を抜かれている自分がいる。

「こんなに下らない話したのは随分久しぶりな気がします」

体を捻ると後部座席に置いてある毛布を二枚取り上げ、一枚を運転席の男に掛けてやった。そして一枚は自分の体に掛け、頭から被る。
「……煙草くさいです」

ゆっくりと体を揺さぶられる感覚。そして、

「起きて下さい」

随分と優しい声に誘われて、城山は目を覚ました。一瞬ここがどこで、目の前に居るのが誰だかわからなかった。何度か目を擦って焦点を合わせてやっと状況を思い出した。

「おはようございます。ええつと、ミハルさん」

「三好です。ハルは名前です」

「そうでした。三好さん、随分暗くなってますね」

「もう十一時ですから」

城山は尋ねておきながら聞いているのかいないのか、大きく伸びをしてあくびをした。ついで顎の辺りを触り鼻先を触り、

「鼻毛出てませんか？」

「今更ですね。今日お会いした時から飛び出していましたよ？」

「そうですね。それは重畳です」

「何が重畳ですか。もう夜中の十一時ですよ？」

「ええ。野球どうなったんでしょうか？ 三好さんはどのファンですか？」

「横浜ドルフィンズです」

「おお、同志。僕もですよ、今年こそは五位に浮上できるかと思っただけですね」

「アレは監督が悪いんじゃないです。体質ですね。じゃなくて！」

「すいません。でも貴方は良い人ですね。結局付き合ってくれてたんですね」

「……わたしも眠たかっただけです」

部署の責任者ともなると多忙を極めるのかもしれない。城山の頭に少し詮索欲が持ち上がったが、聞かないでおいた。

「うんと、どうも本当に申し訳ないです。流石に寝すぎました」

三好は何が可笑しいのか、クスリと笑った。

「それも今更じゃないですか。慇懃無礼とは貴方のためにある言葉です。ですが、それはきつとわたしにも当てはまるのでしょうか」

そう言い切るとクスクスと堪えきれないように声を立てて笑い始めた。

「どうしてわたし達は初対面からいきなり言いたい放題だったのでしょうか？」

「まあ、僕は貴方のことを怪しい美人局かなにかだと思っていましたからね。実際今もまだ本拠地に行くまで半信半疑ではあるんです

けど」

すると三好は笑みの質を変え少し照れたような表情をする。よくわからない反応に城山が、色々頭をめぐらせると、どうも美人局と考えられるほどには綺麗だと、容姿を褒めたように取られたらしいという推測に行き当たった。ポジティブな女だと呆れる。

「わたしは貴方がそれこそ残酷な人だと思ったから、せめて舌戦では負けないようにと」

「……」

「お気を悪くしましたか？」

「いえ、そのうちわかることです」

うん？ といった感じで小首を傾げる三好。

「えっと、それで城山さん？ 城山さんでよろしいですか？ 仁さ

んとお呼びしましょうか？」

「好きに呼んでくださって結構です」

「えっとでは城山さん。それで職場の方なんですが」

「はい」

「もう遅れてしまったところの話ではないので、明日改めて尋ねてくださいませんか？ 今日のところは建物の前までお越しいただいて」

構いません、と答える。なんでも夜はあまり妖魔がうろつかないところで、これくらいの時間になると職場に詰めている人間も少ないということだった。明日なら少し無理言っただけなく多くの同僚を集めるからと言う話で纏まった。

第九話：EQUALITY

9月5日（MON）

城山奈々華は自分の無力さを再認識した。昨夜帰って来た兄から話を聞かされた。最初こそ喜びもした。何せ職が決まり、基本給で100万は下らない仕事だという話だったのだ。プラス出来高払いもあり、二人が暮らしていく分には十分で、来年度以降の学費についても光明が差した。

しかし仕事の内容を聞くに、顔が青褪めていくようだった。奈々華は兄の強さというものを十分に理解しているつもりだ。だが、それでも万が一ということがあるのも世の常だとも知っている。加えて勤務形態についてだ。兄が言っていたように、休学のような形にならないが、学生という点をあまり考慮してもらえず、夜勤も出る可能性が高いという話を聞いて、ますます不安になった。命の危険、学業への支障。ただでさえお世辞にも勤勉とは言えない彼が仕事にかまけて留年などをしてしまつては本末転倒である。その危惧を話すと、既に留年はもうほぼ確定しているから心配ないと返ってきた。何が心配ないのだろうか、彼の思考回路がわからなかった。

とはいえそういった諸般の事情があるにも関わらず、実際に違う職を探せと強く言えないのも辛いところではあつた。彼の言葉を引用すると、俺にはこれくらいしか取り得がないからね、ということだった。実際彼に限らず、大学生の身でそれほどの額を稼ぐ仕事といつたら何か抜きん出た一芸を發揮する職以外には考え付かない。

「はあ。しょうがないのかな」

しょうがない。その自身の言葉にも罪悪感がこみ上げる。自分もバイトをして二人で学業に差し障らない程度で働けば、もしかしたらどうにかなるかもしれない。その道は当然提示した。だがそれだけ

はダメだと強く言われ、何も言えなくなっていました。そう言った彼の目に少なからぬ愛情を感じた。嬉しくなっていましたたわけである。我ながら恐ろしく単純だと、奈々華は呆れかえる。そしてまた自分が我を通して働くと頑なに主張すれば、兄を困らせてしまうかも知れない。果ては嫌われてしまうかも知れない。そう考えると、兄の命や将来を守るためののに、それなのに……

階下から兄が自分を呼ぶ声がある。相変わらず「奈々華ちゃん」と他人行儀に聞こえる。あまり妹に深く関わらなくなった兄が何故その妹を呼びつけるのかと言えば、一昨日の守るという約束の遂行のためだった。これもまた一層彼女の無力感を助長した。そしてまた全身から湧き上がる喜びも抑えられない遠因だった。

「今日だったよね？ 初出勤」

「うん、まあ」

城山には、彼女がどうしてそう嬉しそうに話すのか、理解が出来なかった。彼女の性格からして、まさか自分が働き始めて生活が安泰になるだろうと短絡的かつ利己的な喜びに支配されているなんてことはないはずである。ふと笑む。それだけ薄情ならもっとやりやすかったろうに。

「ごめんね、わたしも働けたら良いのに」

「いや。キミは学業に専念するんだ。友達とも沢山遊ぶんだ」

「……」

ほら違った、と城山は誰にともなく思う。彼の妹は優しく慎み深い。「俺はそうやって高校を卒業したんだ。キミにも当然にその権利がある」

城山は頭一つ小さい妹を目だけで見る。

「親父がどうかになったとか、金がないとか、それはナシだ。兄妹間で不平等があるなんておかしな話だろう？」

話はお終い、とばかりに胸のポケットから煙草を取り出そうとして…… やめる。奈々華が自分の横顔へ視線を注いでいるのに気付い

た。
のんびりと歩く奈々華。遅刻は万が一にもない時間帯で、周囲にちらほら見える学生も、見た目だけではわからないが、一様に真面目そうだった。

「ありがとう。お兄ちゃんは…… やっぱり」
城山は周囲から目を戻して妹を見た。奈々華は言いかけた言葉を引っ込めて、にこりと笑った。

奈々華を学校まで護衛し、家へと引き返そうとしたところで城山の携帯が着信を告げた。三好ハルと表示されている。僅かに顔を顰めて取る。

「なんですか？」

「なんですか、とはいきなりご挨拶ですね」

「僕は帰って一眠りするところなんです」

「眠らないでください。どうせ、貴方のことですから一時間くらいは遅刻とも思わないでしょう？」

三好はそれほど多くの時間を城山と過ごしたわけではないが、話して五分もしないうちにとってもいい加減な性格だということくらいは掴んでいた。

「アラームはかけていますよ。約40パーセントの信頼度があります」

「その40パーセントとは何ですか？」

「起きる可能性です」

「……今から来てください。少し早いですが、呼び出しに応じてくれた者たちもチラホラ集まり始めています」

「お昼の約束でしょう？」

「貴方が先に反故にすると言い出したんじゃないですか」

「反故にするとは言っていません。約15パーセントの確率で時間通りに伺うと申し上げているじゃないですか」

「なんで減ってるんですか！」

城山は時間通りに起きられる確率が四割と言っただけで、そこから二度寝入りやパチンコ屋へ吸い込まれるという可能性については言及していなかった。

「いいから来て下さい。まさか毎回出勤の数時間前に電話をしなればならない、なんてことにはならないですよね？」

大丈夫だと安請け合いしてから電話を切る城山は、しかし逆のことを考えていた。遅刻についての減給等々の処罰について聞いていなかったし、取り決めていなかったな、と。

第十話：よろしく願います

城山の家からだ、職場までは片道約一時間ほどだった。これから中道なんかを探ればもう少し短縮できるだろうかと考えながら、時計を見る。朝の十一時を少し回った頃だった。見上げる。

城山が住む街よりやや都会で、ビル群が並び立つ中であって、一際大きなビルだった。横幅も奥行きもかなりあり、このビルのテナントを二階ぶつちぎって借りているという話を聞いたとき、そんな金があるならもつと従業員に還元してくれても良いのではないだろうかと思った。

外見は瀟洒な感じではなく、かつちりしたオフィスビルといったところ。マジックミラーのように中が窺えないガラス張りで、逆に中からは外の風景が丸見えだった。果たしてそうやって全面ガラス張りにしたからといって中の人間は、気分転換に外を眺めたりするのだろうかと疑問に思う。ビルの向かい側もまた似たようなビルで、せいぜい自分と同じように缶詰にされて働いている人間が向かいにも居るんだろうと思いついて巡らせるだけで、それは寧ろより気分を滅入らせそうだが。ともあれガラス張りは城山が立つ側だけであり、反対側はキチンと壁になっている。

「よく来て下さいました」

見上げていた城山は、声に顔を落とす。ビルの入り口から三好が惘然とした表情で出てきた。言葉とは真逆で歓迎されている雰囲気はない。

「どうかしたんですか？」

「いえね、今日新人が来る予定だったのですが、その人に八時過ぎに連絡を入れたのに、到着が十一時とはこれ如何に、と思ひまして」「ああ、道を走っていると、大きな荷物を持ったおばあさんが居たので、はねておいたんですよ」

「最低ですね！ もつとマシな嘘は本当になかったのですか？」

二度目だというのに、もう随分言葉のキャッチボールがスムーズなのだが、三好は自分でもその理由がわからない。肩透かしを食らったと言っても良い。馬鹿でいい加減ではあるが、凶暴性や残忍な面は全く見られない。

「まあ良いじゃないですか。当初の予定よりも早く来たことには変わらないんですから」

それはそうですけど、と三好は釈然としないまでも駐車場のパスを渡した。警備もすっかりしたビルで、許可のない車両は、警備員に門前払いされる。昨晚ここまで来た時に三好にそう説明されていた。それを片手で受け取ると、路肩に一時駐車させていた車へと向かう。

七階に到着すると、三好の先導で降り立った。城山はおのぼりさんのようにキョロキョロと首を左右に振っていた。間仕切りというよりきつちりと柱が立っている。何の話かと言うと回廊になっているのである。そしてその回廊の左右に襖が貼ってあって、ちょっとした武家屋敷のようになっていのである。回廊というからには中心があって、そこは一際大きな部屋のように、襖が全面にあり、その回廊のどこからでも入れるような仕組みになっていた。使っている襖も上質な和紙のようで、本物がどうかは城山の目には判断しかねるが、金粉のようなものも貼り付けられていた。

「コレは、また……」

三好は、目を丸くする城山の顔を見て、したり顔で笑っていた。思えば、会ってから向こう驚かされたり、呆れさせたりと受動的であった三好としては、一泡噴かせたような心持ちだった。

「違法改造じゃないんですか？ 民間のビルを公権力をカサにきて……」

「何をドンビキした目で見ていますか！ きちんと許可を取っています。というよりこのビルの所有自体買い取っています！」

「なんだ。札束で頬を叩いたんですか。それならそうと言ってくださいよ」

「何か引つかかる言い方ですが……　　というか他に感想はないんですか？」

城山はふむと頷いて、もう一度首を巡らせてから口を開いた。

「何故和風？」

「わたしの趣味です」

「……なんだ、この女」

「いきなり内心を吐露しないで下さい。良いじゃないですか。落ち着くんですよ」

片頬を持ち上げて白い目で見られているうちに、急に恥ずかしいことのように思えてきた三好だが、何とかそれだけ言い返す。

「で、どうして小部屋がいくつもあるんですか？」

「ええ。それはこれからする業務の詳説とも関連するのですが……」
言いながら、スタスタ歩いて行くと中央の大部屋の襖を開けた。床も板張りになっていて、続く城山が歩くと盛大にキシキシ音を立てた。無作法に眉を寄せながらも、三好は先に入っていく。

「施設の案内も兼ねて、この広間で話しましょう」

広間には既に人の姿があり、城山は首を突っ込むとその面々を順繰りに見回した。女性が二人、三好も含めると三人。男性が三人居た。三好に手招かれて足を踏み入れていく。部屋の中央には長机が二つ向かい合わせに置かれていて、パイプ椅子がいくつか引かれていて、それらに先の五人は座っていた。奥にはホワイトボードがあって、それがこの純和風の入れ物の興を完全に殺いでいた。

「挨拶くらい出来ねえのか？」

部屋の装いを見ていた城山に、不意に無遠慮な声が掛かる。城山が机の方に視線を戻すと、三人居た男の一人、ガタイの良い、しかし少し太り気味の男が声を発していた。のっぺりとした顔の口元にヘラヘラ厭味な笑みを浮かべていて、瞬間的に城山は相容れない人種だと察した。その隣に腰掛けた男、背格好は城山よりやや小柄、が男の制止に掛かる。さっぱりとした顔立ちだが、顎が細く、鼻筋が通っていて、中々カッコ良い。

「おい、やめろよ。牛島」

ウシジマと呼ばれた男は、煩そうに制止した男に手を振ると、

「なんだ。期待できる新人が来るって三好が言うからわざわざ来てみたら、こんな無礼で弱そうなガキじゃ、休日出勤してきた俺の立場がねえつてもんだ」

「さんをつける、牛島」

女性の一人も制止に加勢する。

「んだよ。ガキ同士仲良く出来そうってか？」

牛島の言うとおり、その女性は若そうだった。城山が見たところ、三好と同年代に見えた。あまり化粧気がなく、髪も乱雑に後ろで括っているだけのようだった。近頃は男性がやるような髪型だった。それでも素材が良いのか、中性的な顔立ちはそれなりに色気があった。

「いつからココはガツコになったんだよ。こんな奴等に武器持たせるなんて正気を疑うぜ」

「牛島！」

いきなり不和を見せ付けられている城山は、どう反応してよいものか、三好を見た。そこに諦観のようなものを見出し、牛島という男はいつもこういうものなのだと理解した。それが良くなかったらしい。無視されていると勘違いしたようで、牛島は立ち上がって顔を赤くしていた。

「てめえの話してんだよ！ 聞いてんのか？」

城山の方を指差す。

「何とか言ったらどうなんだ？」

「……なんとか」

ブチンと音が聞こえたような気がした。牛島は腰の刀を抜き、制止の男が肩に置いた手を乱暴に振り払うと、猛烈な勢いで城山へと走りこんだ。誰かの悲鳴が響いた。城山はそれが三好のものだとわかると、一步彼女の前へ飛び出して、腰を落とした。ぐっと腕に力を巡らせるイメージ。拳の先へとそれが収斂されていくイメージ。鉄

をも砕く程に凝縮されていくイメージ。上段から振り下ろされてくる刀が随分ゆつくりと映る。突き出した拳の、骨の部分が鉄を砕くんだ。そのイメージ通りに拳の最も硬い部分を刀の刃の部分にぶち当てる。バキンツと鋭い音がして刃が砕ける感触を城山は感じた。同時に拳に鈍い痛み。だが引くことはなく、そのままの勢いを以って男の顎を殴りつけた。骨の砕ける嫌な音が部屋中に響いて、それは悲鳴や怒号を掻き消すほどだった。

牛島の体から力が抜けて、ドサリと腹這いに崩れ落ちた。

第十一話：SHOW YOUR MONSTER

三好ハルは、自身の油断を認めないわけにはいかなかった。実は悪い男でもないのかもしれない、与し易いとまではいかずとも、存外理知的な男なのではないかと考え始めていた矢先のことだった。実際その考え自体も直ちに改めるには早急が過ぎた。振り返って大丈夫ですかと尋ねる男の目には少しの親愛がこもっていた。一筋縄ではいかない男。それが現状最もしっくりくる表現かもしれない。三好が状況整理に頭を働かせながらも、小さく頷くと、それ以降広間には音がなくなった。

丸々三十秒は沈黙が続いたところで、居合わせる一人が声を上げた。

「まあまあ、怪我をしてるわ。診せて御覧なさい」

女性だった。さっき制止に加わっていない方である。白衣を着ており、下に着た服は少し胸元が開いていて、近づかれて城山は視線を意図的に逸らした。女性のふちなし眼鏡の奥で心配そうな瞳が揺れている。

「小松さん。手当ての順序が逆です」

三好がやっとかさ声を出す。自分で思うより小さな声だったのか、補足するように指をさした。先ではうつ伏せた牛島がピクリともしていなかった。小松と呼ばれた女性はキョトンとした顔で皮のめくれた城山の拳と、牛島の体を見比べた。その体に寄っていく人影。「意識が戻っていない状態だし、最悪このまま死ぬかもしれない」制止に掛かっていた色男が、牛島の巨体をひっくり返し、気道だけ確保した。牛島はだらしなく口や鼻から血を垂らしていた。

「ああ、まだ生きていたんですか？」

素っ気ない言い方をする小松。彼女が牛島にしつこく言い寄られて迷惑していたのは、ここに居る人間で知らない者は居ないほどで、城山を除くが、不謹慎と誹る声はなかった。そもそも、先程の様子

からも牛島が好人物など思っている人間は居ないようで、城山に非難めいた目が向くこともなかった。

ただ好奇の目というか、感嘆のようなものは城山は感じていた。しかし二対だけは違った。三好と二番目に制止に入った少女、十河である。三好はただ困ったことになったという感じだが、十河の方は明らかに敵意を持って城山を見ていた。敵意である。彼のやったことを非難するような色ではなく、もっと根源的なものに根差しているような感じだ。それは恐怖であると、城山は経験則から知っている。振り下ろされる刀をぶち抜いて、男の顎を叩き割るような真似、尋常ではない。感嘆や好奇とは逆ベクトルではあるが、それは人としては当然の反応かもしれない。パンパンと手の平を打ち鳴らす音がした。三好がやつと事態の収束に動いた。

「ほら。音邑さんと真田君は牛島さんを運んで。タンカがあつたでしょう?」

真田というのは、先程の好青年で、音邑というのは、唯一事態に何ら干渉していないサングラスの男である。アゴヒゲをたっぷり蓄えており、耳に黒いピアスをしていた。サングラスは濃い色でその奥の双眸を城山が窺うことは出来なかった。前者は快い返事をして、後者は黙って広間の奥、押入れのような場所の襖を開けてタンカを持ち出した。しばらく四苦八苦した後、牛島の体を乗せると二人は部屋を辞して行った。

「城山さん。座ってください」

やや冷たい言い方をした三好は、先立つて中央側、入ってきた方角からは一番奥のパイプ椅子に腰を下ろした。城山は言われたとおり、末席であろう、机の一番端に座った。丁度三好とは対角線上に位置する。立ち上がっていた女性陣も做った。小松は城山の手当てを、などと見当違いの抗議をしたが、十河に腕を取られて座った。

「いきなり問題を起こしてくれましたね」

「あ、すいません。斬られそうだったんで殴りました」

「知っています。その、わたしを守る意思もあつたようですし……」

三好は言いにくそうに俯いてぼそぼそ喋り、

「あちらにも相応の非があったということで、今回は不問とします。一般の刑法に照らし合わせても十分に正当防衛の範囲でしょう」

と結論づけると、それについては残った女性二人も文句はないよう
で、十河は小さく、小松は大きく頷いていた。

「貴方が殴つたのは、牛島浩輔、つししまこうすけタンカで運び出して行った一人、若い方が真田啓、まなただけいヒゲを生やした方が音邑拓心、おとむらたくしん」

紹介のようだ。続けて三好は女性たちに目を向ける。

「わたしは小松芽花、こまつめいか一応ここで医師のような真似をしてるわ」
好意的な笑顔である。

「あ、非戦闘員ということ。よろしくね、えっと？」

「城山仁と言います。こちらこそよろしくお願いします」

にこりと笑いかけた小松は、後で怪我を治すからね、と受け答えて隣に座る十河を見た。目を瞑ったきり、さつきから意図的に城山と目を合わせないようにしている。三好がほら、と促すとやっと目を開けた。それでも正面を見たきり、城山の方を向くことはなかった。

「十河由弦だ」

ゆずる、という漢字を城山がアレコレ考えていると、

「城山さん。覚えていませんか？ 先日わたしと一緒に居た……」

三好が口を挟む。

「ええ、そう言われてみれば」

「……」

遠目には男性のように見えた、とは口が裂けても言えない雰囲気だった。

「この子は貴方と同じ戦闘員だから。仲良くね」

小松が二人の間に走る剣呑な空気を知ってか知らずか、のんびりした声でどちらにもなく言う。城山は返事をしたが、十河は黙りこくつたままだった。

丁度その時になって、先の男性陣も帰って来た。城山から二つほど離れた席に真田という若者が座る。その奥に音邑という配置になっ

た。互いに紹介をしていたところなの、と三好が言うと、真田が後に続いた。彼も戦闘員ということらしく、二人は握手した。その後、音邑も見た目通りの低い声で挨拶する。

「音邑さんも非戦闘員で、探索の役目を担っています」

三好が補足説明を入れるが、城山は怪訝な顔をした。すると音邑の方が立ち上がり、

「この通り俺は目暗でな」

言ってサングラスを上げる。両目とも義眼のようで、焦点は城山に合っていないかった。ぎよっとしてしまい、城山はしまったと思う。目が見えない分、こういつた雰囲気には敏いはずだ。だが音邑は気にした風でもなく続ける。

「戦闘なんて芸当は出来ないが、俺には目がある」

「……はあ」

「未来が見えたりするって言ったら、頭までおかしいと思うか？」
城山が何と云っていいかわからず苦笑していると、三好が彼の発言に従う。彼の予言を判断基準に行動の指針が決まると言っても過言ではない、と。城山が苦笑を濃くすると、後々わかるだろうということとそれ以上は説明がなかった。

あらかた終わり、城山がぐるりと各々を見回す。やはり十河は目を瞑ったままだった。早く終わらないか、と言外に滲んでいる。数拍置いて、三好が指示を出す。

「そういうワケだから、今日は皆解散してくれていいです。勤務がある者は戻って下さい」

いの一番に十河、次いで音邑と真田、小松の順で部屋を後にしていく。

第十二話：案内人

真田啓という男は、見た目通りの好青年だった。

城山が広間を辞去すると、真田が待っていた。事前に三好から施設の案内を頼まれていた、ということだった。まず七階を巡った。真田の説明によると、こっちは女性が詰めているということだった。

夜勤になることもあり、また公務の特殊性から、このビルで待機というケースが比較的多いそうで、それぞれが自室を持たされるといふこと。廊下を時計回りに行き、一番北、つまりエレベータから見て一番奥には三好の自室があった。立ち寄ることはせず、続いて歩いて行くと、南東側に小松の部屋があるということだ、
「行ってきな」

真田は城山の拳をチラリと見ると、顎で部屋をしゃくった。自身は柱に背中を預けて腕を組んだ。待っているということらしい。
城山が中へ声をかけると、どうぞと明るい声が返ってきた。やはり歓待の意思が感じられ、やや気持ちを軽くして障子を開けた。途端に薬品のおいが鼻についた。

八階へ上がると、今度は男が自室を構える構図だ。北西に音邑の部屋があるそうだ。他の部屋については城山の知らない人間たちが使っていることもあって、簡単に名前だけを告げていった。さすがに男やもめということだ、廊下に雑誌なんかのゴミを纏めて出している部屋もあり、生活感があつた。

「ほんで、ここが俺の部屋な」

東側の真ん中あたりで、真田が足を止めた。

「お前の部屋はその隣。つまり隣人つてわけだ」
その右を指差して鷹揚に笑う。

「僕も部屋がもらえるんですね」

「当然。ここで働く以上はもらえるさ」

真田は聞けば城山の一つ上で、城山の方はかしこまったが、仕事上も人生上も先輩だというのに偉ぶったところがなく、どこまでも気さくだった。

「入ってみるか？」

城山が頷くと、二人は今は無人の部屋へと入った。こざっぱりとした和室で、六畳くらいだろうか、まあ個室ということなら十分だった。まだ家具類はテーブルと座布団、小さいテレビがあるくらいで、余計に広く見えた。

「冷蔵庫はあとから来るらしい。七階の方には給湯室なんかもあるけど、個室には最低限の設備しかないからな」

「はあ」

「男どもは面倒くさがって茶なんか入れないけど、エレベータの脇に自販機がある」

「ええ」

両階とも同じような位置にあった。待ってる、と残した真田が部屋を出ていく。少しして戻ってきた手には缶ビールが二本あった。自室から持ってきたらしい。

「まあ俺からの歓迎だ。ぶっちゃけ案内なんて言ってもそんなに案内するところもないからな」

「はあ。それなら遠慮なく戴きます」

プシュツとプルタブを開ける小気味いい音が部屋に響いた。しばらくゴクゴクと喉仏を動かしていた二人だが、城山が思い出したように質問を口にした。

「さっき、小松さんの部屋を出るときに、ありがとうと言われたんですが……」

真田はカンを傾けたまま目だけで笑った。

「どつという意味かわかりますか？」

カンをちゃぶ台に置いて一呼吸。

「ああ、あの人は牛島に言い寄られて迷惑してたからな。俺の方ももうやめとけて注意してみてはいたんだが、あの通りアイツはこ

れでな」

そう言つて左耳に指差して、右耳から抜けていくようにもう一方の指を動かした。なるほど、と城山は苦笑して、残った缶ビールに手を伸ばした。随分豪快に煽つて、残り少ないそれを一滴残らず嚙下えんかする。そんな城山の様子を見てると、言わずにはいれなかつた。

三好の鶴の一声で彼の落ち度をあらためるようなことはしない方針であるにも関わらず。それでも、真田はしこりのようなものが確かにあるにはあつた。最後に決定的な挑発をしたのは城山だ。

「平然としてんのな」

真田は少し目を伏せて自分のカンをチャポチャポ揺らしながら言つた。

「何がですか？」

「いや。牛島のことさ。人をぶん殴つて……今は危険な状態らしいのに」

「ああ」

今思い出したというような顔をした。

「ウチの連中も、幸か不幸か生き物が壊れる場面つてのは慣れてはいるんだが……」

言い淀んだ真田は、じつと城山の目を見た。

「まあ加減はしたんですがね。死んでしまったかもしれない」

「そんな」

いい加減な、と続けようとした言葉を飲んだ。

「僕は頭の悪い人間が嫌いでした」

「……」

「つい。死んでも良いかくらいの気持ちで殴つてしまいました」

屈託無く笑う城山に、真田は内心冷たいものを感じた。まるで嫌いな虫を払いのけた、というような、ひどく雑で無配慮な力加減。それを平然と初対面の人間に対してしてしまう。真田も牛島にはほとほと愛想が尽きてはいたし、小松のように迷惑を被っている人間も居たことである。私情で糾弾しようなどという意思は正直到底持ち

合わせてはいなかった。だが、牛島にしても、処罰を受けるなら、それは解雇や懲戒であって、死罪ではない筈だ。

「もつとやりようはあったんじゃないか？ 少し見たただけだから何とも言えないが、お前の力はどう考えても牛島を凌駕するものだろう？」

それも、大人と赤子ほどの差をつけて。

「ああやって無思慮な悪意を向けてくる相手は、正面から叩いた方が遺恨がない」

「……」

「語弊がありましたか？ 遺恨がないというのは主に僕の精神衛生上の話です。後になって、何故あの時ぶちのめしてやらなかったのかと後悔しないように、ということですよ」

真田は絶句した。どこまでも利己的で横暴な言い分だった。怒り狂って見境のなくなった牛島から、三次を守るため、という大義を掲げるものだと、真田は思っていた。だが実際にこうして対峙して、理由を聞いて、人となりを少しはかつてみれば、牛島がまだ可愛いものだと思えるほどの欠陥を抱えていた。一見物腰も柔らかく、人として大切な部分、包容力や他者の痛みへの共感といったような感情が欠落しているようにも感じられないのに、恐ろしく残忍だった。「電気は、通っているんですか？」

城山は話したいことは話してしまったようで、もう牛島のことなど興味がないという風に部屋を見回しながら尋ねた。

「あ、ああ。もうテレビも点く」

真田は当惑したような顔で答えた。

第十三話：ANALYSIS

七階には城山一人で戻ってきた。もう場所はわかっているので、案内は不要だった。三好の部屋へと声をかける。案内が終われば真田は城山をこちらへ連れて来るように言われていたらしい。

「城山です」

「あ、はい。どうぞ入ってください」

三好の部屋の襖は中央の広間と似たような装飾があつて、重厚な雰囲気だった。他の部屋とは一線を画しており、そこが責任者の部屋であるということを訪者に再認識させる。

スルスルと襖を左にずらしていくと、三好のほかに十河の姿もあつた。二人はちゃぶ台に向かい合つて座つていて、茶菓子などを堪能していた。上質な和紙を破いてオカキを取り出していた三好が顔を上げる。

「どうでしたか？ 真田君は中々の好人物でしたでしょう？」

「ええ、そうですね。とても良い方でした」

城山は自分の言葉が上滑りしているような気がした。彼は鈍感ではない。自分のせいでその好人物との間に微妙な空気を生み出してしまつていたことには気付いていた。付き添うという彼の厚意も丁寧に断つてここへきた。

ともあれ三好が城山に席を示す。丁度向かい合う二人の間に挟まるような感じで座布団が敷かれていた。座ると両者の横顔が見える位置だった。

「部屋はどうでしたか？」

「ええ。僕には勿体無いくらいのお部屋でした」

城山の声が硬いには気付いていたが、三好は何も言わなかった。世間話はここらへんで。そういう雰囲気を感じていたし、城山の方もそんな彼女の様子に気付いた。三好が黙って傍の畳に置いた紙片を台の上に差し出す。契約書のような。城山の方もポケットから印

鑑を取り出した。だがキャップを外したその手が止まる。

「死んでも何ら責任は負わない……なるほど」

城山が思い起こしているのは先刻自分が殴りつけた牛島のことだった。淡白な対応の裏には、彼の人となりの他にもこういった事情があるのかもしれない。マズイことはマズイが、自分達に何か直接帰結するような責任はない。だからこそ冷静で居られる。あの場に居た人間の殆どは、純粹に労働力が一つ削れた、という程度の認識だったのかもしれない。それも城山が替わりに加わることで、言ってしまうばいってこい。

「残念ながら……」

三好はそれでも遺憾そうな顔をする。それが演技か本心からかは城山にはわからなかった。

城山の手が印鑑を紙に押し付ける。パツと離すと赤丸の中に彼の苗字が刻まれていた。契約は成立。三好が胸を撫で下ろした。

「これで正式に貴方も今日から私たちの仲間です」

手を差し出してくる三好。仲間、という言葉が随分陳腐で安っぽい聞こえた。城山は漫ろに手を重ねながら十河の方を見た。苦いものを口にしたような顔で両者の握手を眺めていた。

「それで、城山さん」

「はい」

「職務に当たって何かご質問はありますか？」

城山は少し思案顔をしたが、やがて口を開いた。

「あの妖魔とかいう異形。アレについて現状わかっていることを教えてもらえませんか？」

ある程度予期していた質問だったのか、質問が来なくても説明するつもりだったのか、三好は大きく頷いた。

「現状わかっていることは、三点」

少ないと見るべきか、多いと見るべきかは判断に迷うところだった。兎に角黙って詳細を待つことにした。

「まずは、あれらに色んなタイプがあること。それらを我々は二つ

に大別しています」

「はい」

城山が返事をする、三好は対面の十河を見た。二人で何かアイコンタクトをしているようだった。微妙な疎外感を味わいながら、そつと包帯の巻かれた右拳を左手で撫でつけた。

「……大きく分けると、獣タイプと妖人タイプ」

十河が後をついで話し始めた。これを促す目配せだったらしい。現場の人間の方が勝手がわかってるだろうという三好の判断だった。「獣タイプというのは僕が実際に一戦交えたような奴ですね？」

「ああ。字の如く、獣の外見をしている。そして習性もほとんどそのまま、頭脳も知れている。だが凶暴で野生の獣さながらだ」

そこらへんは直接対峙した城山は理解していた。

「それで妖人タイプというのは？」

「一言で説明するのは難しいが、人と似た外見をしている。知能も高く、緻密な戦い方をするものが多い」

城山も理解が難しいと感じたのか、三好が写真を一枚ちやぶ台の上に乗せる。映っているのは、ハーピーというのか、ほとんど裸体の女性だが、背中から大きな羽根を生やしている。足も膝下は鳥の羽毛で覆われている。

「おお。いやらしい」

三好がいつもより低い咳払いをして写真を引っ込める。

「……妖人タイプと獣タイプは、大体4：6くらいの割合で出没している」

ほう、と城山は頷いた。

「では続いて二点目に移ります」

まだ横目で写真を盗み見ようとする城山を睨むようにして、三好は続ける。

「二点目は、奴等の目がとても悪いことだ」

「とどう？」

「奴等は建物内に居る人間には牙を剥かない。これは単純な獣タイ

ブが、目に見える人間に舌鼓を打ってばかりで頭が回らないだけかと思われてきたが、どうやらそれは勘違いのようだと最近になってわかってきた」

「妖人タイプもまた、建造物内に居る人間を標的にしたケースが今までないんです」

二人の言を聞いて、城山はここ最近この街でちよくちよく起きる変死体事件を思い起こした。確か全て被害者は屋外で発見されているはずである。ポツンと奈々華の顔が浮かんだ。学校に残してくるのも不安だったくらいなので、心底安堵したような顔をする。城山は夜勤を希望しているが、最悪安全が保障されないようだと、職場へと帯同させる腹づもりすらあった。三好が訝るのを感じて、城山は慌てて言葉を紡いだ。

「ですが、それだけで一概に視力が弱いとは断定できないんじゃないんですか？」

「……目が悪いというのは一種、比喻といえますか、推論といえますか、とにかくそういうった状況をしての表現の一つです」

「なるほど。わかりました。では三点目というのは？」

三好が受けて、はいと再び資料のような紙を取り上げる。折れ線グラフのようだ。睡眠の状態を量るような、時間区切りが横軸に伸びている。対して縦軸には特に何の数字もなく、城山は説明を求めて三好を見た。

「横は一日の、時間ですね。夜の十二時から始まって、そこに終わる…… 縦は、妖魔の出現数です」

そう言われて城山が再び表に目を落とすと、夜間から明け方までの間は大して線は伸びていないが、朝方に行くにつれて右肩上がりになっている。

「見てもらえばわかるように……」

城山が顔を上げる。

「奴等はほとんどが昼行性だ」

それから、二人してチヨコチヨコ補足説明を飛ばす。いわく、つま

りはこの仕事にあつて一番重要で危険なのは昼間ということになり、夜間の勤務は半分以上休暇のようなもので、戦闘員はすべからく月の大半以上を昼勤にあたることになる。いわく、特に危険視している妖魔は矢張り昼行性のモノがほとんどである等々。

城山は戴いた茶菓子を頬張りながら二人の説明を聞いていた。

第十四話：陰陽深く

腹が減ったということで、城山は周囲の様子も含めて街を少し散策することにした。驚いたのは、そんなフラフラした様子を見て真田がついてきたことだった。案内するよ、と白い歯を見せた彼に、貴方も中々人が良いですね、という言葉を飲み込むのに苦労した。

二人して定食屋の暖簾をくぐった。暖簾には「定食屋 ケイ」とあった。俺と同じ名前なんだぜ、とやはり屈託無く笑うので、城山も気負いを放って笑ってやった。この定食屋ケイ、味が良いらしく、昼時を少し過ぎてしまった時間帯にあっても、背広の男たちがそれなりにカウンターを賑わせていた。床板なんかには所々腐ったように黒ずんだ箇所も散見されるといのに、漂う芳香と元氣の良い厨房からの声を聞くだけで、活力が湧いてくるようで、城山も不思議と気にならなかった。むしろそういったボロさが逆に味があるような気さえしてくる。

「いやさ。ここは本当に美味いんだよ」

彼のオススメは焼き魚定食だそうで、城山は素直にそれを頼んだ。

「だけどあんまり見栄えが良くないだろう？」

無遠慮に大きな声で言うので、城山は店主に聞かれないうかどヒヤヒヤした。

「だから女の子は誘えないし、お前が来てくれてよかったぜ」

「はは。僕も何処が美味いかなんて知らないですから、随分助かりました」

軽口に応じながら、三好や十河の顔を思い浮かべる。確かに彼女らがこういった大衆食堂、しかも衛生面に若干の不安を感じるような場所で食事を取る姿は想像しがたい。

「お前には、さっき言い忘れたこともあったしな」

「なんですか？」

先にやって来た鯖味噌煮定食の鯖に箸を入れながら、真田はのんび

りした口調で答えた。

「ああ。あのビルな、八階は電力事情が芳しくない」

そんなこと、と言いかけた城山にピシヤリと言いつつ。

「テレビをつけながらエアコンを入れる時は、冷蔵庫のコードを抜け」

「え？」

「ブレーカーが落ちる」

「……」

芳しくないどころか、信じられないほど貧弱だ。

「いやな、前に複数人が集まって、スクリーンやらスピーカーやら完璧にしてAV鑑賞会をしたんだ」

真田が鼻かしらを掻きながら言う。その様子から、その鑑賞会には彼も参加していたことが容易に推察できた。

「したら、それがお嬢にバレてな。あの通り、アイツ初心だからね話を続けようとする真田に、城山が声を掛ける。

「えと、お嬢って誰のことです？」

キョトンとした様子で、真田は答える。

「なんだ？ 三好さんとお嬢と話をしたんだろくに、聞いてないのか？」

「その口ぶりからすると、十河さんのことですか？」

「おう。なんだ、さん付けなのか？ お前より三つくらい下だぞ？」

「ええ、そうらしいですね」

「まあいいや。アイツは良いとこのお嬢様なんだと」

「……へえ、そうなんですか」

「続けると、そのお嬢が鑑賞会にオカムリで、三好さんにチクリやがったんだ」

それで、余計な電力を使えないように処置したそうさ。三好さんもお嬢ほどじゃないが、潔癖なところがあるからなあとぼやく。

「お前、あんまりお嬢に良く思われてないっばいな？」

話を戻した真田は、好奇心旺盛な瞳をしていた。

「ええ。フンコロガシでも見るような目で見られてますね」

二人とも食事を終えて、城山は煙草を吸いたくなってきた。

「何かしたのか？ アイツは生真面目で無愛想だが、理由もなく相手を嫌うような奴じゃない」

「何もしてませんよ。正義感が強いんじゃないですか？」

城山が言ったのは、牛島のことだった。言っただけで済んだとは思った。そのことについては真田にしても、少し納得できない部分もあるらしいということは先の会話でわかっていた。早く外へ出て一服したいという欲求が強くて、城山の頭は細かいことにまで気を回せずにいた。

「ううん。かもなあ。そういうところは確かにあるしな」

だが、予想よりは落ち着いた反応で、城山はそつと安堵した。

「だが、そうも言っただけじゃないんじゃないのか？」

「……」

「お前、アイツと組まされるんだろう？」

真田はからかうでもなく、心配するでもなく、丁度その中間の気持ちであるらしく、微妙な顔をして聞いた。

「ええ。そのようで」

城山は三好の部屋で言われたことを思い返しながら、心底困ったように苦笑した。

あらかた説明が終わると、次に実際の勤務についての話へと移行していった。城山の夜勤希望というのは受け付けられないものだった。ならばせめて夕方の数時間だけ抜けさせてくれないかという話をした。三好は何かあるのかと尋ねたが、城山はちよつと外せない用があるだけ言った。シフトを組み立てるのも三好の仕事であるから、あまり一人の要望を聞きすぎでは自分が後々困るわけだが、城山の意志が固そうなのを見て、不承不承といった感じで頷いた。善処します、ということだった。

「あまり無理を言つな。三好さんが困っているだろう?」

「……」

横から口を挟んだ十河に向けた城山の目は、自身でも気付かぬうちに相当冷たい色をしていた。

「受け入れられないなら、別の仕事を探すだけです」

たじろぎながらも、真っ直ぐ見返す十河の瞳。三好が割つて入る。

「なんとかしてみます。城山さんにとって重要な用事のように、今折角契約していただいたのに、いきなり袖にされてもかかないませんから」

そう言つと少し大袈裟に肩を竦めてみせる。十河の方が舌鋒をおさめて、黙りこくつた。

「しかし…… そんな調子で大丈夫ですか?」

「何がですか?」

城山は話が見えない。十河の方はぎゅっと拳を握つた。

「貴方には、そちらの十河由弦と組んでしばらくは仕事に当たつてもらおうと思っています」

「え?」

「本当は真田君あたりと組ませようと考えていたのですが……」
そこまで言つと、三好は立ち上がり、文机の上にあつた書類を持つて戻る。二枚の紙片だ。その両方をちゃぶ台の上に広げた。一枚は査定書のような。戦闘技能、貢献度、人間性、などなどの項目が並んでいる。流石に具体的な給与額なんぞは記載されていないものだった。一番上を見ると、十河の名前が書いてあつた。彼女の査定とということらしい。戦闘技能の欄よりも、貢献度や人間性の方に多くの点数がふられている。もう一枚は城山の名。戦闘技能は90と数字がふられている。100点満点だろう。

「本当は、コレはわたし用のもので、相手に見せるものではないんです」

「いや、そんなことより、僕の人間性が3なんですけど?」

「なにか?」

「……」

確かにコレは相手には見せない方が良さだろうと城山は思う。腹を立てる人間も居るだろう。しかし城山は彼女の意図の裏までは気付いていなかった。実際このようなことをしたのは、忌憚ない評価を見せても、激高するような人間ではないという信頼の傍証である。

三好しか知りえないことだが、この人間性という項目については、実際の勤務態度や素行などがあたり、城山の場合は予測ではあるが、決してコレが低いからと言って直ちに嫌な奴だというわけではない。

「とにかく。二人の欠点を補い合う形、つまり理想型なんです」

「はあ。まあ僕は誰と組んでも構わないですけど……」

十河の顔を見る。また瞑目しているもので、城山は彼女が何を考えているかわからなかった。代わって三好が言う。

「由弦なら納得してくれています。彼女にとっても貴方の戦いぶりを間近で見られるのは、非常に有意義でしょう」

三好は訥々と語るが、十河の方は彫像のようになってしまっていて、ピクリとも頷かなかった。城山は不安を感じずにはいられなかったが、

「そういうことでお願いします」

と責任者に言われては、了承するより他なかった。

第十五話：CONTRADICTION

城山が校門の前に停車させると、既に奈々華はその近くで待機していた。携帯を開いた状態で胸に抱くようにしていた彼女だが、車を見つめるやいなや、駆け出すような勢いで向かってきた。ちなみに携帯は兄からのメール画面だった。彼が数分前に送った、そろそろ着くという簡素なメールが届いてから向こう、彼女はそうして兄を待っていたのだ。

助手席のドアを開けると、兄に向かって、ただいまと元気に挨拶した。お帰りと答えた城山の口の端から紫煙が漏れ、ふかしていた煙草を車の灰皿に押し付けた。

「どうだった？」

遠慮がちに聞く奈々華。城山は考えた。奈々華の質問の意図がわからないからではない。正直に話してしまっただけなのか、それが問題だった。初日から一人ダメにしてしまった。明らかに嫌われている相手とチームを組むことになった…… 数瞬考えて、結局それはやめた。

「ああ、決まったよ。君の送り迎えも何とかかなりそうだ」

城山としては心配要らないというつもりで言ったのだが、奈々華はやや萎縮してしまった。ごめんね、と言った頃には、城山は自分の言葉が足りなかったことに気付く。足手まといだなんて考えていないよ。そう優しく声を掛けたかったが、それすらも嘘くさく聞こえるのが怖くて、結局話を変えた。

「学校はどうだった？」

まるで久しぶりに会った親戚が聞くような内容だと、城山は思った。「うん。普通」

そっか、とだけ受けると、車内に気まずい空気が漂った。城山はラジオでもつけようかと思っただが、それも結局やめた。白々しいDJの空騒ぎを流したところでもうなると思えなかった。

「あのさ」

「何？」

「あの化け物のことについて少しわかったことがあるんだ」

そう前置いて、三好たちから聞いた話をそっくり聞かせた。事務的な口調になっていることは途中で気付いていたが、やめられなかった。奈々華は口も挟まず最後まで聞いた。

「だから、申し訳ないんだけど、当分は一人で外出するのは控えて欲しいんだ」

城山はそう言いながら、矛盾と疑問を感じていた。矛盾。今朝、友達とも沢山遊べばよいと言っておきながらコレはないだろう。笑いたくなくなった。すぐに会話が途切れてしまうような微妙な関係の兄を、外出するときは帯同しろと言う。

「お兄ちゃんが謝ることじゃないよ？ お兄ちゃんは守ってくれるんだもん。凄く感謝してる」

奈々華は泣きそうな顔で何度も首を横に振った。

「そう言ってくれると助かる。ありがとう」

疑問。閉塞感を伴って湧き上がる疑問。一体いつまで。当分というのはいつまでだ。一ヶ月か。一生か。奈々華はこう言ってくれているが、そのうちには嫌気も差してくるだろう。こんなクソ兄貴と一緒にしか外へ行けないなんて、馬鹿げている。だったら、いつそ好きに外出してもらうか。奴等がこの街の、奈々華の行動範囲内に現れて、彼女を標的にする確率は一体いくつくらいだ。恐ろしく低い確率なんじゃないか。だったら…… いや、ダメだ。そんな慢心で彼女が危険に晒されるようなことがあってはいけない。何のための力だ。

城山の思考は堂々巡りに陥りかけていた。陥穽。己の限界を突きつけられているような気分だった。

城山は結局逃げるようにパチンコ屋へ行った。月曜日。稼動は知れ

ているが、夕方にもなれば、美味しい台が転がっているというような状況も少なくない。特に準新台なんかは狙い目だった。まだ解析情報が出回っておらず、天井性能はおるか、天井到達回転まで知らない人間が打ち散らかしてほったらかしていることも多い。天井と言うのはスロット台のほとんどが備えている言わば救済措置のようなものである。大抵はボーナス間のはまり、千回転前後に設けられている。当然、そこまではまるということは、それだけ回転数をまわしているということであり、多くのメダルを吸い込んでいうことである。だから天井機能はそのメダルを吐き出すことを主眼にしている。これを自分のメダルで回さずに、天井間近の台に座って低投資でその機能を受ければ当然得をしやすくなる。ハイエナ。そう呼ばれる立ち回りだ。これを専門に立ち回っているプロも居るほど。大抵彼らはさもしいと煙たがられるが、実際台の機能としてついているものなのだから、利用できるのなら利用するに越したことはない、と城山は考えている。情報弱者が泣きを見るのは、実際この業界に限ったことではない。目くじらを立てるようなことではないと考える。いつもいつもそういう立ち回りをする、それこそエナ専（ハイエナ専門の略）ではないが、城山も時と場合によっては、これをした。主に今日のような出遅れた日の立ち回りだ。三台ほどを渡り歩いて、一箱作る。大体千枚強のメダルを手に入れたことになる。そしてたまたま自分が知っているパチンコの潜伏確変を拾い、六箱積む。全体を通して六千円の投資である。換金所から戻ってくる城山は五万弱の勝ち金を得ていた。

「……働くのか？ この俺が？」

僅か二時間程度でまんまと金を手に入れると、働くことが馬鹿らしくなってくる。城山に限らず、こういったギャンブルに手を染めている人間なら一度といわず味わったことのある多幸感と、現実への虚しさ。しかしながら、彼は社会的には言い逃れも出来ない程のクズだが、実際自分のことだけを考えているわけでもなかった。思うのは彼のたった一人の妹。守らなくてはならない存在。その妹に危

機が及ぶかもしれない現状。先も考えたように、奈々華が狙われる可能性というのは現実的に考えればとても低いものなのかもしれない。だが、彼は先日、彼女の命の危機の現場に居た。今でも、あそこで自分が居なければと思うとぞっとする。もし一本でも電車が早かったら、遅かったら。もしあそこで煙草を吸わずに、さっさと駅から離れていたら。城山はギャンブルなんてものをやるからこそ、低い確率、薄い可能性というものを馬鹿には出来ない性分だった。実際今日自分が打った台なんて、ボーナス合成確率は200やそこらの台が、簡単に五倍も六倍もその確率分母からはまっていたのだ。確率にすると何パーセントの話だ、と誰にともなく食って掛かりたくなる。沢山の人間が居る中で、事実奈々華が一度標的にされた。どうして二度無いと言い切れる。本音を言えば働かずに、彼女の意思まで無視してしまって、出来る限り彼女の傍にいてやりたい。少なくとも働かずに居れば、今日のように奈々華の方が出てくるのが早いなんてことにはならない筈だ。そうだ、外で待つのは控えるように後で言い含めておかなければならない。

「働かないで済めば最高なんだが……」

考えているうちに、小さな不安が城山の顔をかすめる。賢い妹だ。状況を話し、言いつけておいて、それを破って一人で外へ出るようなことはないだろう。ないだろう、とは信じていても、先日の獣に襲われかかった彼女の姿が脳裏から離れない。

城山は車に乗り込むと、警察に止められにくい、法定速度プラス十キロほどを心がけて、シヨートカットを最大限生かして家路を急いだ。

第十六話：デタント難く

9月5日（TUE）

職場へ着くと、待ち受けていた三好がシフト表を渡した。受け取って目を通していく。月の六割程度は昼間に働くことになっていた。出勤日数自体も二十日ほどあり、十二時間体制の勤務としては相応に過酷であることが予測された。

「何かご質問は？」

「ええっと、昨日話したとおり、夕方の二時間ほどは抜きたいのですが……」

首尾はどうだという確認。三好は微かに首を縦に振ってから、

「労働法というものはご存知ですね？」

と尋ねた。調べた、とは事前に聞き及んでいたが、城山が法学部の学生であることも調査済みなのだろう。質問と言うより念押しのような口調だった。

「ええ。まあ」

城山としては意外だった。この職場、使用元は確かではあるが、実態はブラック企業のようなもの。そういう印象を持ってしまっていたために、コンプライアンスというか、法律を遵守しているようには思っていないかった。

「貴方の休憩時間はそれに当てればいいでしょう。加えて、残りの一時間程度も基本勤務時間から差っ引き、残業時間分へ繰り上げます。そうそう、時間外手当については別途支給ということでは？」

どうということかと言うと、一日八時間以上の労働を課す場合に設けられる一時間以上の休憩というものを、奈々華へ迎えに行く時間にあて、勤務地へ戻ってくる一時間の移動時間は、勤務外として扱う。その一時間分は本来なら残業となるべき時間外勤務へと割り込んでいく形となる。つまり八時間基本勤務の、三時間残業と言う形にな

り、他の人間より一時間分労働時間が少ない計算の、一日十一時間勤務となる。当然戻ってくる空白の一時間には給与は発生しないから、純粹に一時間分少なくなる。

「なるほど。わかりました」

存外みみつきいなと思つたが口には出さない。無理を言つたのは城山の側である。それに城山だけ二時間分の休憩を与えて、その間の給与も保障するのでは、他の職員と格差を生むことになる。

「他にご質問は？」

「いえ、質問と言つほどのことではないですが」

城山は勤務表をじっくり見返す。表には他の人間の出勤状況もつぶさに入っているのだが、表横の名前の欄を見て、表を見返すと、城山とほとんど同一のスケジュールの人物が一人居る。

「本当に、彼女と組むつてことなんですね」

「そう言つたではないですか」

ええまあ、と口ごもる様子に、三好が怪訝な顔をする。

「何かご不満でも？」

「いえ……むしろ不満があるのはあちら側のような」

昨日の会合を思い出す。三好はああ言つたが、とても納得している様子には見受けられなかった。

「ですから、彼女は了承したと。それに些細な不満があつたとしても、残念ながらこれは慈善活動でもお遊戯でもありません。れっきとした仕事である以上、ある程度のことには目を瞑つて働いてもらいます」

使用者の顔で言い放つ三好に、城山は口をつぐんだ。

「丁度今日も出勤してきています。まあ貴方が居るといふことは、彼女も居るといふことですけど」

そう言つて渡した表を指差す。

「挨拶でもしてきたらどうですか？ 折角ですし」

何が折角なのかと問いたくなつたが、城山は素直に従ふことにした。真田の言を思い出す。無愛想だが、理由もなく人を嫌う奴ではない。

鵜呑みにするわけでもないが、実際そういうタイプに見えた。だったら何か理由があるのだろうか、その一端でも垣間見えたら、多少はやりようもあるのではないか。そんな風に一々理由付けないと、彼女の居室へと足は向きそうになかった。

「城山です。おはようございます」

簡素な、無地の襦の向こうに声を掛ける。一瞬舌打ちのような音が聞こえたが、城山は聞こえなかったことにした。二十秒ほど経って襦が開く気配もないので、もう一度声をかけようとしたところで、やや緩慢な動きで開いた。笑みの一つもない、愛想の悪い顔が出迎えた。襦は最小限しか開いておらず、絶対に招き入れることはないとしても言いたげだった。

「おはようございます」

繰り返す。

「何か用か？」

寝起きのような低い声だった。十河の薄茶色の瞳から目を逸らすようにして、城山は来意を告げる。

「いえ。今日の仕事の内容を確認しようかと思いましたが……」

「ない」

「え？」

「今日は何もない。音邑さんの予知にも、今日は特段妖魔が現れる兆候はないということだ。スクランブルがあるまで待機だ」

「内容はないよう、ということですか？」

「……」

「すみません」

ピシヤリと襦が閉まった。

無理だということがわかった。

自室に入ると、城山は大きな溜息をついて、自宅から持ってきた灰

皿をほつぱり出した。アルミの簡素なタイプで、無造作に放られたそれは、ヘリでドリフト走行してやがて畳の中央で仰向けになった。「あのクソガキ、こつちが下手に出てりゃいい気になりやがって」毒づきながら今度は自身の足を放り出して天井を仰ぐ。車のキーやら煙草やら、携帯やら財布やら、ポケットに詰まっていたものを全部置に放ると、随分と身軽になった気分だった。

「ああもう、シラネ。知ったこつちゃない」

寝転がったままテレビをつける。エアコンを点けようとして、その手が止まる。冷蔵庫はまだ届いてないらしく、部屋は昨日見たままだった。真田の話だと三点を同時に稼働させると、ブレーカが落ちるといったことだったが、用心してテレビだけにしておいた。今日は曇り空で比較的涼しい。このまま気温が上がらない日が続いて、秋の到来となればいい。

テレビには通販番組が映っている。タダでも要らないような物を口八丁でよくも売りつけるものだど、感心していたが、それも飽きて城山は少し眠ることにした。目を閉じて、座布団を枕にして深く呼吸する。

携帯電話が鳴った。安眠への旅立ちを阻害されて、城山は不機嫌そうに開いた。奈々華からのメールだった。

「お仕事どうですか？ こつちは一時間目が終わりました。数学難しいです。お兄ちゃんも頑張ってください」

筆まめだなと苦笑する。兄にだけ働かせてる引け目がそうさせるなら、逆に城山としては申し訳ない気持ちだった。

「こつちは愛想の悪いガキにいびられて、不貞寝します。奈々華ちゃんも勉強頑張ってね」

そう返信しようかとも思ったが、奈々華の文面は別段返事を期待するような感じには見受けられないと思い直し、やめにした。第一口しでは愚痴っぽくて仕方ない。

携帯をマナーモードに切り替え、城山は今度こそ目を瞑った。

第十七話：U・U・

音邑拓心が、三好の部屋を訪ねたのは、丁度正午を迎える頃だった。自室からここまで、淀みのない足運びで目の不自由を傍目からは感じさせなかった。それもそのはずで、彼がこうして三好の部屋へ向かうことは決して珍しいことではなかった。多いときなどは日に複数回ということもある。

「三好、居るか？」

バリトンのような、渋く低めの声が三好を呼ぶ。三好はすぐに襖を開けた。緊張したような面持ちだ。

「出るんですか？」

「ああ」

「場所と時間は？」

「大金井おおがねいの商店街、の外れ。時間は今から二時間ほど先か」

古い記憶を引っ張り出すように、たどたどしい。

「相手のタイプは？」

「獣のようだ。データベースにはない」

「新種ですか…… 急造のタッグには荷が勝ちすぎている気がします」

「俺に言われても困るな」

伝えたいことは伝えた、という風で、音邑は踵を返す。実際彼の役目はここまでで、それが終わると決まって再び瞑想に入るべく自室へ戻る。三好の方も特に引き止めるようなことはせず、渋面を作ったまま部屋を出て行く。向かうは当直の戦闘員が待機している部屋。まずは同じ階の十河である。

「さて、急拵えのチームですが…… いや、コレは逆に良い機会かもしれないですね」

歩きながら独りごちた。

誰かが部屋へ入る気配を感じて、城山の意識はぼんやり覚醒した。薄っすら開けた瞳に人影を見つけると、やおら身を起こした。眦まなじりを拭って真っ直ぐ見据えると、三好と十河の両人だった。

「どうしたんですか？」

「城山さん。スクランブルです」

「すぐらんぶる…… 卵ですか？」

「緊急事態ということですよ。というかよくも初日から職場で寝れるものですね」

皮肉のつもりで言ったのだが、城山は面映ゆそうにした。見当違いの謙遜が口から出てくる前に、簡潔に言った。

「さつき音邑さんが予知しました。今から二時間後、場所は大金井の商店街。妖魔が出るんです」

城山は寝起きの頭をフル回転させる。音邑の能力というのは、こうやって実際に発揮されるらしい。信憑性は如何ほどのものだろうか、と懐疑的ではあるが、城山は先を促した。

「つきましては、城山十河両名には今から現場へ向かってもらいます」

ぼんやりと初仕事であるという認識が頭の中に浸透していく。まさか惰眠を貪りに来ている、などと傲慢な認識であるわけでもなかったが、本当に妖魔を退治する仕事という実感はここに来て初めてだった。

三好が何かを城山の方へ突き出す。車のキーのようだった。城山はそこいらに散らばっている自分の持ち物を見た。彼の車の鍵はその中であつたので、別のものだとわかった。ウチの所有車です、と先手を打つように三好が告げた。

「まさか俺は運転手までやるんですか？」

十河は免許を取得できる年齢に達していない。必然的に城山が運転することになる。三好の顔に険が募るのを見て、城山は慌ててキーを受け取る。労使の関係になるや、存外厳しいのだと城山は彼女への印象を改め始めていた。

「いいですか、今すぐにですよ？」
念を押してから、三好は部屋を辞していった。

変哲のないセダンに乗り込むと、十河が助手席に乗り込んだ。仄かに香水の匂いがして、城山は意外な気持ちになった。あまり化粧つ気もなく、着飾るでもない彼女でも、やはり年頃の女の子なんだなとぼんやり思う。

車を発進させる。すぐに十河は地図帳を開いた。

「すぐ先の信号を右だ」

「知ってますよ」

「む？」

「大金井でしょう？ 行ったこともあるし、わかります」

件の信号につかまり、城山はサイドブレーキを引いた。今いる道路は、大通りに入り込む道で、そういった交通事情から信号待ちが長い。

「そ、そうなのか？」

驚いたような顔をするもので、城山は対応に困った。まさか馬鹿にされているんじゃないだろうな、と穿つてもみた。だがどうやら本当に驚嘆しているだけのようだった。

「以前真田さんの運転で現場に向かった時には、寺本さんと二人で苦労しながら道案内をした」

真田が地理に疎いのか、そもそも方向音痴なのかは知らないが、城山はその小さな視野に噴出しそうになった。誰も彼もが、助手席の道案内を頼りにハンドルを切るとでも思っているのだろうか。落ち着いているように見えても、まだ子供の部分もあるのだな、と少し安心した。そう言えば、と真田が言っていたことを思い返す。どこぞの良家の子女という話だった。他人の車に同乗するというのはあまり経験が無いのかもしれない。例えば年上の彼氏に連れられてドライブ、なんてのもないのかもしれない。そういう余計なお世話、と言っていい領域まで考え及んだ。

「まあ。人命も懸かっているんだから、カーナビくらいあっても良いんじゃないかって感じですけどね」

対向が黄色になったところで、サイドブレーキを戻した。

「ああ。その点に関しては同感だ。到着が遅れるようなことがあって、救える命を徒に散らしては、何のための我々かわからない」

クリープで進みながら、助手席の十河を盗み見た。真剣な面持ちで前を見ている。なるほど、と城山は得心した。どうやら真面目な話題ならば多少は、私情関係なく話してくれるらしい。

「そうですね」

だが残念なことに、城山の方に真面目な話をし続ける程の徳はなかった。そしてまた、そうまでして話を続けたいとも思わなかった。だから適当に相槌を打って、胸のポケットから煙草を取り出す。吸っても良いかと尋ねた。明らかに嫌そうな顔をした。

「不謹慎ではないか。仕事の最中だぞ」

「……」

カタブツ。喉まで出かかった言葉を無理矢理押し込めて、両手でハンドルを握った。あまりスピードは出さずに、車の流れに逆らわずにまったりとアクセルを加減していた。

「間に合うのか？」

「え？ ああ。大丈夫ですよ。のんびり行っても一時間もかからないです」

「そんなことまでわかるのか？」

「は？」

何を言っているんだ、という顔で城山は流し見た。やはり十河は真顔だった。これはもう、車どころかとうとうより常識がないと言わざるを得ない。城山は馬鹿馬鹿しいと思いつつも、説明してやることにした。

「時速60キロで走っています。現場までは40キロと離れてないですから、一時間かかりません」

「そうなのか」

ええそうです、と疲れた声音で返してやるが、なにやら反芻しているようで、城山の様子には頓着していない。

「もし間に合わなさそうだったら」

「……」

もはや何も言うまいという顔をした。十河は助手席のアタッシユケースを開いてみせる。

「ウーウーがある」

「ウーウー？」

少し背もたれまで体を戻し、ケースの中を見る。

「着脱式のパトランプのことですか？」

それはあった。二基あった。

「ああ、そうとも言うな」

「そうとしか言わない気がします」

「い、いいだろう。ウーウー鳴るんだから」

「……」

警察でもなく、そういうモノを点けていいのだろうか、とか。実際どれくらい緊急の場合に用いることが許されるのか、とか。色々尋ねておくべき点はあるのだろうか、城山はそういった気分になれなかった。

第十八話：そっちじゃありません

大金井市は、人口三十万を数える、中堅都市。適度に田舎で適度に都会、などという諧謔かいぎやくとも真剣とも取れないフリーズを触れ回っているが、実際のを射ているのだから、訪れる人間としては何とも言えない。京鳳線けいほう大金井駅の駅前には、古き良き商店街が伸びているのだが、駅ビルには小洒落た外資の店などが軒を連ね、まさに新旧混然とした様態だった。

二人はその駅ビルの近くのタイムパーキングへ車を停めた。出る時には領収書を発行しておくよう三好に釘を刺されていた。経費で落とすそうだと。パーク内の自販機でジュースを二本買って片方を十河に差し出した。厚意にはキチンと礼を言える人間だということはわかった。

伸びる商店街のエンドは唐突だった。金物屋の隣がいきなり空き地だ。金網が張ってあって、それが随分薄い色合いになっているところを見るに、長く買い手が見つからないのだろうということが窺い知れる。その空き地の隣は民家のような。古いが豪壮な佇まいを見るに、ここいらの土地は高いらしく、買い手がつかないことも頷けた。

「ここらへんで良いですかね？」

十河はさっきから携帯と睨めっこ。地図を添付したメールを三好から受け取ったそうだと、詳細な位置を割り出している。城山の質問にも答えずに、じっと画面に見入っている。その頭から知恵熱の湯気でも出ているような錯覚を覚えた城山は、近づいていった。先程の会話を思い出すだに、妙な不安が払拭できない。

「ちよつと見せてもらってもいいですか？」

「ああ。こつちで合っている筈なんだが」

城山が携帯を手に取る。あまり装飾はなく、持ち主に似つかわしかった。

「……」

「どうだ？」

「十河さん」

「なんだ？」

「これ、南口です」

十河の案内に従って二人が歩いてきたのは、北口から伸びる商店街だった。

南口の方から伸びる商店街は、どこか新風に迎合しようとした雰囲気を感じさせる店が並んでいた。しかしそれは中途半端で、服やアクセサリーを扱っていたりするのだが、微妙にセンスが良くなく、若者がこの店で買い物をするとは到底思えなかった。城山は経営者でもないのに居たたまれない気分だった。

そして居たたまれないのは十河も同様だった。
「すまなかった」

「いえ。僕は別に。こうして間に合ってるわけですし」

飄々と答える城山からは、本当に責めるような空気は感じられなかった。むしろ印象を改めた。好ましい部分をチラホラ見られたのが大きい。こうして自分の非は素直に認めるし、先のジューズを受け取った時も厭味のない調子で礼を言った。だが好ましい部分もあるというだけで、実際今すぐ彼女と良好な人間関係を築けと言われれば、無理だと即答できる。やはり未だ隔たりは感じるし、第一愛想あきまが悪すぎる。おまけに理解に苦しむほど非常識な部分も見た。毀誉くいきよ褒貶うへん定まらないというのが、忌憚こまじなき今の心境だった。

「ほら、着きました。今度こそ、こちら辺です」

そう言って十河に携帯を返した。また謝意を口にした彼女に苦笑を返す。これは城山の推測でしかないが、彼女がこんな小さな事でここまで負い目を感じてしまうのは、多分に彼女の強い使命感のせいではないだろうか。到着が遅れて徒花のように人の命が散ってしま

うのを良しとしないとは、車の中で聞いた。けれど、実際まだ被害が出たわけでもないの、代わりに自分へ謝ってしまうのではないか。

そんなことを城山が考えているうちに、十河は申し訳なさそうな顔をやめ、表情をぐつと引き締める。立ち止まって肩に掛けていた鞆を下ろした。

「ああ。では始めるか」

そう言って鞆から小瓶を取り出す。それを城山へと差し出した。ブル―ハワイのように艶やかな青をした液体が入っている。

「香水、ですか？」

十河が首肯する。

「妖魔の好む匂いがする」

目が悪いとは言っていたが、鼻まで悪いとは言っていないかった。いやむしろ、目が利かないからこそ、その他の器官は鋭敏なのかもしれない。

「なるほど」

城山は先程車内で嗅いだ彼女の芳香を思い出す。オシヤレでつけていたわけではないらしい。

城山は素直にそれを受け取ると、手首や首回りに吹きかけた。

「そうだな。そういう血管の集まる場所にするのが良い」

ここに来て、ようやく先輩風を吹かせられる状況がやってきたことが、十河の頬を少し緩めた。車に乗り込んでからこっち、どちらが先輩かわからないような状態だったのだから無理からぬことかもしれない。

「わたしが入るずっと前、黎明期の頃は血を塗っていたらしい」
やはりどこか得意そうだった。

「ぞつとしない話ですね。ホオジロザメじゃあるまいし」

「ロレンチー二と言わずとも、連中は鼻がいい。おまけに血に飢えた捕食者という点では、さして変わらない」

噴き付け終わり、返す。辺りはうら寂れており、平日の昼間という

こともあつて閑散としていた。前も後ろもシャッターの下りた自営業の元店舗ばかりだった。

「こうしておかないと、標的にされない。だから必須だ」
もう一度自分も軽くかけなおしてから、鞆にしまふ。

「ですけど、どうして僕が退治した時の獣は、な…… あの少女を襲ったんですか？」

疑問を口に出す。これでは香水は伊達や洒落と言わずにはいられない。十河はやや困ったような顔をした。城山が初めて見る表情だ。

「わからない。ただ、可能性の話をする、あの少女はこれと似たような香水をつけていたんじゃないか？ 近くに寄ったんだ。おまけに家まで送つてやつたんだろう？ これと同じ匂いをしていなかっただか？」

小瓶の入った鞆を指の腹で叩いた。

「いや…… 僕は別に変態じゃないので、そんなに鼻の穴広げて嗅いだわけではないです。第一嗅いでいたとしても、香水なんてどれも同じ匂いにしか感じませんよ。僕は目がいいんで、鼻はよくないんです」

冗談のつもりだったが、十河は笑わなかった。

ピンと張り詰めたような空気が流れた。唐突に、周囲から音が消え去る。世界が書き換えられたような、そんな強い違和感。

「お喋りは終わりのようだな」

城山が目だけ動かして腕時計を確認する。丁度昼の二時に差し掛かるうとしていた。音邑の予言の信憑性を身をもって体験した瞬間だった。

第十九話：DISTRUST

「今まで通り、わたしがバックアップに回る」

「ええ。わかりました」

六本足の妖魔が、のたくるように突進を繰り返す中で、急造のタッグは、本当に急場の連携を繰り返していた。

まず城山が前に出て、囷のように引きつける。その間に後ろへ下がった十河が得物のクナイを握って照準を定める。余計な力を入れず、ただ体の横でだらんと持っていた。

横へと逸れていった城山を追尾する妖魔の動きは、醜悪だった。六本の足を絡ませることなく方向転換していく様子は、百足を思わせた。十河は腕が栗立つのを感じたが、集中を途切らせることなく、その時を待つ。

城山が間一髪のところ、機敏に妖魔の体当たりをかわす。直後に店のシャッターに妖魔がぶつかる激しい音がする。頭から突っ込んだようだ。十河が剋目する。両手に握ったクナイが無駄のない軌道で走った。それは妖魔の後ろ足、人間で言うところの膝裏へと突き刺さる。人と同じで比較的肉が柔らかいのか、刃先がズブリと深く潜り込んだ時、妖魔が一つ悲鳴を上げる。猛禽類が息絶えるような甲高い音で、二人が二人同時に顔をしかめた。半狂乱になった妖魔は突っ込んでいた頭を引きずり出して、しっちゃんかめっちゃんか振り回した。妖魔の頭には、円月刀のように湾曲しあつた二本の角が生えていて、城山はバックステップを幾度か繰り返して距離を取った。

「随分鈍重ですね」

十河が傍までやってきたのを背中で感じた城山が所感を述べる。

「みたいだな。見た目はブルともバッファローともつかんが、動きはどちらにも劣らず」

毛並みのない、黒く分厚い皮に包まれた体が、もう一度二人の方へ向き直る。後ろの左足からは、動くたびにジュージューと汚血のよ

うに黒ずんだ血が噴きだし、商店街の化粧煉瓦を汚していった。

「体が黒なら、血まで黒か」

不快感が滲む声で十河が呟く。クナイは確かに刺さっている。彼女の言葉通り、黒い血も確かに出ている。

「どうしますかね？」

だが弱らないのだ。動きは確かに鈍いのだが、それは最初に対面した時から変わらない。それ以上に弱った兆候がない。歩みを止めたりするようなことがない。クナイは既に両の後ろ足に六本刺さっている。つまり一連のカウンターを三度お見舞いしているにも関わらず、狙った効果が得られていない。

城山の身体能力をもつてすれば、万に一つもかの妖魔の突進を避けきれず、という事態にはならない。十河の集中力をもつてすれば、万に一つも鈍重な妖魔への投擲をしくじることはない。しかし、それを一体何度繰り返せば、相手は弱るのか。

「このまま続けますか？」

十河は城山の声音に、不愉快なものを感じた。自分が一人でやってみようか、というような提案を言外に含んでいるような気がした。

埒があかないのではないかと。そのような自信と余裕を含んだ声音に聞こえていた。そして城山の意は、現状理に適っている。それがわかつているだけに、余計に腹立たしく思った。足への攻撃が意味を成さないなら、直接頭部や前足などへの攻撃を加えてみるべきだ。そしてそういった近接戦闘にどちらが向いているか、そんなことは火を見るより明らかだった……

十河が走る。城山の後ろに居た彼女は、そこから横へと走り出す。妖魔が反応する。チャクラムの如く湾曲しあつて一つの輪のようになった二本の角が、触角のように十河の動きを追尾していく。

「十河さん！」

先程からの衝突で、妖魔は動くものへと反応を示す傾向があることは両者とも気付いていた。だからこそ、先に城山が動き、敵を引きつけるという役目を担っていたのだ。城山が動いた後には、十河も

投擲に最適な位置取りに走るが、妖魔は見向きもしない。先に動いた相手を仕留めることにしか頭が回らない、まさしく獣も同然の思考回路。だから逆に十河が先に動いてしまえば、当然妖魔は彼女の方に向くわけで……

走り出す妖魔の後を、城山は舌打ちしながら追いかける。十河の突然の作戦外行動の理由を、城山は漠然と理解していた。功を焦ったというわけではない。いや、ある意味では合っているのかもしれない。それは城山の存在だ。鳴り物入りのような扱いで入ってきた新人。しかもそれがあまり彼女の気には召さない人種だった。そんな男に無能のように思われるのが、我慢ならなかったのではないか。しかし城山は、彼女を無能と断定したから、作戦の変更を促すようなトーンでもって言葉を掛けたのではない。実際に彼女の両手から繰り出されるクナイの正確無比なコントロールには、初見で舌を巻いた。相当の鍛錬の賜物であることは、その道には門外漢である彼にもわかった。だからそういうことではないのだ。今回は相手が悪いというだけ。鈍重な代わりに恐ろしくタフである以上、武器の特性として、軽く速いクナイの投擲では歯が立たないということ。そういう判断の下、いわば大所高所で考えた上での提案だったのだが、彼女の自尊心をくすぐるような結果になってしまった。

十河の目論見はこうだ。十分まで引き付けてから、最も加速の勢いがつく位置でクナイを放る。最大限の威力を持った得物は、相手の眉間と首筋へと突き刺さる。これならば、いかな生物もひとたまりもないはずだ。足がいくら固かろうと、首や眉間が頑強であるのは難しい。

ざまあみると鼻をあかしてやりたかった。お前が居なくても。わたし一人でも近接も遠距離もこなしてみせる。その証明にアイデンティティーが懸かっているかのようだった。いや、実際懸かっているといっても過言ではなかった。あのように残酷無比な、少し挑発されたくらいで人を簡単に傷つけるような人間に、自身の力不足を見

せるようなことがあっては、彼女の正義は屈してしまふ。

その場でグツと踏ん張った。妖魔は狂ったように足を動かし、彼女へと駆ける。頭はぶれることなく、しっかりと彼女の胸元目掛けている。まだだ。もう少し。城山の冷たい目を思い出した。あと数歩。目測を誤ることは許されない。過たない自信も十二分にある。城山が自分一人で倒せると踏んだ、その自信よりも強く。当たるビジョンしか見えない。当たって、足の動きが止まり、倒れこむ。そのビジョン……

妖魔が彼女の測った最適のポジションへと前足を踏み入れるかどうかのところ、十河は動いた。左手は振りかぶるよりは速く、クナイを真つ直ぐに放る。眉間へ。体の横へ垂らしたままだった右手は、振り上げる動作の途上、最も勢いのついたポイントでリリース。首へ。どちらも会心だった。角の直下にある眉間へはより命中精度の高い上手で。よほどのことがない限り外すほうが難しい首へは、より威力の出る下手で。決まった。外しようがない。仕損じようがない。放ち、それぞれ思い描いた通りの軌道を辿って、ポイントへと向かっていくクナイの背を見ながら、十河は気持ちが昂ぶるのを感じた。

第二十話：人形劇

城山が歩みを止めなかったその理由について、彼自身明確な説明が出来るものではなかった。強いて言うならば、勘。その場の空気が、秀囲気。誰の目にも明確にわかる根拠に基づいたものではなかった。彼は非常にデジタルな思考を好むが、実際勘というものを蔑ろにはしなかった。自身が天才であるということ十分に理解しているから。それもある。だが、勘というものを、彼の言葉に直すと、経験則に裏打ちされた推測。そして実戦においては、理論よりも経験が重要であることを知っている。実戦の全てにおいて、絶対的汎用性を持った理論というものは組み立てられない。必ずケースバイケースで、判断を迫られる場面に直面する。そういった場面で重宝するのが、勘である。絶対の理論、真理、答えというものが無い以上、勘という名の推論に基づいた行動を試していくしかないのだ。最初のうちにはきつとトライアンドエラー。だが、そういった失敗の経験すらも糧となり、勘の精度を上げるファクターとなる。例えば古の裁判官には、法文という確たる理論はなかったが、法源には過去の判例たちを用いてことに当たっていた。城山は人を裁く権限を持たないが、敵を正確に裁く思考面の柱として、過去の数多の例から導き出される勘というツールを法源よりは無責任に使っていた。その勘が、告げたのだ。止まってはいけない、と。果たして妖魔は生きていた。

「十河さん！」

城山の頭は脳内麻薬が放出され、異様に昂ぶった状態だった。それでいて冷静だった。十河を死なせないこと。この一点のみに集約された目的意識を旗印に、全身の感覚器官がその十全にのみ動く感覚。まずどうするべきか。眉間と首に彼女のクナイを受けて、一瞬だけたじろいだ様子の妖魔は、顎を完全に上げきったかに見えた。だが、すぐにその首を下ろしていく。これが人なら、勝ち誇った嘲笑でも

浮かべていることだろう。その瞬間を少し離れた場所から視認した城山は、今取りえる最善の策を練りながら走っていた。練ると言っても、緻密に計算するわけではない。例の勘が、天啓のように告げるのだ。いつも決まって。そしてそれはほとんどの場合にあつて理にも適い、最善だった。このまま彼女の前に回りこむのが定石だが、間に合わない。だったらどうするべきか。

「まだ生きています！ 離れて！」

妖魔が十河に向かって角の照準を合わせるのが見えた。十河はどうしたことが、放心したような顔で立ち尽くしている。ふ、と頭の隅に変な考えが浮かぶ。あんな、戦場で間抜け面を晒す子供をどうして自分が必死になって助けなければいけないのか。旗印自体に疑念仕事だ。だがすぐに断じた。ビジネスパートナーをむざむざ失ったとあつては、三好に協調性なし、或いは人格破綻という論調で解雇を告げられてもおかしくない。むざむざ失わなくらいの力は、既に三好に目撃されているのだから、力不足を理由に出来ない以上そういった判断を下される可能性は払拭できない。頭を振って苦笑したくなるような心持ちで、城山は駆ける。

十河由弦にとって、目の前の出来事は何かの冗談にしか思えなかった。自分の投擲は完璧で、手応えも胸のすくような程に爽快だった。妖魔がそれで倒れ伏すのは、青写真ではなく確定事項であった。それほどに自信を持てる二刀だった。だからこんなのはおかしい。何かがおかしい。いや、全てがおかしい。何か、自分の立つ地面が、突然音もなく消え去ってしまったかのような、ひどい浮遊感が支配した。悪心すらしない、だけど現実感もない。明晰夢でも見ているような心地で、妖魔の二つの瞳を眺めた。黒い体色の中にあつて、その瞳は爛々と輝いていた。口元からはだらしなく涎が垂れていた。寝起きのヒトの口でもこれほどまでの悪臭は放たないだろう。十河はぼんやりとした面持ちで、ぼんやりとした頭で思った。死ぬのか、と。自分はこの妖魔に負け、このような場所で果てるのか。

まだ成すべきことなど何も成していないままに。少し遠くから男の
声が聞こえた。

「いやだ」

死ぬことが怖いんじゃない。何も成さずに死ぬのが怖い。自分の力
不足は知っている。だが、それを改める努力すら途上で、死ぬのが
怖い。男の声が近くなってくる。耳朶は打っているが、その言葉は
頭に入っていない。

「十河さん！」

やっと自分の名を呼んでいるということに気付いた。その時には、
男は妖魔の背に飛び掛っていた。右手で崖の縁に手を掛けるように、
その体にぶら下がりながら、左手を素早く振ると、首の付け根にフ
ックをお見舞いした。

妖魔は突然の衝撃に驚いたのか、先程までより一段高い声を上げて、
城山を振り落としにかかる。その動きの中で、逆らうでもなく、従
うでもなく、ごく自然に着地した。妖魔は前足を上げて、怒りとも
痛みともつかない要因から首を振り回している。

「十河さん！」

十河は初めて城山の姿を見とめたように、びくりとした。力のない
瞳が彼を見る。離脱しましょう、と声を荒げそうになった城山は、
しかしやめた。すべきことを完全に見失ったかのように、悄然とし
ている姿に、言葉は意味をなさないことを瞬時に悟った。

素早く彼女の膝裏と背に手を滑り込ませ、持ち上げた。抵抗はない。
一上一下する妖魔の頭の動きに横目で注意しながら、その場から素
早く脱出する。人間を一人抱えていることを感じさせないほど、隙
なくよどみなかった。

少し離れた場所に十河をそっと降ろす。電柱を背もたれにするよう
に、十河は腰を落ち着けた。まだ焦点が定まらないような目で、城
山を見上げた。

「失敗してしまった」

うわ言のように。城山は油断なく、離れた場所で未だ荒れ狂ってい

る妖魔の様子を見ていた。

「そうですかね？ 僕の目には貴方の投擲は完璧に映りました」

「わたしは…… まだ生きていますのか？」

「疑わしいなら、ほっぺでも爪つてみればいいんじゃないですか？」

「お前に助けられたのか？」

「助けた、とは少し違つかもしれませんね」

「笑つか？」

「は？」

「あれだけの態度を取っていて、蓋を開けたらその相手に助けられている」

「……」

「無様だと笑つか？」

「さあ。何も面白くはないですけど」

十河は遅れて恐怖に支配されている自分に気付いた。だがそれは、妖魔に殺されかかった恐怖なのか、今話している相手が、あれほど凶暴な妖魔をまるで虫けらでも見るような目をしているからか。そのままの表情で、あの無表情で、自分にも接するからなのか。わからなかった。呆然と立ち尽くし、ここまで運ばれてきた自分が、傍目には人形のように見えるかも知れないが、彼女からすれば、このように感情の抜け落ちたような顔で、抑揚のない声で、接してくる城山の方こそ人形のように思った。愛玩の側面がなく、不気味さ、空恐ろしさ、そういうった負の面ばかりが見えてしまう、人形。

「十河さん」

城山が横顔だけで言った。

「ちょっと試してみたいことがあります。協力願えますか？」

十河の頭の中に、作戦の主導を渡してしまったことへの反発などは浮かんでこなかった。逆らいがたい空気を感じた。丁寧な言葉遣いなのに、命令のように聞こえた。使い物にならないのなら、この場で殺す。そうとさえ言われているような錯覚があった。

十河は神妙に頷いた。

第二十一話：GOOD SCHEME

「さつき貴方を抱えて走っていた時から気になっていました」

「何が？」

「随分と長く暴れまわっているな、と」

「今なお、狂乱にある。また一声大きく鳴いた。」

「一撃が効いたんじゃないか？」

城山は肩をすくめた。

「いえ。あれで仕留めようとまで思って殴ったわけでもないです。

それにしてもあの錯乱ぶり、何かおかしいと思いませんか？」

「……もったいぶらずに教えてくれ」

十河ももうすっかり立ち直り、モモの外側につけたホルダーの中の刃物をカチャカチャ言わせながら、妖魔の動きを見守っていた。正気に戻った理由が、義務感なのか、恐怖からなのか、彼女自身にも未だわからなかったが。

「弱点ですよ」

「弱点……」

「ええ。恐らくは、延髄の少し下、首の付け根、それも背中側」

そう言っただけで自分の首の後ろをパンパンと平手で叩いた。十河は妖魔と城山を見比べる。その瞳に懐疑の色を見た城山は、少し考えるような素振りをした後こう切り出した。

「貴方の投擲は完璧だったと先程、言いましたよね？」

「あ、ああ。結局仕留めるには至らなかったが」

「それは……」

城山は言いかけて、口を噤んだ。妖魔の方がやっと自分を取り戻したようだ。落ち着き六本の足を下ろしたその体からは湯気のようなものが立っている。汗が体温で蒸発しているものだった。それは激しい運動からくるのが主だが、怒気もいくらかは含んでいるのかもしれない。

「さて、お喋りは終わりのようですね」
城山がトントンとその場で跳ね始めた。徒手空拳にあっては、よく見られる動作であるが、彼がやると獲物を殺すタイミングを計る肉食獣のウォーミングアップのようだと十河は思った。

城山が駆け始めると、妖魔は低く鳴いた。威嚇とも氣勢とも付かないが、今までにはなかった行動である。足りない脳みそでも、本能は勿論備わっているわけだから、相手が大人しく狩られるだけの餌ではないと嫌でも悟ったのだらう。現に走りこむその動作にあつて、今までにない迫力のようなものがあつた。鬼気迫るとはこのこと、しかし城山にとっては大差なかつた。飄然としたまま牛飼いのように、巧みに行き先を絞り込んでいく。チラリと十河の方を見ると、離れた場所でクナイを胸に握り締めている。何かぶつぶつと呟いている様から見ると、集中力を高めているようだった。その姿に満足気に一つ頷くと、城山は妖魔と正対しなす。

商店街の一角に、今はもう店じまいしたらしい商店が一つあつた。高井商店なんて名前が良くなかつたのかは知らないが、そんなことはどうでもよく、城山が目をつけたのはその構造だった。低く張り出したアーケードを鉄の支柱が持ち上げている格好。少しの間だけなら、妖魔の侵攻を止めれるのではないか、下手をすると支柱の先っぽでも体のどこかに刺さってくれるのではないか。ほんの、本当に少しの間でよかつた。

城山はその商店の方へ後ろ向きに走ると、妖魔を待った。足を器用に動かして鋭角に曲がるその様はやはり見ていて愉快なものではなかつたが、兎に角正面からやってくる。勢いに乗った後ろ足が、バカになつた化粧煉瓦を一つ跳ね上げた。

妖魔が最終目的点を城山の体に定めて、飛び込むように襲い掛かつた。城山は直前でバックステップ。距離にして二、三步離れた商店のシャッターまで一気に詰めた。ガシャと大きな音を背中が奏でて、

行き止まったことを告げる。城山が突然避けたことによつて最大限の力を持った突進は、その慣性を以つて商店までの僅かな距離を滑る。それでも十分勢いがついていて、鼓膜が痛くなるような大音響で妖魔の体がアーケードを壊した。城山はというと、アーケードの下、随分深く身を縮ませていた。軒先から張り出したアーケードに進行をいくらか遮られた妖魔、アーケードの下でシャッターまで目一杯体を引っ付けて作り出したエアポケット。その空間とも呼べない狭い場所で、城山は膝に力を溜めて飛ぶ。

「しょーりゅーけん！」

顎にヒットさせるアッパーカット。鈍い音がして、妖魔の上体が浮き上がる。巨体の突進力、前に進む力を、下から上へ突き上げる力で殺す。アーケードに突っ込んで弱まっているとは言つても、実際にやるには城山の桁外れの臂力が要件であつた。ともあれ、ふわりと前足が浮き上がるのを見て、城山はすぐにエアポケットから横滑りに脱出する。崩れ落ちるアーケードの瓦礫を喰らつたのではつまらない。

「は！」

裂帛の気合というには、随分押し殺した声だったが、十河の掛け声は城山の耳にも届いた。妖魔の浮き上がった体、当然弱点と踏んだ場所も最高に狙いやすくなる瞬間、それを待っていた。いや作り出した。

クナイが舞う。二本、ほぼ同じ軌道であるが、綺麗な平行線を辿り、どこまで行つても互いがぶつかり合うようなことはない。そしてそのまま、首下へズブリと突き刺さる。妖魔の今まで最高に甲高い声を聞く。それが断末魔の悲鳴であると、城山も十河も理解した。巨体が重力に従つて、上げていたその前足を地に着ける。だが、それは足としての機能、自重を支えることが出来ず、膝から崩れる。横向きに倒れこむ巨体。その上からアーケードの幕や鉄骨が降り注ぐ。城山はそれを耳を押さえながら見つめていた。

第二十二話：如水

世界が戻りつつある中、十河が突然弾かれたように動き出し、近くに置いていた自分の鞆からデジタルカメラを取り出した。片膝をついて妖魔の死体を撮る。一枚、二枚。

「何をしているんですか？」

答えず三枚目。撮り終わると、やっとファインダーを目元から離して、立ち上がった。

「写真を撮っている」

「わかってます。何故撮っているのかと尋ねたんですが？」

「……必要だからだ」

禅問答のような虚しさを感じて、城山は口を閉ざした。

世界が戻っていく。元々人通りがあまりなかったが、僅かにある営業中の店の人間がガヤガヤと騒ぐ声が聞こえてくる。完全に戻った頃には、街の様相は変わっていた。煉瓦が抉れ、閉店中の店のシャッターは至るところ凹んでいる。トラックでも突っ込んだように凄まじく変形し、シャッターはおろか店のガラスまで破壊されている店もあった。

「なるほど。モノを壊すところちに戻っても影響があるのか」
「ますます鏡の世界を想起させられる。」

「戻るぞ」

十河は歩き出していた。

「あまり現場に立ち止まっていると、警察が来たときに面倒だ」
「はあ」

返り血などは浴びていないが、城山の体は幾らか汚れていた。テクテク歩いて行く彼女に素直に従う。クナイ用の厚皮ホルダーもいつの間にか鞆にしまいこみ、今はすらりとスカートから伸びた足がやや急ぎ気味で前後する。

「僕等を見た人間が居るんだから、後で通報が行って事情を聞かれ

たりしそうですが？」

追いついて疑問を投げかける。現場から足早に立ち去る二人組。男の方は薄汚れている。

「大丈夫だ。後から三好さんから連絡が行く。ウチの管轄だと言えば、警察も詮索はしてこない。マスコミの方にも、多分…… ガス管の爆発だとかいう説明になるだろう」

「はあ」

城山は首だけ振り返り、遠ざかりつつある現場を眺める。高井商店の元店主なのか、店先からモモヒキのまま飛び出してきた中年の男が頭を抱えていた。

パーキングを出た時には、二時も半分を過ぎるかという頃だった。奈々華の授業が終わるのが、大体四時半。あまり悠長には出来ず、寧ろここから直接向かいたいくらいだった。十河さん、すいませんが駅から電車で帰ってください。ギリギリで飲み込んだセリフをもう一度喉元で噛み殺しながら、城山はやや急ぎ気味に車を走らせた。幸い運転に集中できる環境ではあった。十河は元々口数が多くはないが、今は余計に寡黙だった。しかしその理由には城山は心当たりこそあったが、あまり興味はなかった。何より今は帰路を急ぎたかった。

国道をひた走っていた。前の車がトロくさく、右車線から追い抜こうかどうかしようか考えているうちに信号に捕まってしまった。腹立たしいことにその前の車は黄色ギリギリで行ってしまった。紺色の軽のその背中を忌々しげに眺めていると、

「さつき……」

十河が口を開いた。置物が動いた、とまでは言わないが、城山は少し意表を突かれて、吃驚した顔で助手席を見た。

「さつき説明の途中だっただろう？」

「はい？」

「アンタが、あの妖魔の弱点を見破った理由」

「ああ」

事も無げに受けて、城山は前に向き直った。

「貴方の投擲は完璧だった、のあたりでしたか？」

「ああ、そうだ」

「ええつと、完璧だったというのは、言い換えれば、その投擲に問題がなかったということですよ」

「そうだな」

十河が拳を握ったり開いたりする。あの時の感触を思い出しているようだ。

「つまりアレで死んでいくべきだった」

「……回りくどいのは嫌いだ。何が言いたい？」

「完璧に射抜いた筈の、本来動物の急所。だが死なない」

ウィンカーを上を押しあげる。左折を告げるカチカチという音が車内に続いた。

「となると、あの生物の急所はあそこではない」

「……」

「加えて例の過剰な反応。飛び掛って殴りつけた時のですね」

「わかつてる」

「それらを総合的に考えると、奴は、こっちの常識からはかけ離れた存在だということも加味すれば、急所もまた常識の埒外であったとしてもおかしくはない。まあヒトでもあんなところ攻撃されたら死にますけど……とにかくモノは試し、つてわけですよ」

つまりは確証があつたわけではないのだ。勘、その域を出ない。そう言っている。話はそれで終わりのようだった。城山はもう前だけ見て運転に集中していた。

十河は、憶念染みた先入観もひと時忘れ、素直に感服したくなった。あれだけの、僅かな戦いの中で、柔軟に考え、常識の枠組みさえフリーにして、そして自分が見て、感じて考えた答えに、殉じれるその覚悟、胆力。裏打ちするは、絶対の自信か。十河の思い描く姿に近かった。柔らかく考え、ここと決めたらどこまでも力強く。少な

くとも、こと戦闘にあつては、彼は彼女の理想像と言つてよかつた。ただ、そこに絶対的に足りないものがある。正義だ。彼の振るう力には、正義がこもっていない。戦いの中で、彼の信念や気概、そういったものが見られるかとも思つたのだが、それは大きな間違いだつた。例えば自分を助けた時、その様子。とても他人を守りたい、そういった気持ちがあつての行動には見えなかつた。だからこそ、自分はこの男が気に入らなかつた。正義もなくふるう力。それはとても危うく、恐ろしかつた。何故それだけの力が有りながら、誰かのために使おうとしないのか。同時にそういった憤りも感じる。

同時に、十河は思う。彼がもしそういった気概に目覚めれば、ふるう力の源を、正義に見つければ、完璧な力となるのではないか。少なくとも彼女の考える完璧な力とは守護のそれであり、彼にその片鱗を見ているのは間違いなかつた。水のように、包み込み、通さず、敵に対しては時に苛烈に。そしてそういった兆候が全くないでもない。初めて彼を見たとき、他人を守つていた。とても冷たい瞳をしていたが、それが自分達もまた敵味方定まらない状況だつたことを考えれば、仕方ないことなのかもしれない。しかし、いかな理由だろうと、人間に対してまであいう目をして欲しくない、するべきではない。それは自分の考える力とは違う。そうも思う。結局総括すると、絶対悪とまでは言わない。けど善でもない。だつたら…

… 十河は運転席の男の横顔を見た。チラチラと速度計や時計を気にしている。

相手の人間性を量りかねているのは、十河も同じだつた。

「……とにかく助けてくれたことには礼を言う」

モゴモゴと口にした十河の声は、運転席には届かなかつたようであつた。城山が聞き返すような顔をした。もう一度言う気にはなれなかつた。

第二十三話：END OF THE DAY

午後の九時にもなると、そろそろ仕事の終わりが見えてくる。ひと足早めの開放感が城山の胸に渦巻いてくる。昨日も来たが、実際の勤務は今日が初日である。勤め上げたという充足感より、人間関係が主ではあるが、精神疲労が強かった。しかし、もう誰にも会わないでも大丈夫かな、なんて考え始めた矢先に、城山のもとに来客があった。

「城山さん。今少しいいですか？」

いきなり襖の向こうから声を掛けられて、城山はピクリとした。吸いさしのタバコを一先ず灰皿に置いて、どうぞと声を掛ける。少しして襖を開けて三好が部屋に入ってきた。

「お疲れ様です」

双方そのように労う。城山は三好が用件を切り出すのを待ったが、何故か城山の顔をジロジロ見るだけで何も言わない。彼の方がしびれを切らした。

「それで、一体なんですか？」

「あまりお疲れではないようですね」

「はい？」

「いえ。血色も良いし、目がトロンとするでもなく」

「当たり前ですよ。十時に出勤してきて、二時間ほど仮眠して、一旦地元に戻って飯食って、帰って来てウンコして、シャワー浴びて、また仮眠してたんですから」

「シャワーを浴びる前に、ちゃんとお尻は拭いたんですよね？」

「……拭きましたよ、勿論」

「なんですか、今の間は？」

「しかし凄いですよね。シャワー室まであるんですから」

「ええ。まあウチは職務上、待機時間が長いですからね」

そこで一区切り。城山が立ち上がって、冷蔵庫を開けた。

「バターがありますが、舐めますか？」

「結構です」

「冗談ですよ。ラムレーズンとバターをクッキーで挟んだお菓子が
あるんです。食べませんか？」

「いただきますしよう」

城山は同時に牛乳パックを取り出し、カップに注いだ。ついでに煙
草を消した。

「わたしの分の牛乳は貰えないんですか？」

「カップが一つしかありません。半分こして飲みましょう」

「ずっと思っていたのですが、貴方はわたしを女として認識してい
ますか？」

「間接キスとか気にするんですか？ カマトトぶっちゃって」

「……貴方はわたしが飲んだ後に飲んでください」

二人で菓子を頂く。上品に半分に分けて食べる三好の手に、ペンだ
こを見つけて、城山は彼女の苦労の一端を垣間見たようで、勝手に
気まづくなった。決して長い付き合いではないが、何となく彼女は
白鳥タイプ、バタ足は他人に見せない人間ではないかと考えていた。
「さつき事細かに、要らない所まで行動を追って説明してください
ましたが」

「はあ、ああ、そうですね」

「一つ一番大事な部分が抜け落ちてます」

「二度目の仮眠の前にもう一度したウンコ、ですか？」

「違います。二時ごろ、妖魔と戦ったでしょう？」

「ああ、そつちですか？」

「それはわたしのセリフです。何か勘違いしているといけないので
言っておきますが、貴方の便の状況などわたしは全く興味はありま
せんから」

「そうなんですか。三好さんはちゃんと出ていますか？」

「ひどいセクハラですね。耳の後ろの辺りから、禿げて、その後死
んでください。話を戻します。全く、貴方と話していると、知らな

い間に下品な方向へ持つていかれます」

「それは三好さんが下品だから、とかではなく？」

「貴方がですよ。とにかく、妖魔と戦う。これは新人にとってはとても酷なことなんです」

城山は顎を揉んだ。

「何ですか？ それが仕事じゃないですか」

「人間という生き物は、そう簡単じゃない。いくら仕事内容をわかって、同意の上で入ってきてても、やはり過酷な状況には音をあげたくなるものです」

「はあ」

「中には震えてろくに戦えないで戻ってくる者も居ます。妖魔の死体に戻ってしまう者も居ます。戻って来るとすぐに辞表をしたためる者も居ます。しばらく寝付けない者も居ます。それほどまでに、死が近い仕事なんですよ。妖魔にしても、自分にしても、仲間にしても」

「はあ」

「聞いていますか？ 牛乳を飲むのは後にしてくれと言ったじゃないですか。わたしが飲んだ辺りから飲まないで下さい」

「聞いていますよ。食べるばかりじゃむせるじゃないですか。鼻からレーズンを出すところを見たいんですか？」

「結構です。とにかく、そういった事情から新人のケアというのもわたしの中では重要な仕事なんですが……」

城山の顔をじつと見る。ろくに戦えなかったなどという報告は十河から上がっておらず、寧ろ少し気落ちしたような様子からは、彼が存分に活躍したことが窺えた。妖魔の死体に戻すなんてことは勿論なさそうだった。そもそも手ずから首を抉っている凄惨な現場を見たことがスカウトの契機だ。辞表を書くころにもこの部屋に筆記具のような物自体見つからない。多分持つてきていないのだろう。仕事でメモを取るようなこともあるだろうに、逆の意味で問題である。寝付きすぎている。一体一日に何時間寝れば気が済むのだろうか。

「貴方には全くもって必要ないようですね」

「何故ですか、いたわってくださいよ。その推定Cカップの胸に飛び込ませてくださいよ」

「便の話を封じたら、途端にセクハラ路線ですか？ 貴方に生きている価値はあるんですか？」

「ないですね」

妙に真剣な声で、三好は吃驚した。

「あの、冗談ですからね？」

「わかっていますよ。ただ僕がそう思っているだけですから」

三好が気まずそうにする。

「貴方が言ったように、僕はとても歪なんです。妖魔に限った話でもない。人を殺しても、それが自分の気に入らないような人間だったら、ほとんど何とも思いません」

「……」

「十河さんも、僕のこういう所が気に入らないんでしょうね。貴方が望んだようなチームシップは形成できませんでしたよ」

三好ははっとした。実は、城山の心のケアなんてのは、ハナから想定していなかった。そういうタマではない。だからここにやって来たのは、十河との軋轢に関して、少し探りを入れないという思惑からだった。いわば人間関係のケアである。そういった魂胆を見透かされたような気持ちだった。

「とにかく」

城山は自分の分の菓子を食べ終わると、両手の平を打ち鳴らすようにして、カスを落とした。

「僕は妖魔は倒します。貴方が望むより多く倒すかもしれません。ですが…… 他のことには期待しないで下さい」

城山はそれきり口を閉じてしまい、三好は何とも言えない気持ちで残りの菓子を平らげると、挨拶もそこそこに部屋を辞していった。

第二十四話：ゲスにはゲスの願いがあ

9月6日(WED)

昼間よく寝たものだから、眠れる気がせず、城山は川瀬と会うことにした。ファミリーストランで落ち合うと、グダグダと居座った。日付が変わっても一向に立ち去ろうとしない二人に、店員もそろそろあからさまになってきた。モツプがけの際にも「失礼します」の一声もなかった時には、そろそろ限界かとも思ったが、川瀬の方は特に気にした風でもなかった。人なんて人に迷惑掛けるために生きてるんだよ、といつか講釈垂れていた。彼以外が言えば、それはどことなく含蓄のある言葉に聞こえたかもしれないが、城山は彼の間性についてよく知っているので、単なる甘えにしか聞こえなかった。

「それでどうなんだよ？」

一通りギャンブルの話が終わると、必然というか、城山の仕事の話になっていった。仕事が決まった。何とか生活はいけそうだ。そういうことは話した。勿論業務内容は話していなかった。

「まあ、続けるしかないだろう」

「へえ。人間関係はどうなんだ？」

川瀬の方も今まで働いたことがない、というわけでもなく、高校の時にコンビニのアルバイトをしていたことがある。そして、働く上で一番ネックになりうるのが、この人間関係だと考えていた。

「続けられそうか？」

「ううん。どうだろうな」

もう何度もらったか知らないお冷が入ったグラスを傾ける。喉をひんやりした液体が通り過ぎる。

「実際人間関係もクソもないよ。まだ今日、まあもう昨日だけど、初日だったんだし」

「それもそうか」

「ただ、まああまり歓迎はされていないかな」

怪訝な顔をする川瀬に、城山はかいつまんで説明する。十河のことだ。ツーマンセルを組むことになった年下の女に、妙に邪険にされている。大体そんな説明をした。

「ああ、それは多分お前からゲスの匂いを嗅ぎ取ったんだろう」

「なんだよ、それ」

「いや。普通に臭いよ、お前。ゲス以下の匂いがぶんぶんするよ？」

「なんだよ、それ」

「お前はいつだってそうだよな」

「何がだよ」

「俺やお前クラスになると、もう見た目からしてゲスいんだよ。そういうところに無自覚だって言ってるんだ、お前は」

「そうなのか？」

「驚くよな。自分が一般人と同列だと思ってる節があるんだもん。こっちが恥ずかしくなってくる」

川瀬もグラスを傾ける。備え付けのナプキンに垂らして遊ぶ。

「ゲス、ゲスラ、ゲスナズンってあったら、俺やお前はもうゲスラくらいまではいつてるからね？」

「なんだよ。攻撃魔法か」

「はた迷惑魔法だよ。たまに怒りの状態異常も付加する。あと前科でもつけば、ゲスナズンまでいくよ」

「……」

「んあ？」

今度は飲むと、グラスを口元まで持って行って、川瀬は城山の様子に手を止めた。

「もしさ、俺が人を殺したことがあるって言ったら、お前はどう思う？」

「んん？ まあ状況にもよるだろうな。相手にもよるし」

短絡的に肯定も否定もしない。こういうところが、内心城山は好ま

しかった。多分、同じ立場に立つたら、城山も同じように答えるだろう。

「義憤っていうか、糾弾するような気持ちは湧かないか？」

「なんだよそれ。つまんねえ。大体ああいうのって嘘くさくて嫌いなんだよ」

どうやら城山が酔狂で言っているわけではないのが、川瀬にはわかった。

「まあ仮にお前がそんなゲスナズンだったとしてもだ。本当に相手や状況による。例えば相手に襲い掛かれて已む無くとかなら、仕方ないべ。相手が友達とか家族とかだとするなら、結構ひく」

「そっか」

「……まあ、お前とは二年くらいの付き合いだけど、実際友達とか家族とかに手を上げる奴だとは思ってないけど」

「ありがとう」

「やめるよ、気持ち悪い」

川瀬はぷいとそっぽを向いてしまう。軽く沈黙が流れる。

「まあ、とにかく。あんまり俺らみたいな奴の精神性なんて理解されないんだから、気張るなよ。嫌だったら辞めて他の仕事探しても良いんじゃないか。俺が無責任に言えることじゃないけどさ」

それが簡単には辞められない。城山が黙っているのを見て、出るかと声を掛けて川瀬は伝票を持って立ち上がった。

城山が帰宅したのは、朝の六時頃だった。暇つぶしに二十四時間のゲームセンターに行ったり、ビリヤードをしたりして川瀬と遊び尽くした。途中からアクビ混じりだった川瀬だが、眠たいとも言わずに付き合ってくれた。

ただいま、とは言ってみたが、返事があるとは思わなかった。リビングの扉を少し開けて、奈々華が顔を覗かせた。おかえり、と返してくる妹に、城山は言葉を探した。

「随分早いんだね？」

「うん。お弁当作らなきゃいけないし」

そこまで言って、何かに気付いたように、奈々華が声を上げる。

「あ、そうだ。お兄ちゃんの分、良かったら作るうか？」

城山は苦笑した。

「いや、今日は俺夜勤だよ？」

「あ、そうなんだ。でもお昼、外に行って食べるのも面倒じゃない？ 私の方は気にしないでいいよ？ 一人分作るのも二人分作るのも一緒だから……」

「え、でも…… いや、まあそこまで言ってくれるなら、断るのも悪いし、お願いしようかな」

それから、城山は部屋にはこもらず、リビングに入った。奈々華が意外そうな顔で見る。料理や支度の邪魔にならないかと、心苦しい気持ちもあつたが、奈々華に用があつたものだから、そうした。リビングのソファーに腰掛けると、ポケットからクシャクシャになった紙を取り出した。二つのソファーに挟み込まれたテーブルの上に置いた。

「これ、置いておくから、よかつたら後で見てください？」

奈々華はキッチンの手を止めて、すぐにやってくる。後で良いと言っている城山としては、こうなるのが嫌だったのだが。

「えっと、出勤表？」

奈々華が覗き込む。

「そう。まあ俺の勤務なんて興味ないだろうけど、キミの生活にも関わることになるから、一応」

城山は貰った当初、前半の理由から見せる気はなかった。というよりそういう発想に至らなかった。だが川瀬とプラプラしているうちに、後半の事情を思い返した。正確には川瀬は関係なく、時間が経って、考えを改めたということである。しかし仕事が終わって家に直帰していたら、思いも付かなくて言い出すキツカケもなかったかもしれない。そういう意味では彼に感謝しなければならぬ、とも

思っていた。

「うん。後でコピー取っておく」

まじまじ見つめる。

「あのね」

「うん？」

「この、夜勤の日とか、お休みの日とかに、わたしの買い物に付き合ってもらったりは出来たりする？」

遠慮がちな奈々華の質問。

「えっと」

一拍置いてから。

「それは勿論。いつでも言っていて欲しい」

城山は自分の責任ではないとはわかっていても、何か、彼女を不当に縛り付けているような錯覚を持っていた。実際過剰ではないかとも思っている。何も外出の際にその全てに同行して目を光らせる、なんてことが本当に必要なのか。必要というのは、彼女がそこまで望んでいるのかということだった。城山自身が気まずいから、とかそういうことではなく。守るとは言った。それを望まれていたのも恐らくは事実。だがここまでのことを想定して、そう願ったのか。優しい彼女のこと、自分から守って欲しいというような雰囲気を出した手前、やりすぎだと感じていても、鬱陶しいと思っても、言い出しにくいのではないか。そういう疑念が拭えない。奈々華は心底嬉しそうに微笑んで、ありがとうと礼を言った。城山はその笑顔に、裏などないと信じたかった。

第二十五話：D O N T B E D O W N

早めに夜勤も経験しておくのがいいだろうという三好の意向が半分。十河の出勤状況から振り当てるべき夜勤が今日だったというのが半分。その二つの理由から、城山の二日目は夜の十時から勤務ということになった。

エレベーターの籠室から出ると、七階の広間の襖を開ける。エレベーター側の壁に設置されたカードリーダーに、急ピッチで作成された社員証を通す。出退勤の情報はこれを通して三好のパソコンへ送られる。腕時計を確認すると十時五分前だった。遅刻はなるべくしないようにしようと考えている。真面目に勤め上げようという殊勝な気持ちからではなく、単にこれ以上勤務時間を減らすのは得策とは思えなかったから。ただでさえ人より一時間少ない給料になるのだ。社員証を財布にしまい、部屋を後にしようとしたところで、反対側の襖が開いた。相手の顔を見ると、城山は軽く会釈した。相手は流石に昨日のように舌打ちのような音は出さなかったが、小さな声でおはようと言っただけだった。ここに居ても仕方ないので、城山は自室に向かうべく足を踏み出した。

「ちよつと待て」

「はい」

くるりとまたその場で反転。

「今日の予定表だ」

十河は自分が居る方の壁を親指でさす。

「へえ。そんなところに」

城山は近づいていく。十河は用は済んだのだからどこかへ行くかと思っただが、城山が来るのを待つようにその場から動かなかった。

予定表を見る。今日は面白いように空白だった。見ればもう一組出てきている者たちが居るようで、城山十河両名の他に、寺本。それから榎木、柏原と読める。

「真田さんは、一体どこを案内したのか」

壁から目を離すと、十河が渋い顔で口を引き結んでいた。城山は苦笑する。あの男、城山ほどではないが、適度にちゃらんぼらんな空気もあつた。うっかり、ということなのだろう。

「十河さんは覚えていてくれたんですね」

城山が昨日、予定を尋ねたのを覚えていて、それで真田から案内を受けなかった可能性に思い至り、こうして今日の出勤の際に教えてくれたという経緯だろう。

「ところで、もう一組いるようですが」

「ああ。夜勤はスケジュール合わせみたいなものだからな。あまり昼間の勤務ばかり…… 実戦ばかりでは気が滅入ってしまうところ、息抜きというか、休憩回しのような側面もあるらしいな」
「苦々しそくに言うあたり、十河はそういった側面をあまり良く思っていないことが推し量れた。仕事に真摯な態度は城山も昨日だけで嫌というほど理解していたので、色々察せた。」

「なるほど。じゃあ夜勤で実戦、なんて場合はないんですか？」

「当然ある。だが、大抵の人はツイていないと考えるようだ」
また苦い顔。

「ふうむ。ではこのもう一組は、どうして三人居るんですか。こちら辺も調整のためですか？」

名前の書き方として、組み分けのように、一団で書かれているのだつた。

「ああ、そういう場合もあるが、そうやって一括りに名前が連なっているのは普通はチームだ。だからその人たちは、昼間の勤務であってもその三人で組んでいる。ちなみに組み分けは力量などによって、それぞれ人数が違う」

「へえ。じゃあ僕と十河さんと、この三人だと力量差があつたり、その他の事情が違つたりということですか？」

「……ああ、そうなるな」

「なるほど」

ありがとうと締め括ろうとして、十河がまだ何か言いたそうにしているのに気付いた。伝えなければいけないこと、例えば今さっき話してくれたような業務上必要な情報ではなく、ごく個人的なことではないか。言いにくそうにしている様子から、城山はそうあたりをつけた。別に放っておいて、礼だけ言つてさっさと立ち去ることも出来たが、気まぐれに待つてみることにした。三十秒ほど待つてみると、やっと十河は口を開いた。

「多分…… わたしではなく、アンタの力量だろう」

「え？」

「二人組というのはあまりない。今は真田さんと乃木さんという人が二人で組んでいるのだけだ」

「へえ。そのお二方と、僕等だけということですか？」
首肯する。

「わたしも最初聞いた時は驚いた。わたしに二人組なんて務まらないだろうと思った」

二人で組むというのは、それだけ評価されているということだ。

「相手を聞かされて、なるほどと思ったよ。三好さんが随分高く買っているのは知っていたし、わたしも実際見て、昨日も見たが……」
そこで言葉は途切れた。見れば握った拳が震えていた。城山は励まそうとは思わなかった。貶そうとも思わなかった。ただ純粹に思ったことを口にした。

「そうじゃないと思いますよ？」

「気休めは」

「いえ。別にそういうつもりはありません」

まあ聞いてください、と城山は語り始めた。

「貴方の特性として、バックアップに優れている点が挙げられます」
「それしか出来ないとも言えるな」

自嘲気味に口を挟んだ十河に、城山は仕方なさそうに笑った。駄々っ子を見る父親のような少し優しい目だった。十河はそんな彼の顔を初めて見た。

「僕にはそれが出来ません。誰かの支援なんて、とてもじゃないが無理だ。その代わり、直接の戦闘になれば盾にも剣にもなれます」
クスリと笑った。また優しい表情で、十河は泡食ったまま、その顔を見つめていた。

「それしか出来ないとも言えるな」

そっくりそのまま城山は彼女の言葉を返した。はっと鉛を飲まされたような気持ちになったのは十河。色んな理由から驚かされてばかりである。

「僕は昨日貴方と一緒に戦いましたが、別段軽蔑したり、それこそ嗤ったりしようなどという気持ちはありませんよ？ 自分の方が優れているとも思わない。元々求められる、担うべき役割が違います」
昨日は逸って近接戦闘などをしていたが、それで結果が出なかったことにしても、城山は彼女に対してそういった念は抱かなかった。

土俵が違うのである。サッカー選手が野球場にやって来て、バットを振ってみて三振したとして、下手糞などと野次る者が居るだろうか。もし嗤うとすれば、そういった役割分担もろくに考えず、私情に流されて、その違う土俵が上がっていった浅はかさだろうか。城山は、だがそれを指摘することはなく、締め括ることにした。そろそろ話を切り上げて部屋でくつろぎたくなってきた。

「三好さんが言った、互いの足りない部分を補い合える、という言葉葉に集約されているんじゃないですかね」

城山は言われた時にはピンとこなかったが、実際昨日共闘してみているほどそういうことか、とわかった。膂力だけが頼りの、超のつくインファイターと、正確無比なコントロールで以って援護射撃を旨とするバックアップパー。少し癩な部分もあるが、城山は三好の言葉にはある程度、理があると感じた。

「……」

十河は深く何かを考えようだった。城山は結果励ましたことになっっているのだろうか、と思わないでもないが、あまり興味がなく、それではとだけ挨拶して広間を、エレベーターの方へ戻って行った。

「城山」

と、その背に十河。

「なんですか？」

振り返った城山に、口をパクパクさせるだけだった。しばらくそうしていたが、やがて諦めたように瞑目してかぶりを振った。

「いや…… やっぱりなんでもない」

城山は訝りながらも、今度こそ広間を後にした。

第二十六話：牛井屋はやめる

9月7日（THU）

ぼんやりネオンの光を吸い込んだ、低い雲がたなびいている。星明りも、月明かりも、都会の空では主役ではない。東側の窓は西と違って嵌め殺しではなく、回転窓になっている。横に備え付けられたレバーを回すと、それが丁度螺子のような役割をしていて、緩んで開く。それでも昼間は、光化学スモッグ警報が流れることもあり、あまり進んで開けようという気持ちにはならない。警報がないときでも、淀み、濁った空気をしている。だから初めて開けた。夜になると、草木の寝息が、幾分か澄んだ空気を作り出しているのにも、今日初めて気が付いた。確か、近くに大きめの公園があったんじゃないか、と目を凝らして下を見回してみたが、見つけれなかった。刀を作っている。

先程呼び出されたときに、三好から聞かされた言葉だ。調べたとは聞いていたが、まさかとつくに忘れ去った過去の栄光をこんな場所で他人の口から聞かされるとは思いもよらなかった。

中学の頃に、剣道の大会で全国制覇しているそうですね。わたしは詳しくはないのですが、ある程度上になつてくると、実力差がはつきり出にくい競技だとも聞いています。その中で圧倒的だったと聞き及んでいます。貴方の武器は刀以外に有り得ないでしょう。

勝手なことを言ってくれる。上つてなんだよ。人を傷つける技能が優れているのを上と表現するのか。そうだった。そういう仕事なんだった。城山は心が暗澹としていくのをじっと耐えながら聞いていた。

今のままでも十分に戦力になると思っはいますが、やはり貴方も得物があったほうがやり易いでしょう。特製のものを用意します。

一週間程度で出来る筈です。期待していますよ。

「……」

窓枠から手を離すと、くつきりとレールの跡が手の平に残っていた。日付が変わり、午前二時。城山は空腹を感じて街へ繰り出すことにした。エレベータの籠室を呼び寄せると、すぐに上がってきた。こんな時間まで人が居る階というのは、七階と八階だけだ。一階のポタンを押して壁に背を預ける。

がたん。小さな音を立ててすぐに止まった。あまりに早いので階数表示を見ると七階、すなわちすぐ下で捕まったらしい。開閉口に視線を下げると、仏頂面した十河がいた。チームなのだから同じ時間に休憩が回ってくる。夜勤に関しては、城山も皆と同じような勤務形態になる。奈々華のお抱え運転手をやる必要がないからである。

「……お疲れ様です」

「ああ」

城山とは反対側の壁に背もたれる。

「……」

気まずいが、特に話すこともないので、城山は黙っておくことにした。少しずつ若くなっていく階数表示のランプをぼんやり眺めてやりすくす。

「……これから飯か？」

「え？」

「食事を取るのかと聞いている」

「え、ええ。まあそうですね」

「何処へ行くんだ？」

「いえ。決めていませんが、夜間でもやっているとなると、牛井屋とか、ファミレスとか」

「そうか。牛井屋はやめる」

「何故ですか？」

「わたしはあまり好かない」

お前が食べるんじゃないだろう、と言ってやりたい所だが、城山は後輩だった。

「ファミレスにしろ」

「えっと」

困惑に顔がひきつる。

「そうすればわたしも一緒に行ける」

「はあ？」

素っ頓狂な声。城山は慌てて十河の顔を見た。真面目な顔、大真面目な顔。

「ええっと。ついてくるつもりですか？」

「わたしについてくるのだ。わたしの方がこちら辺の地理には詳しい」

「いえ、そんなのはどっちでもいいんですけど」

「嫌なのか？」

「ええっと…… それはこっちが聞きたいんですけど」

「嫌ではない。一昨日は借りを作ったからな。一度飯でも奢ろうかと思っっていたんだ」

「一昨日」

城山は中空を眺めながら、彼女の言っている意味を考える。

「ひよっとすると、あの妖魔の戦いの件ですか？ お姫様だった」

「おひ…… そうだ」

「はあ。律儀な方ですね。これからチームで戦うのですから、ああいったこと一々を気にしていたらキリがないですよ？」

「それはわたしが足手まといだと、暗に言っているのか？」

「貴方はまだそんなこと……」

「冗談だ」

そう言つと、十河はほんの少し唇の端を持ち上げた。

「驚いた」

「何がだ？」

「貴方でも冗談を言うんですね」
しかも笑えない。

「わたしのことを何だと思っているんだ？」

城山は頬の辺りを掻いて、話を元に戻した。

「僕が貴方に助けられた場合は、どうすればいいんですか？」

「わたしに奢ればいい」

「それはまた面倒な」

城山はそう思うが、十河の性格を考えれば、借りだと感じてしまっている以上、何か返さなければ、気が済まないのだろう。そしてそれが彼女の流儀なら、恐らくは曲げない。

「……わかりました。ご馳走になります」

チーンと間抜けな音がして、一階に到着したことを告げる。さっきの言葉ではないが、十河が先導するように降りた。

白い壁に、赤い看板。奇しくも三好に奢ってもらったファミリーストランと同系列店。城山が苦笑するのを他所に、十河は自動ドアを潜ると、さっさと店員に案内を受ける。窓側の席に通され、対面同士に腰掛ける。

「好きなものを頼め」

「ああ、はい。ビールはいいですか？」

「休憩中とはいえ、勤務もまだ残っている。控えろ」

「……わかりました。じゃあこの豚しゃぶライスにします」

「違うやつにしろ」

「何故ですか？」

「それはわたしが頼む予定だ」

「……」

一番値段が高いサーロインステーキに、ご飯を大盛りにしてやることにした。

黙って箸を進める城山。十河は何か会話の糸口を探しているように見えた。しかし二人に共通の話題というものは少なく、苦戦してい

る。先程から何度も豚肉を胡麻ダレにひたして、持ち上げてはまたひたし、と挙動がおかしい。城山は内心で苦笑していた。

「十河さんは、休憩まで何をしていたんですか？」

「え？ わ、わたしか？」

口に運びかけていた肉が、皿の上に落ちる。

「何をそんなに慌てているんですか？」

何か如何わしいことでもしていたんですか、とからかえる程には打ち解けていなかった。

「いや、なんでもない。わたしか。わたしは、パソコンをいじっていた」

何か如何わしいサイトでも覗いていたんですか、とからかえる程には。

「へえ」

「一昨日妖魔を倒しただろう？」

「ええ。あの虫のような牛ですね」

「ああ。アレのデータを反映していた」

「反映？ どこにですか？」

十河が我が意を得たり、という感じで箸をカチカチ打ち鳴らした。

「データバンクだ。まあ簡単に言えば、妖魔の凶鑑だな。わたしが記述と、実質上の管理を任されている」

「ほお。凄いじゃないですか」

「いや、それほどでもないがな」

照れくさそうに笑う十河。

「ああ、そう言えば写真を撮っていたのは、それに使う為だったんですか？」

「察しが良いな。実物の写真もあったほうが、色々理解が早いだろう？」

「理解が早い、って誰かに見せるものなんですか？」

「わたしたち職員は誰でも閲覧が出来る。勿論城山も。広間に共用のパソコンが置いてある」

「へえ。後で見えます」

「本当か？」

「え？ ええ。まあ他にやることもないですし」

「そ、そうか。なら見てみると良い」

「そうか、そうかと口元に笑みを浮かべながら、目を細めている。

「そうだ！ まだ名前を決めていなかったんだ。城山も考えてみるか？」

「名前？ お子さんでも産まれるんですか？」

「違う。アレは新種だったのだ。だから呼称を決める」

「命名も一任されている、と言う十河の顔は照れくささ半分、誇らしさ半分。城山はよくわからないが、気圧されるように頷いていた。

第二十七話：QUARREL

食事から戻ると、七階は喧々囂々（けんけんごうごう）としていた。隣の十河に何があつたのだろうか、と尋ねたが明確な答えが返つてくるはずもなく、城山と同様、当惑した顔をしていた。丁度その時、広間から三好が顔を出した。

「お帰りなさい」

「ええ。これは一体何の騒ぎですか？」

三好が口を尖らせる。

「少し、ね」

すると広間から、小柄な男が続いて顔を出した。榎木さんだ、と十河が城山に小声で教える。

「どうもこうもない。対応が遅いんだって、話をしていたんだ」

榎木という男が、城山に何か同意を求めような声音で語りかけた。一見落ち着いているようにも見えるが、やや目が血走っており、ついさっきまで怒号を上げていたのが彼ではないかと、城山は推察した。真偽は定かではないが、少なくとも初対面の城山に馴れ馴れしいだとかの気遣いも出来ない程には余裕がないようだった。

「えっと、何が起こつたんですか？」

「柏原が負傷した」

十河を見る。城山と彼女は、食事を共にしたが、そこまで仲良くなつたわけではない。だが、少なくとも仕事の話ならば、一番正確に素早く情報を提供してくれる人間だということは、城山の認識の中に根付いていた。

「柏原さんは、榎木さんのチームの一人だ」

三好が続く。

「貴方たちが休憩に出ている間に、スクランブルがあつたんです」
やや話が読めてくる。三好が小さく振り返り、広間の誰かに目配せをしたようだ。するともう一人、彼らのチームの一員だろう、三十

代くらいの女性が戸口まで来た。宥めるように榎木の腕をさすって、部屋の中へと戻した。寺本さんだ、と短く十河が教える。三好は尾を引くような長い溜息を吐いて、言葉を続けた。

「それで、あの三人に出てもらったんですが、妖魔は取り逃がしてしまっただけ」

「なるほど」

「その戦いの中で柏原さんが負傷した、と？」

「そういうことです」

「対応が遅い、って言うのは？」

「怪我した時の情報が錯綜してしまいました。救急車が一台向かったのですが……」

話を総括すると、こうなる。柏原が負傷したとだけ報の入った三好は、すぐにパイプのある大学病院へ要請し、救急車を一台、至急現場へ向かわせた。だが、どうも怪我をしたのは柏原だけではなく、一般人も二人重傷を負っていた。ベッドは二つしかなく、計三人の重軽傷者を乗せることは出来ない。そこでまだその時は意識のあった柏原が、一般人の搬送を優先するように言った。そして救急車はその言葉に従って先に二人の重傷者を運んだ。そこまではよかったが、次の救急車、つまり二台目がやって来たのが、随分と遅くなった。その間に柏原は疲労と怪我のせい、人事不省に陥った。幸い命に別状はないが、頭をやられており、そういった面からは予断を許さない状況だそう。そういう面というのは、この先意識が戻るかどうか、とかそういう……

「とにかく、貴方達は戻ってください」

三好の声には明らかな疲労の色が滲んでいたが、二人は言われた通りにするより他なかった。

とりあえず十河の提案で彼女の部屋へ戻った。自分が入ってもいいのか、とか部屋の調度とか、色々気になることもあったが、最も気になることを話題に選んだ。

「不思議に思ったことがあります」

「なんだ？」

「妖魔は、人を狩るのを目的としているのに、どうして途中で隔離世を解いてしまったんでしょう？」

「さあ、わたしにわかるわけがないだろう」

それこそ妖魔に聞いてみないと、とポニーテールを振った。

「ひよつとすると、妖魔の方も弱っていたのですかね」

だから追撃を諦めた。そう考えるのが、一番自然な気がした。

「さあな。考えても仕方ないことだ」

切り替えようと外に。パソコンが起動する音が部屋に響く。

「わたし達はわたし達に出来ることをするしかない」

データバンクは、そのまま凶鑑の様相だった。分厚い装丁がないだけで、ページを繰るかわりにマウスを上下させる。

「へえ。結構あるんですね」

記事のある妖魔は、数えるのも億劫だが、百種はくだらないだろう。十河がまた気分良さそうに、別窓で文章ソフトを立ち上げる。

「こいつだ」

ページの一つは、妖魔の写真。もう一つのページには、無機質なワードの羅列が並んでいる。特徴や攻撃方法、撃退方法、弱点、備考。やや硬い筆致が必要と思われる情報が書き連ねられていた。

「あとは名前だけだ」

写真のページの上部、そこにカーソルを合わせる。空白のその部分で縦線が明滅していた。

「バファで」

というのはどうだろう、と真顔で聞いてくる。

「なんですか？ 暗号ですか？」

「バファローと百足を足したんだ」

「センス……」

「なんだ？」

「いえ。何故英語と日本語を混ぜるんですか？ それならどっちか

に統一して、百足牛むかでうしか、BUFFALO、CENTIPEDEとか
じゃないんですか？」

「セン……？」

「百足のことですよ」

「博識なんだな」

「いや。英単語を覚えるのって結構好きだったんですよ」

「しかし。百足牛。安直だがわかり易いし、良さそうだな」

安直という割には、城山に意見を求めるまで出てこなかったのだが、
何度も繰り返し呟いて、それにしようかと満足気に頷いた。

「名前は良いとして、この弱点なんですか？」

「む？」

「これって、個体差は無いんですか？」

「あ、それは……」

十河の顔が曇る。あるのだろう、と城山はその様子だけで理解した。
つまりこの同種のカテゴリの中にあっても、その個体個体で弱点
が異なるケースもあるということだ。例えば、この新しく拝命した
百足牛にしても、次に同じ容貌の個体と出会っても、また首の後ろ
辺りに弱点を抱えているとは必ずしも言い切れない。そういうこと
らしい。

「……」

黙ってしまう。怒られている子供のように大人しい。

「まあでも、十分に参考にはなりますよね」

「え？」

十河は意外そうに城山の顔を見た。相変わらず画面を見据えている
その横顔は、真剣だった。

「第一に攻めてみる箇所も決まっているというのは、実戦において
は中々やりやすいですし。もし良かったら、もう少し色々見てもい
いですか？」

「あ、ああ。いいぞ。まだ広間は混沌としているかもしれないし」
礼を言つて城山は画面に見入る。スクロールする音、クリックする

音。しばらく部屋にはこの二つの音だけがしていた。

第二十八話：賢愚

十河由弦は、自分の感情を持て余していた。何故嬉しいのか、わからないのだった。

横になって、さっきまで城山の座っていた辺りをぼんやり見る。結局三十分ほどPCの画面と睨めっこして帰っていった。随分長居してしまっすいません、と口にして帰ろうとする城山に、もう少し居ても良いぞ、と声を掛けそうになった。そして自分が何故そのような言葉をかけそうになったのか、それがわからなかった。考えているうちに、自分は嬉しいのだ、ということがわかった。そして今度は何故嬉しいのかわからない。そういう思考を辿ってきていた。「やはり」

自分の仕事が評価されたのが、嬉しかったのだ。そう考えるのが妥当である。十河は自分の評価が低いことを知っているし、ある程度は甘受するべき部分があることも理解している。だが、彼女も人間である以上、評価されたいという願望は当然ある。いやきつと人並み以上に持ち合わせている。

他の職員はあまり例のデータベースを閲覧しない。理由は城山の言った、弱点の個体差だろう。これで予め情報を入れておいても、実戦では異なるケースもままあるのだから、必要がない。そう考える者が多いのだ。必然、十河のやっていることはあまり人にありがたがられていない。裏方のやるような、地味でつまらない、しかも有用性も疑わしい仕事と断じて嘲る者まで居る。

「ふふふ」

笑みがこぼれる。だが、そんなデータベースを城山は、有益だと言ってくれた。あれほどの、戦いに於いては軍神のような働きを見せる男が、無駄ではないと言い切ってくれたのだ。これほど心強い励ましはない。

「励ましと言えば……」

自分の戦いについても、城山は蔑むでもなく、ごく平然と必要な役割だと言ってくれた。世辞を言うタイプには見えず、また自分に対してそれをする必要もなく、また淡々と事実だけを告げるような彼の一本調子な口調が、それが本心であり事実であることを裏打ちしている。励ます意志があつたわけではないのだ。だけどそれがパラドックスのように励ましている。

「不思議な男だ」

やはりそれでもまだ、手放しに良いヤツだとは言えない。先程も、会話に困った際に振ってみた話題。例の民間の重傷者二人は大丈夫だろうか、という話。画面を見ながら、まあ大丈夫じゃないですか、と片手間に返してきた。もう誰が聞いても何も考えずに言っている言葉だとわかるような、信じられないほどにテキストな言い草だった。興味が無い。少なくともこういつた仕事、公共に己を捧げるべき仕事に従事している人間としては由々しき無関心。はつきり悪い部分だと言える。酷薄だ。

「だけどそれだけじゃない」

食事を共にしたとき、自分が何か話そうかとヤキモキしているときには、それを機敏に察して、優しい顔で笑って、あちらから話を振ってくれた。その他にも、彼の鋭い洞察力を感じることはままあつたが、どれも悪意のない言葉で發揮されていた。それどころか……

「優しかった」

心の機微に聴く、それでいて優しさもある。とても冷たいのかと思っていたが、見えづらいだけで、恐らくあの無表情の下では、思いやりも多分に働いているのではないか。世辞や甘言は言わない。事実だけを告げる。だが、その事実が相手にとって残酷である場合、口を閉ざすのではないか。或いは時折見せる優しい笑みや、冗句で煙に巻いてしまう。

「賢いのかもしれない」

恐らく自分が思うよりもっと遠謀深慮に物事を考えている。

「でも何故」

何故、その優しさや賢さの少しでも、牛島や例の民間人なんかに向けられないのか。その使いどころが、線引きが、十河にはさっぱりわからない。嘘。心の奥底では何となく気付いている。

「もしかして」

一つの可能性。自分が気に入った人間にしか発揮されないのではな
いか。牛島の人間性など、すぐに底が知れてしまったし、民間人に
しても彼と面識がない。知らない人間については、興味が無い。想
像力がないとは思えない。広い視野を持ちながら、狭い範囲しか見
ない。それではダメだ。

「だけど」

逆に言うと、自分は気に入られているのではないか。何故ならその
狭い範囲の中でも、自分が気に入らない人間は叩き壊してしまった。
言うなれば狭い範囲の視界から弾き飛ばしてしまって、それで無関
心なまま外敵を排除した。そういう心理プロセスだとすると、自分
は牛島や民間人とは違うのではないか。少なくとも自分の命は能動
的に救ったのだ。彼の瞳に映っていないのであれば、あの時自分を
見捨ててしまえば済むことである。つまり自分は、彼のひどく限定
的で厚い、視界のブロックの内側、庇護や親愛を注ぐべき対象とし
て見られているのではないか。

「……………」

結局。結局色々考えてきたが、それが。それこそが、この喜びの一
番の……

「違う」

違うと信じたい。博愛のような、公平無私のような、そういった心
がけこそが、正義であり、職業倫理であり、彼にもこれから身につ
けてもらいたいと考えている思考だ。それを矛盾的に、自分が特別
視されているかもしれないという事を喜んでいては、ダメだ。

「ありえない」

そっと起き上がり、膝を抱えるように座る。膝裏に手が当たり、城
山の手の平の温もりを思い出した。

第二十九話：SHOPPING

9月10日（SUN）

居間に下りてみると、カレンダーの日付に赤丸がついているのを見つけた。今日と、それから二日後、次に六日後…… 三角の印もついている。これも飛び飛びである。

自分の休みと夜勤の日を、それぞれ示していることに城山は気付いた。勿論城山がこんなしち面倒くさいことをするはずがない。無精ひげを指先でいじりながら考える。犯人の正体についてではない。城山でないのなら、この家には住んでいる家人はもう一人しか居ない。故に考えているのはその意図のほうである。自分がわかりやすいようにしてくれたのだろうか、それともこれ全てを妹の為に割くことになるのだろうか。答えは後ろからやって来た。

「おはよう。お兄ちゃん今日休みだよね？」

振り返ると、居間の入り口に奈々華が立っていた。城山はそうだねと頷く。

「そのカレンダーに書いているのは途中なんだ」

「途中？」

「うん。お兄ちゃんの希望とか、予定とか聞いて、わたしの買い物とか諸々に付き合ってもらえそうな日を割り出していくの」

なるほど、と城山が相槌。

「それで、その日が決まったら、また違う表記にしたり、丸の下に予定とかを書き込むの」

城山は妙に気恥ずかしくなった。妹はやはり兄の性質については熟知している。悪気はないが、時たま約束を忘れてしまうことがある。そういうのを防止するために、二人の共有の空間のカレンダーにこうして印をつけておいて釘をさすのだ。隙が無く無駄が無い。

「そういうことか」

うん、と笑う奈々華はほんの少しだけ茶目っ気があった。

「さしあたって今日なんだけど」

「うん」

「ちよっと食材が尽きかけてるんだ」

付き合えということだ。奈々華はこうして週に何度かの買い物で毎日をやりくりしている。有り体に言えば買い溜めというヤツである。城山が夜勤の日や、比較的道が空いていて往復に余裕がありそうな時などに買い物に付き合ってもらおう、というやり方でこの一週間ほどを乗り切っていた。そして今日は城山の初の休日である。

「ごめんなさい。だけど、わたしも食べ物を食べないと死んじゃうから」

殊勝な様子でうな垂れて言う。

「謝ることなんて何も無いよ。勿論付き合おうよ」

本当は奈々華の方に差し迫った用向きがないのなら、パチンコ屋へ行こうかと思つて早起きしていたのだが、先手を打たれてこのような態度、言葉でこられたら、嫌と言える筈もなかった。

「ありがとう。良かった。そろそろ秋口だし、服とかも欲しかったんだ」

またお伺いを立てるように語尾を上げる。ついでに期待を込めた眼差し。

「……うん。キミが良いのなら、今日は一日お供させていただくよ」
用立てがあつたとして、午前中くらいで終わるようなら、パチンコ屋へという考えも粉碎しなけりばならなかつた。

隣街までやってきた。駅前に広がるアウトレットモールで秋物を何点か買い込み、飯時となつた頃にモール内のイタリアンで食事を済ませた。パスタが美味く、奈々華はレシピについて、ああでもないこうでもないと思つていた。食事の後には、まだもう少しニットを見たいという奈々華の要望に従つてモール内を回つた。帽子かと思つたがカーディガンの方だつた。

随分振り回されて、城山は疲れた。まだ元気の有り余る奈々華には一人で行かせ、喫煙スペースで煙草をふかすことにした。同じ施設の中にいるのだから、そこまで張り付いている必要も無かった。それでも言い出しにくかったのは、彼女がとても楽しそうだったからである。久しぶりに兄妹で本格的に出かけるので、懐かしかったのかもかもしれない。そういえば、昔はお兄ちゃん子だったな、と紫煙を見ながら思う。

短くなった煙草をスタンド灰皿で揉み消すと、ぼんやり通りの方を見る。熱心な宗教勧誘が居るようで、通行人は迷惑そうに振り切っていた。

「あれ、ウチにも来たよ」

いつの間にか、城山の傍に奈々華が戻ってきていた。手にはクレープを二つ持っている。

「もついいのかい？」

差し出されたクレープを手取る。甘いものが得意ではない彼の為に、ツナマヨネーズとソーセージが具材のものだった。

「うん。大体見たよ」

「そっか」

また通りに目を向ける。駅から真っ直ぐ伸びてきているその大通りを挟み込むようにして五年ほど前にモールは建設された。通りは西欧風を気取っているのか、黒いガス燈がポツポツとアーチのように湾曲しあっていた。

「ウチにも来たって？」

その一角に、中年の男女数人が居る。濃紺で統一した出で立ちで、ひよっとすると彼らの教義と関係しているのかもかもしれない、とぼんやり思った。

「うん。丁度同じような服装してたから多分」

「へえ」

「怖かった。何か話が通じないんだよ」

「宗教相手だとよくあることだね」

齧ったクレープの端からツナマヨネーズがはみ出して、慌てて顔を傾けた。横向きに見た奈々華の顔は少し不安げだった。

「……何て言ったかな。八角新宗はっかくしんしゅうとか」

「ふうん」

具の流出にカタを付けると、ガス燈の上の辺りにぼんやり視線を彷徨わせながら、城山は言った。

「帰りにホームセンターに行こうか？」

「え？」

「インターフォンにカメラが付いたヤツ、あるだろ？」

残りのクレープをぱくぱく胃に収めると、灰皿の下部についたくず入れに紙包みを放り込んだ。近くに置いた紙袋の取っ手を持ち上げる。中には妹の秋の装いが入っている。

「買って帰ろう？」

のんびり歩き出した兄の背に、妹は小さくありがとくと呟いた。

第三十話：スカラベと硝子は相反するのか

9月11日(MON)

「おはよう」

背後に人の気配を感じると同時に、そんな言葉を投げかけられ、城山は驚きながら振り返った。この頃感度が悪くなってきたと三好がぼやいていたカードリーダーが、ピーとエラー音を鳴らす。

「お、おはようございます」

十河の顔は、妙に引き攣ったように口元が緩んでいるが、目があまり笑っていない。変な笑顔。城山はそう思ったが、口には出さなかった。

「今日は昼頃に妖魔が一体、夕方のは他のチームの管轄だから」

「え？」

「なんだ？」

「あれ。今来たんではないんですね」

城山は腕時計を見る。城山ですら就業の八分ほど前に到着している。一体何分前に来ているのだろうか。

「あ、ああ」

「広間に何か用事ですか？」

「あ、ああ。いや。うん、そうだ」

奥歯に物が挟かったような返事に、城山は首を傾げた。

「そう。珈琲を入れようかと思ったんだ」

「ああ」

給湯場の方を見る。部屋の奥、つまり北側にそういう設備もある。簡単なシンクとガスコンロがあつて、戸棚も備え、中には食器類や調理器具もある。

「し、城山もどうだ？」

「え？ 珈琲ですか？」

「あ、ああ。ついでだ。入れてやらんこともない」

「はあ」

城山は小汚い鞆に手を突っ込む。出てきた右手には缶コーヒーが握られていた。折角ですがすいません、と眉を八の字にして謝った。

部屋に着くと人心地つく間もなく、来客があつた。調子はどうだと訪ねてきた真田は、ほんの少し顔色が悪かった。心配になった城山がワケを問い返すと、真田は弱々しい溜息をついて事情を話した。どうやら数日前に負傷した柏原の代わりに、臨時で榎木のチームに加わっているらしい。しかも本来の彼と乃木という男のタッグも同時にこなしているというのだから、恐れ入った。

「柏原さんの方だけだな。一応意識は取り戻したらしい。でもまだ退院は先だ」

「そうですね」

「当分は俺が馬車馬になるしかなさそうだよ」

城山はもう一歩先を考えていた。自分のせいではないか、と。城山が一人戦力を削ってしまったことも、全くの無関係とも思えなかつたのだ。

「どうかしたか？」

「いえ。随分大変そうですね、大丈夫ですか？」

とても月並みな言葉が出て、城山は自分で苦笑する。

「まあ向こうは助っ人的な感じだからな。大抵は寝ているのも許されているし」

そうは言うが、やはり顔には血色が足りないような気がする。最近知ったことだが、真田はエースらしい。勧誘の際に三好が言っていた、一番の高給取りというのが、この真田のことである。

「……真田さんはどうして、そうまでして此処で働いているんですか？」

迂闊な質問だった。真田の表情が引き締まって真顔になった。

「あ、いえ。言いたくないようなら」

「償いだよ」

「え？」

「俺はさ。ガキの頃、人を殺してるんだ」

「え？ 人を」

「だからその償い」

真田の表情は真顔ではあるが、それ故あまり感情が読み取れなかった。悔いているのだろうか。いや、当たり前だ。償いと言っているじゃないか。城山は自分の方が余程ゆとりのない顔をしているのだろうと思つた。

「それは精神的にも、金銭的にも。償っているんだ」

「……」

精神的、というのは恐らく、罪なき人々が妖魔に蹂躪されるのを防ぐことで、間接的に過去の自分を戒めることに因るのか。

「……ここはワケありの連中が多い。俺は別に気にしないが、まああまり不用意なことは聞くなよ？」

「すみません、でした」

「いや、だから俺は別に良いんだって。妙に隠し立てする方が、逃げてみるみたいで嫌じゃないか」

そう言うと笑つた。この話題が始まる前には柔和な笑顔を浮かべていたというのに、随分久しぶりに彼の笑顔を見たような気がして、城山は知らず安堵している自分に気付いていた。逃げているみたい。彼の言葉は胸に詰まらされるような何かがあつた。

「それはそうとさ」

すっかり悪ガキのような笑みに変わった真田が話をふる。

「お嬢とはどうなんだよ？」

「はい？」

城山は未だ上手く切り替えれずにいた。

「だからお嬢だよ。もう一週間ほどツーマンセルだろう？」

「ええ、まあそうですね」

どう、とはどういうことだろう。思って真田の顔を見るに、妙ににやけた、からかいたくてうずうずしている様子で、どうも男女の仲としてはどうだ、という質問のようだと言測がついた。

「だからよお。上手くいつているのか？」

「いえ。別段、最初と変わらない気がしますが」

「嘘付くなよ。こないだお前と一緒に居るのを見たけど、少しは打ち解けたような空気だったぞ？」

城山はいつのことだろうかと思案顔。確かに彼の言うとおり、少しはまともに話をしてもらえるようにはなった。それでも、元が悪すぎたから今の状況が幾らか美化されて映るのだろう。そういったバィアス抜きに見てみれば、まだまだ仲良しには程遠いように城山は思う。

「対比ですよ、対比。フンコロガシからスカラベの置物くらいにはグレードアップした程度じゃないですかね」

「上等じゃねえか。エジプトだとそれはもう」

「ここは日本ですよ？ っていうか虫扱いの時点で、真田さんが期待するような関係はありえないですよ」

「なんだ、つまらん」

「つまらんと言われても」

城山から見れば、恐らく十河は、真田のような男が好みではないかと思われた。このように面倒見良く後輩の部屋を訪れて様子を見るような優しさ、細やかさ。実際彼のそういった場面を見たわけではないが、先程の言葉を聞くだけで、民間の人間にも思いやりを持って接していそうだ。

「じゃあお前はどう思うんだ？」

「十河さんのことですか？ 女としてということですか？ それとも人間性ですか？」

「いや。どっちでもいい」

真田がまた笑みの中に、真剣な空気を漂わせていた。

「まあ、まだ僕は彼女のことを良く知るわけではないのですが」

そう前置いてから、城山は吐き出すように言った。

「危ういですね」

「危うい？」

「ええ。彼女はとても強い信念を持っているような気がします。またそれに殉じ、己を律する意志力もあります。そういった点では強いのかも知れません」

「……なるほど」

「だけど、その信念があまりに強すぎて、あまりに行動理念として根付きすぎて、それにそぐわない事態、状況に陥った時、あまりに脆い」

最初に共闘した時にも現れていた。城山の人間性を厭い、意固地になつて不利な接近戦を買つて出た。意固地、そう映るのは、恐らく城山には彼女の行動理念や信念といったものを十分に理解できないことに起因する。彼女としては当然だったのだろう。正義を持たない彼に、正義を執行する者でありたい彼女が膝を折つてはならないのだ。プライドとは少し違う気炎。だが、それが破られるような事態に陥った時、彼女の心は、体は、脆性破壊を起こしたように、その動きを止めた。

「よく、わかつてるじゃねえか」

ふ、と笑つた真田。優しさと、ほんの少しの寂寞を見たような気がした。

「お前の洞察力が優れているのか、アイツがお前に心を開きかけているからか、それは知らない。いや多分両方だろうな。俺はそれに気付いてやるのが遅すぎた」

「……」

「いきなりこんなこと言われても困るだろうが……俺が言った義理でもないんだろうが……アイツを守つてやつてくれないか？

支えてやつてくれないか？」

色々と言いたいことはあつた。だがどれも言葉にはならず、真田が肩を叩いて出て行くのを何も言わずに見送つた。

第三十一話：ITCHY ITCY

フラワーマンというそうだ。セイタカアワダチソウのような毒々しい黄色の花を頭につけた小人。本当に小さいが、手や足もあり、それは肌色をしている。顔はのっぺらぼうで、頭髮の部分が花弁で覆われている。そんな小人がうようよ居る。さながら花畑のようでもあるが、茎の部分が人間の格好では、景観としては下の下だった。

「ただの変態のちっさいおっさんじゃないんですか？」

「油断するな。ヤツらの頭から飛ぶ花粉は、有害だ」

十河はホルダーからクナイを取り出すと、険しい表情で前を見据える。

「有害？」

猛毒か、と城山の顔にも緊張が走る。

「ああ。触れるとな」

小人たちが、数匹連れ立って城山たちに向かってくる。どこかフアニーな光景だった。

「痒くなるんだ」

へ？ と拍子抜けしたような城山の下へ一体、やってくる。頭を振り乱し、花粉が舞う。狙ったように城山の股間へと纏まった花粉が飛来した。

午前十一時を少し回った頃に、現場へと到着した。場所はビルからかなり近い。ビルの東側に広がる工場地帯の中に、景観や空气清新を目的に作られた自然公園の中だった。いつか城山が宵闇に窓から探してみた、それだった。車で向かうと十分とかならなかった。

敵は弱い。そう聞かされた城山だが、名前だけ聞かされてもよくわからなかった。例のデータベースは暇を見つけてはちよくちよく覗いているが、獣タイプの方から順に見ていってそれはまだ終わって

いない。妖人タイプとなると、このペースだと来週くらいになりそうだ。

車内で説明を求めたのだが、十河は向こうに着いて、現物を見てから説明を言ったきり、彼の要望に取り合わなかった。実は少し機嫌を損ねていた。朝、折角来るのを待っていて、珈琲でも共に飲もうかと思っていたのに、黒い缶を見せて気まずそうに笑う彼に腹を立てた。諸々身勝手なのは分かっていたが、彼女としても中々に勇気を振り絞った行動だっただけに、袖にされて不愉快な気持ちの方が勝った。またデータベースを少しずつ見ているのは感心だが、何とも亀のようにとろくさい進捗も癪だった。

だから、少し困らせてやるう。そんな意地悪な気持ちがあくあく心の中で鎌首をもたげ、それに従った。従った結果は……

「かゆ！ 何これ、チンチンめっちゃ痒い」

女性の前であることなどすっかり失念してしまったようで、城山はトランクスの中に手を差し入れて、盛んに性器の辺りを掻き毟る。フラワーマンはまるで得意になったようで、クルクルと城山の周りを回って喜んでいる。

「この。ふざけやがって」

城山が踏み潰してやるうと足を振り下ろすが、意外に素早い動きでそれをかわして、また踊るようにその場で飛び跳ねたりする。城山はすぐにでもとっちめたい気持ちだったが、如何せん股間が痒すぎて、今は両手を差し込んで交互に掻き回すことに忙しく、足を振り上げて下ろすという攻撃方法くらいしか残されていなかった。それも股間に両手を当てていることから、普段より幾分も緩慢な動作で妖魔は容易く避けてしまう。まるでその場で地団駄踏んでいるようだった。

スカツとするかと思つた十河だったが、まるつきり遠慮のない城山の掻きつぷりに、むしろ呆れかえってしまった。すまないな、少し

説明が遅かった。わざとらしい笑みを浮かべて吐いてやるつもりだった科白も頭からすっぽり抜け落ちてしまった。

この男は、女である自分の前だというのに、少しは良い所を見せようだとか、股間の痒みを我慢しようだとか、そういつた色気はないのだろうか。一心不乱と言っている。本能の赴くまま、体の反応に従うまま。

「痒い。バカか。くつそ痒い。何かいじつとつたら、若干勃つてきたし。もうやだ。こんな仕事もうやだ。おかあさん」

ブツブツ不平を言っていたが、最後の母を呼ぶ声だけは十河の耳にも聞こえてきた。

頭を振って、クナイを持ち直すと、スツと一本投げる。城山の周りで挑発するようにしていたフラワーマンの頭の部分、花弁をサツと散らす。ピギヤーと小さな悲鳴が聞こえて、小人は膝から崩れ落ちて動かなくなる。

「し、死んだんですか？」

「いや。活動を休止しただけだ。また花をつければ動き出す」

「お、おかあさん」

「誰がおかあさんだ」

立て続けに、二本、三本と投げると、城山の周囲でおちよくつていた一団が次々たおれていく。

あまり害がなく、性格もイタズラ好きではあるが、凶暴性などはないこのフラワーマン。殺してしまうのは忍びない、と最初に担当した者がこの退治方法を発見した。だが花を散らすだけでは、また数ヶ月すれば元に戻ってしまう、性懲りもなく人にイタズラを仕掛けるという困った欠点もこの方法は抱えていた。だが差し当たっては有効であるし、良心が痛まないのも、ほとんどの職員がこの対処法を実践していた。また幾度かの退治を経てなお、あの花の部分を弱点としない個体の報告が今のところもないのも、この方法が好まれる一因である。

「やーい。つるっばげじゃねえか。花がないと何にも出来ないとは、

情けない。はーげはーげ」

今度は城山が得意になる番。間断なく十の指を動かしながらというのは格好がつかないが。

途端に後ろで様子を見ていた残りのフラワーマンの群れが城山目掛けて走ってくる。ああ、ごめんなさい。調子に乗りました、すいません。股間はやめてください。一転して泣き言を垂れる城山は、実は重要な役割だった。彼がああやって一手に引き受けてくれているからこそ、十河のクナイは十分に狙いをつけた上で、精密機械のように無駄なく正確に頭の花びらを舞わせるのだ。即ち囷である。

快刀乱麻の投げっぷりで敵をなぎ払い、時に足りなくなったら城山にクナイを拾わせに行き、約三十分ほどで、花吹雪はおさまった。後にはつるつるの小人が大量と、泣きそうな顔で股間をいじくる成人男性が一人。

世界が元の様相に戻ると、城山の片手運転でビルへ戻った。

第三十二話：効き目はいかほど

小松の部屋を訪ねると、彼女は何かしら読み物をしている途中だったようだ。紺色の背表紙の分厚い本を、のんびりと書棚に戻しながら城山を迎えた。

どうかされましたか、と用件を尋ねるので、簡潔に答えた。十河の話では、フラワーマンの花粉にやられたと言えば、すぐに薬をくれるということだった。

「まあ、災難だったわねえ」

小松は椅子に腰掛けて城山の全身を下から上に見上げた。

「どこが一番かゆいかしら？」

「えっと」

小松が机の引き出しからカルテのような紙を取り出した。こう見えて医師や薬剤師の資格を持っている才媛なのだとは十河の言。別段わざわざカルテに書くようなこともないだろうが、形というのも大事なのかもしれない。だがしかし椅子を回転させて半身になって、ペンをくるくる回す様は、どちらかというとな温かな家庭教師のように見えた。

「どこかしら？」

「ええっと」

「わたしは皮膚科は専門ではないのだけど、一応患部を聞いておかないと。皮膚の粘膜の弱いところだとか、強いところだとか、人体には色々あるのよ」

渋る城山に、苛立つてもなくいつもののんびり口調で優しく諭す。「股間です」

これはセクハラではないだろうか。三好に散々しておいて、今更なのだが、自分は相手を見てやっていただけと気付いた。ある程度の信用を得ている相手、やっても本気で怒られないだろうという判断の下にやっていた。あまり接点も無く、いまいち人間性のわからない

い小松相手にこういうことを言うのはかなり気が退ける。なるほど。相手を選んでセクハラをするとは卑劣極まりない行為であり、ここらへんが川瀬の言うところのゲスラなのかと、妙に納得がいった。だが当の小松は顔色を変えることもなく、なるほどね、とだけ言っただけで半身のままカルテにペンを走らせていた。よくよく考えてみれば彼女は医者なのだから、こういったことにも慣れっこである筈だ。何となく、普段のほんとしていて、失礼ながら医者の風格というものをあまり感じさせないせいか、考えが至らなかつた。「本当は患部を直接診たほうが良いのかもしれないけど」「セクハラだ。城山は思ったが、勿論医療行為である。」

「まあ、貴方も嫌でしょう？ 症例もわかつていることだし、お薬だけ出します。デリケートな部分ですからワセリンを多めに混ぜて薄めたものを出しましょう」

そう言ってカルテを締め括ると、ペンを転がすように置いた。

「はあ。お願いします」

調査するところも見られるのかと、少し探究心がうずいたが、どうやら完成したものがあるらしい。

受け取ると礼を言って部屋を出た。

自室に戻つて薬を塗布すると、妙に落ち着かなかつた。薬が広がりすぎても良くないだろうと、掻き毟るのは控えたいのだが、じつとしているとどうしても痒みを意識してしまつていけない。一応暇つぶしに漫画を何冊か持ち込んであるのだが、クソつまらない麻雀漫画で、わけのわからない登場人物がわけのわからない手順で、バカのように和了あがりを繰り返すだけのものだ。正直要らないから持ってきたもので、読んでいてもすぐに飽きて、股間を掻きまくる未来は容易に想像できた。

特に玉と棒の間、その接地面がとても痒かつた。こんなところにまで花粉を飛ばすとは恐れ入る。

真田の部屋を訪ねて世間話をするというのも手ではあつたが、彼の

顔色を思い出してやめる。しかも朝会った時によくわからない頼まれ事をされたのも、躊躇わせる一因だった。

仕方ないので広間に下りて、共用のパソコンでデータベースを閲覧することにした。こちら目を通して抱腹絶倒だとか、そういうことではないが、少なくとも漫画よりはマシだろうと考える。

パソコンを立ち上げると、埃でも溜まっているのか、ウーンと心配になるほど大きな音を立てて画面が明るくなった。頬杖つきながらベースを開いたのとはほぼ同時に、広間の襖が開く音がした。

「なんだ。もう小松さんのところへは行ったのか？」

目を大きくして少し驚いたような十河が向こうから声を掛けてくる。

「ええ。もう薬も頂いて、さつき部屋で塗りたくったとききました」

「そうか。ところで何をしているんだ？」

「ああ。例のデータベースを見てるんですよ」

十河の顔がくしゃりとなった。わかりやすい。城山の方も頬が緩むようだった。

ふ、と思う。こうして自然に笑えるのに、朝方見た笑顔はどうもぎこちなかった。多分愛想笑いといったものが苦手なのだろう。

「そうか。ほとんど毎日見ているようだし、感心だな」

「ええ。まあのおんびり拝見してますよ」

本当に捗々（はかばか）しくないので、贅沢な不満も抱いたりしたが、何だかんだ、やはり見てくれているというのは十河にとってこの上なく嬉しいことだった。

「しかし、毎日見ているってよくわかりますね？」

「え？ ああ。一応カウンターもついているからな」

寄って来て隣に腰掛けると、画面の左端を指差した。個人のホームページのように、来場者の数をカウントする数字があった。だがそれは城山も知っている。彼女の言葉通り毎日チョコチョコ覗いているのだから当然だ。なんでこんなものまで、と不思議にはなったが、「でも、これだけで僕が毎日見ているなんてわからないじゃないですか？」

「その数字、二だろう？」

「え、ええ」

とても寂しいことに、二人しか来ていないということだった。

「一つはわたし、そしてもう一つは」

城山の方をチラリと見る。目が合うとすぐにさりげなく視線を逸らせてしまった。授業参観に来た親の顔を盗み見る子供のようだった。嬉し恥ずかし、十河由弦、十七歳。口に出そうものなら張つ倒されそうだと、城山は心の中だけでからかった。

「ここを日常的に見ているのは大抵わたし一人。たまに三好さんがチェックするから二人になる時もあるんだが……　そしてここ最近
は常に二人」

閑散としているなあ、と思うだけで、毎日毎日チェックしていたわけではない城山は、そういうことかと合点がいく。

何と言っていいかわからず、頬杖を外して指をパキパキ鳴らした。痒みを紛らわす手遊びも兼ねていた。

「どうして皆見ないんだろうな」

こんな自虐じみた言葉が自分の口から出てくることに、多少なり十河は驚いていた。それを誤魔化すように言葉を繋ぐ。

「……ううん。せめて弱点の個体差がない種だけでもわかれば違っただけだな」

城山の方はそんな彼女の内心の変化に気付くはずもなく、眉を撫でながら返す。

「こればかりは。話の通じる妖魔とかは居ないんですか？」

「え？」

十河は可笑しそうにした。

「妖人の方とか。獣の中でも一部は、とか」

「ないない。というか、そういう発想を持ったこともなかった。今まで妖魔とコミュニケーションに成功した例はないからな」

後半は忍び笑いも混じっていたが、嫌な質のものではなかった。

「……そう、なんですか」

何か納得しかねるような、諦めきれないような様子だったが、残念ながら厳然たる事実である。

「なあ、城山？」

「なんですか？」

「もし良かったら、なんだが」

「ええ」

「これからも、編集とか手伝ってくれないか？」

不思議そうな顔をしたのを見て、十河は慌てて言葉を付け加える。

「ほら。三好さんの評価も上がるかもしれないぞ？」

「はは。まあ三好さんの評価は彼女のみぞ知るって感じですが……
いいですよ」

城山は大きく頷く。

「大体これも普通は誰か一人に押し付けるような仕事でもないんじゃないですか？ 僕でよければ手伝いますよ」

ごく当然といった感じ。十河は小さく俯く。怪訝そうに城山が覗き込もうとすると、今度は顔ごと逸らせてしまった。

「あ、あ、あ……り」

しばらくすると、蚊の鳴くような声で何事か言い出す。

「あ？」

「あ…… 兄貴と呼んでいいか？」

「やめてください」

第三十三話：BE NICE TO HER

9月13日(WED)

「査定をしましょうかね」

五連勤も、半ばを過ぎた三日目。入社するとすぐに三好に呼びつけられた城山は、彼女の部屋でそんな提案を受けた。質実剛健、と太い筆で書かれた掛け軸にぼんやり目をやっていたが、何かまた面倒そうなことを言い出したと胡乱な瞳で三好に向き直った。

「確か、僕が入る少し前、九月の頭にやったばかりと聞きましたが？」

次は三ヶ月後、十二月の頭にやるという話を十河から聞いていた。だから城山もそういう腹積もりでいた。

「ええ。ですが貴方はやっていないでしょう？」

「それはそうですが」

そもそも加入して二週間も経たないうちに査定もクソもあったものではない。そういう論旨で切り返した。

「なんですか？ 折角の昇給のチャンスだというのに、あまり乗り気ではないのですね？」

「まあ、それは魅力的なお話だとは思いますが、公平に失するのではないですか？」

「確かに、新加入の人間に対してこういう措置はあまりないかもしれませんが」

「じゃあ」

「いえ。でもそれは新人がすぐに音を上げてやめてしまうから、必要がなかったといった方が正しいかもしれません。また音を上げなくても、まともに使えるようになるまで三ヶ月はゆっくに掛かるといふ事実もあります」

どこか挑発的な笑みを浮かべて城山を見る。

「その点、貴方は即戦力として活躍してくれています。倒した妖魔は何体くらいでしたか？」

聞いておきながら、三好は自分の手元の資料をめくる。

「丸体ですか。素晴らしいの一言に尽きます。しかも取りこぼしが一つもない」

「……」

「こうなつてくると、普通の新人と同じ給与というのはおかしい話だとは思いませんか？」

「ですがそれは、十河さんのご助力もあつての話です。僕個人の実力に直ちに結びつけるのは、乱暴じゃないですか？」

「ああ」

三好が感嘆したような声を出す。

「なんですか、気持ち悪い」

「気持ち悪いとはなんですか。素直に感激したのですよ」

「何に？」

「今の言葉、由弦に聞かせてあげたかった。きっと喜んだ筈です。

いえ、そうですね。後で話してあげましょう」

「もしもーし」

城山が幾らか白けた目で見ると、やっと三好は平静に戻ったようである。例のわざとらしい咳払いを一つ挟んだ。

「とにかく。チームは一つです。どちらの手柄、誰の手柄、というような区切りはしていません。ですからこれまでの功績は貴方のものであり、由弦のもんです」

そこまで言われても、釈然としないものがあつた。正直後ろ暗い。考えているのは真田のことだった。彼も正当な評価を受けているのだろうか。勤務が増え、負担が増し、彼の言葉を借りるなら、それこそ馬車馬のようになって働いているが、その評価の見直しは三ヵ月後なのだろうか。その実、この懸念には個人的な感情が大きく影響しているのも城山は自覚している。不可抗力に近かったとはいえ、牛島を戦力外に追い込んだ。本来ならその責を感じて、自分こそが

多く働くべきなのだろうが、奈々華のこともある。これ以上勤務を増やすのも正直難しい。

煮え切らない城山に、三好は困った。

「貴方もよくわからない人ですね。いつも信じられないほどいい加減に生きているのに、こういうことには正義感を発揮するのですね」正義感、という言葉にひどい違和感を覚えた。そういう言葉は自分ではなく、十河や真田にこそ送られるべきだろうと、城山は思う。

「まあいつもの軽い調子で受けて下さればいいんですよ。ラッキーくらいに思っただけ。それにいつまでも人間性や貢献度が低いと見なされているのも癪でしょう？」

冗談めかして言うが、三好は知っている。十河から報告があったのだ。報告、というよりは申請の性格があったが。それはそれは嬉しそうに、もし尻尾がついていたら、パタパタ忙しく左右に振られていただろう、そんな過日の来訪を思い出す。城山もデータベースの編集、管理に加わるから許可してくれという内容だった。断る理由もないので、勿論認可したのだが、こうなると、冗談でもなく貢献度についても考え直さなければいけないのだ。

一体どんな魔術を使ったのか、城山はすっかり十河を懐柔してしまっている。彼自身が無自覚なのか、頓着しないのかは知らないが、こっちは特段変化はない。だが向こうには大きな変化。あれほど嬉しそうな様子の妹分を見るのは、三好にしても久しぶりだった。考えてみれば、最初から兆候がないわけでもなかった。嫌悪というのは、よほど相手を意識していないと成り立たない感情である。磁力的ように強く引つ張られていることが前提条件である。そして、それはひょんなことから、或いは相手を良く知っていく過程で、くると向きを逆にしてしまう可能性も同時に内包している。コンパスのように、針の向く方向が変わるだけで、引つ張られる力は据え置き……

「三好さん？」

「ああ、はい」

思考に埋没していた意識を、名を呼ぶ城山の声で呼び戻される。

「なんですか？」

「いや、それはこっちの科白ですよ。何をぼーっとしてるんだか」
城山は鼻を鳴らして、続けた。

「了承と言ったんですよ」

「え、ああ。査定、受ける気になっただんですか」

「まあ。貴方の方にも色々事情があるでしょうし、僕は使われる立場ですから、貴方の言葉には従いますよ」

冷たくならないよう、事務的に聞こえないよう、配慮しているような雰囲気と言葉尻から感じられた。

決して押し付けがましくはない、さりげなく細やかな心遣いの出来る人間。三好は彼の人格に対して、温かみを感じていた。これでも少し勤勉で真面目な態度で勤務に当たってくれば、評価を更に上げれるのと思う。二週間と経たないのに、控えようという決意とは裏腹に、もう四度も遅刻を犯している不真面目な男の顔をまじまじ見た。彫刻刀で簡単に彫ったような、薄く細い目が、どこことなく絵に描くようなデフォルメされたキツネを思わせる。

「……由弦はこういうのに弱いんですね」

「なんですか？ 十河さんがどうかしたんですか？」

「いえ。何でもありません。それでは思い立ったが吉日。午後から一体妖魔が出る予定ですので、それにしましょう」

城山が頷くと、一時解散となった。

第三十四話：こき逃げは犯罪です

世田宮^{せたまみや}の街に降り立つと、天気雨が降っていた。夕方の薄いオレンジの日光が降り注ぐ中、同時にそこその大きな雨粒も空から落ちていた。南国のスコールのようで、清々しくて好きだという話をしたが、三好は芳しい反応はしなかった。雨は嫌いなんですよ、と一緒にただった。

準備良く折り畳み傘を持ってきていた三好はそれを差して、城山はしよつちゆう傘の先で肩や腕を突かれながら歩く羽目になった。相合傘の提案は、一笑に付された。

世田宮の街は、高級住宅街として知られているが、居並ぶ建物たちは、とてもそうは見えないのは初めてここを訪れた人間が誰しも驚くところである。身も蓋もない言い方をすれば下町然としている。道は細く入り組んでいて、肩を寄せ合うように軒を連ねる民家も、結構古いものが多くて、小洒落た店もあまりない。駅から遠ざかると、その傾向はより顕著で、十分も歩くと、ノスタルジックというか親近感のようなものを覚えて、すっかりセレブの街というようなイメージは取っ払われてしまう。

「まだですか？」

城山の質問に、三好は左手の内側に目をやる。ピンクの可愛らしい腕時計の盤面が見えた。次いで顔を上げると道の先を見据えた。まだ、とは時間の方が距離の方が、と無言のうちに問うているらしい。「目的地の方です」

城山も腕時計はしているので、時間は自分で見れる。存外察しの悪い。苦笑しかけたが、傘を差した状態なら城山の左手に嵌った安物のそれに気付かないのは無理からぬことだと思ひ直した。

妖魔が現れる時間は、音邑が言うには、午後の四時十五分前後ということだった。四時に差し掛からんとしているから、もうそろそろ着いてもらわないと困る。三好の足が、女性の中でも、少し遅めだ

と感じている城山は、大丈夫なのかと不安に駆られた。

「もうすぐ。その角を曲がった辺りです」

人差し指の先を見ると、古ぼけた木造の建物に挟まれた、獣道のよ
うな狭いアスファルトが、右に折れて続いている。城山は一先ず安
堵した。

「相手は妖人タイプでしたっけ？」

「ええ」

三好は角には入らないらしく、近くの板壁に背中を預けた。腕を組
んで、一度唇を舐めてから詳細をくれる。

「非常に賢い種です。ですが、実際に人に怪我を負わせたり、まし
て命を奪ったりするようなモノではありません」

「へえ」

「本当は先に情報を入れてしまうより、一応新人ですから、その場
での判断なんかも調査してみようかと思っただのですが」

三好はそこで言葉を切って、城山の方をなんとも言えない表情で見
た。何となく城山には、彼女の言いたい続きがわかった。

「何の情報もないと、問答無用で叩き殺しそうだから？」

困惑したような表情のまま、口元だけ笑みを浮かべた。肯定の意味
だろう。

「だけどよくわかりましたね？」

「いえ。まあ以前フラワーマンなるヤツを退治しましたから」
やっつけたのは十河さんですけど、と襟足に手を入れた。

「あの時、僕は愚息をやられていたので、ぶっ殺してやろうと思っ
たんですけど、十河さんは殺さないまま行動不能にしたんですね」

「具足？」

「チン……」

「いいです。わかりました。脳内で変換が完了しました」

「……それで大きな害のない相手には、殺さない方法で当たるんじ
やないかって」

そう考えたときに、城山のフットワークの軽さが祟って、瞬殺に掛

かるのではないかと。それを防止するために前情報を入れたのではないかと。

「察しが良くて助かります。そういうわけですから、なるべく殺さないようにお願いしますよ?」

本当は前情報など入れずに、戦ううちに強い害意の無いことを悟って、その上でどういう行動に移るのか、という所も含めて見てみたかったのだが、已む無し。

お喋りが一通り終わるのを待っていたかのように、僅かな沈黙と同時に世界が色を変えていく。二人とも一瞬だけ視線を下げて時計を確認する。まだ十分そこそこだった。

大きな猫。体はそうである。顔もそうである。ただ、地面についている手足だけが、人のものだった。三毛猫のような茶色がかつた体毛に覆われた体から、人の腕と足が生えている。愛らしいクリクリした瞳がこちらを窺っているが、その下に目を向けると、やや褐色の人体の一部があるのだから、なんともえげつない対比である。

「あれは…… 中におっさんが入ってるんですか?」

「おっさんなど入っていません」

猫のような物体は動こうとしない。こちらの様子を見ているようだ。

「ビッグキャット、と呼んでいます」

猫野郎、と城山の脳は書き換えたかった。

「弱点とかは無いんですか?」

「そこまでの大盤振る舞いはしませんよ」

「けちんぼ」

「けちんぼって……」

城山はとにかく行動を起こすことにした。少し距離を詰め、中腰になって、チチチと舌先で音を出してみる。大抵の猫は警戒しながら逃げるか、懐っこいものであれば、ためつすがめつ寄って来たりする筈だ。しかしビッグキャットは何を思ったのか、くるとその場で反転、お尻をこちらに向ける。

ブー、ブブ、ブボ

空気を震わせ、濁点の多い音を奏でた。

「殺す」

「だ、だめですよ！」

「いいや、殺す。ぶっ殺してやる」

本家の糞と同じで、強烈な匂いに、両人も鼻を塞ぎながら会話をする。

城山は駆ける。猫は尻尾でケツをペチンと一つ叩くと、追いかけてこに乗ってくる。走り出して気付いたのだが、この妖魔、足と手の長さがほとんど同じで、人間が地面に手足をつけて獣のマネをして走るよりずっと速い。タツタカタツタカ。

「待て！ てめえ、また屁こきやがったな！ くっせ、くっせ」
腕を鼻の辺りに当てながら追尾する。その城山の後ろを、かなり離れて三好が走る。傘はいつの間にか仕舞って、代わりにボードのような物を小脇に抱えて走っている。絵に描いたような女の子走り、両手を横に振っている。

「ま、待ってくださいーい。わたしは査定に来ているんですよー」
その監督官を放って、かけっこに興じるなど言語道断のだが、如何せん城山だ。猫をとっ捕まえて、お返しにその優れた嗅覚を誇る鼻っ柱に屁をぶちかましてやらないと、収まりがつかない。

閑静な住宅街、その夕暮れ。一匹と二人の一方通行なマッチレースが、人知れず開幕した。

第三十五話：SECOND DEVIL

ビッグキャットを追っている城山を追っているところで、三好の携帯がぶるぶると震えた。こんな忙しいときに誰だ。舌打ちを堪えながら、胸のポケットからそれを取り出した。猫のストラップが激しく揺れる。走りながらというのは無理だと判断して、立ち止まった。「もしもし?」

「三好か」

音邑の声である。三好は気が立っていたこともあって、苦言をぶつけることにする。

「音邑さん? 貴方、あれほど言っていたのに。五分以上前に妖魔が現れましたよ? 遅いのは良いけれど早いのは……」

「それどころではない」

音邑は冷静なトーンでそれを遮る。

「なんですか?」

「もう一体そっちに現れる」

「なんですって!?!」

「場所はさつきより少し離れた場所、だろう。二丁目の方へ進んだところ、だろう」

「いつですか?」

「もう後一分とない。いや、今日の俺の調子は悪いようだから、若干誤差があるかもしれん」

「な! どうしてもっと早く予知できなかったんですか!?!」

「落ち着け。調子が悪いと言っただろう。とにかく、早く城山と合流しろ。まずいぞ」

言葉が終わらないうちに、三好の背筋が寒くなる。背後に何か居る。巨大で、恐ろしく、獰猛な、獣の気配。

土地鑑もない場所で、妖魔を袋小路に追い詰めることが出来たのは、

城山にとっては僥倖うらやま以外の何者でもなかった。これも俺の日頃の行いが良いからだな、などと嘯うそくくらの余裕を見せられたのも、ビッグキャットが観念したように尻尾をしょぼんと力なく垂れさせている様に、悦に入ったからである。

「へへ。観念しろよ。畜生が人間様をおちよくと、こうなるんだ」
ミヤーと妙に可愛らしい声で鳴くのは、媚びて同情を引こうという作戦だろう。

「貴様ら猫は、そうやって世を渡るんだろが、お前は自分が気色の悪い猫モドキであることを失念している。大体俺は猫もあまり好かん。つまりはゲームオーバーだ」

飛び掛る。前足に爪のない猫など、正面きつてぶつかっていても恐るるに足らず。城山は勝利を確信した。とっ捕まえたらどうしてくれようか。そんな皮算用も頭に浮かんだ時、猫の顔がにやりと人間染みた不敵な笑いをした気がした。

視界から一瞬消えたような錯覚。跳んだのだ。そう考え付くまで、そこまでの時間を費やしたわけでもないが、野生動物さながらの俊敏性を持つこの妖魔にとって、一瞬でも相手の動きを止められたのなら、それは十分なアドバンテージだった。

ポーンと跳躍したビッグキャットは、城山の肩を踏んづけ、その後には華麗に着地する。ビタンとやはり手の平を思いつきりアスファルトに着いた音がして、城山が振り返ったときには、すっかり走り出す姿勢で、反転した時にはもう数メートル離れてしまっていた。

「この野郎、こけにしゃが……」

言いかけた城山の耳に、甲高い女性の声が聞こえる。城山さん、と自分を呼ぶ声には聞き覚えがある。というより、今この場で自分を呼ぶ人間など、一人しか居ようがない。

声からは恐ろしい緊迫感、もっと言えば命の危機に瀕した人間が上げるような緊急性があった。城山は途端に顔が青くなるような錯覚を覚え、声のした方へ全速力で走っていく。ビッグキャットが逃げた方とは逆だが、今は査定どうこうの話でも、ましてとっ捕まえて

お仕置きどころこの事態ではない。

駆ける。走る。急ぐ。城山は最速の足の回転で、現場へと直行した。声に興奮するでもなく、グルルと一つ威嚇のように鳴いただけだった。やはりこの妖魔は獣タイプに似つかわしくない賢さを持っている。ゆっくりと三好の周りを回る。それはまるで、自分の一番美味しい箇所を吟味するような動きに見えて、三好は口を動かすこともかなわなくなった。喉の奥が自分のものとは思えないほどに熱く、乾くを感じた。そのくせ、体は夏風邪にでも罹ったように、打ち震えていた。

ダメだ。殺される。城山が悲鳴を聞きつけてやって来てくれるのは、いつ頃になるだろう。まだか。まだか。早くしないと間に合わない。死にたくない。助けて。怖い。本能だけが雄弁で、喉の奥からは何の言葉も出てこない。打ち合わされる歯がガチガチと音を奏でるだけ。腰などとうに抜けている。ペタペタと体を引き摺るように手と腰だけで後ずさっている。今自分の脳がそれを命じているのかさえもわからない。まだ生きている、という感覚が恐ろしく希薄だ。もう既に自分の体は自分の制御下から離れてしまったのではないか。獣の目を見る。いや、それも見ているのかどうかもわからない。視覚情報がキチンと頭に回っているのか。もしキチンと機能しているのなら、何か生き残るための可能性を模索するために回転してもいいのではないか。恐怖しか伝わってこない。狡猾と凶暴が同居したような瞳が、ただただ恐ろしい。

獣の、その瞳が、一段と強い色を帯びたような気がした。前足がグツと縮まる。飛び掛る。本能がそう告げた。そしてその体が跳躍する。死のビジョンが強く見えたような気がした。目の前が真っ暗になる。ガコンと鈍い音が耳に届いた。

目を開けるのが、とても勇気の要る作業だった。いつかパラシュー

トで降下した時でも、これほどまでに踏ん切りがつかなかったことはない。あの時は、いざ目を開けてみると、そこには今まで見たこともない光景が広がっていたが。空と大地が同時に見下ろせたあの感覚は、やがて恐怖など取り去って、爽快感とカタルシスのような感慨をくれたが、今回はダメだ。ダメだという実感がある。根拠などない。だが、本能的にそれを悟っていた。閻魔がいるのか、悪魔がいるのか。なんにせよ、人に命じて生き物を殺生してきた自分が神や天使の御許へ招かれるとはとても思えなかった。開けたくない。嫌だ。怖い……

「三好さん」

え？

「三好さん」

よく聞いた声。記憶が正しければ、いつもバカみたいな軽口ばかりを叩いている……

目を開ける。

「大丈夫ですか？」

城山だ。胸のうちに何か奔流が流れ込んだ気がした。だがそれが何の奔流なのか、今の三好には見当もつかない。安堵か、恐怖か、不可解か。助かったのか、まだ妖魔は生きていて自分を油断なく見つめているのか、どうして城山がここに居るのか。

「あの、正気に戻ってください」

城山が屈みこんで、顔の前で手を振る。さっきまで視界が開けるのが怖かったくせに、今度は視界を遮られるのが、怖かった。

「……」

「え？」

パクパクと口を動かしている感覚はあるのだが、如何せん耳の方には自分の声は聞こえない。城山は、ほんの少し眉を動かした。

「……ちよつと待つててください。トドメを刺してきますから」

城山が一步、離れていく。手が勝手に動いた。城山のズボンの裾を掴んでいる。丁度半パンを履いていたものだから、掴み易かったが、

そういつた計算があつたわけではなかつた。

「ちよ、ちよつとやめてくださいよ。こんなところで。それにこつちにも心の準備つて物があるんですから」

城山が何か慌てたようにズボンを引き上げる。腰パンをしていたので、少し引つ張られただけで、トランクスが見えている。しばらく上げたり引つ張られたりしていた二人だが、城山の方が諦めたように笑んで折れた。

「はあ。見えますか？ もう妖魔は虫の息ですよ？」

城山が指差すと、三好は初めて彼以外の物を見るような目で、その先を見た。彼の言葉通り、腹を見せて速獅子と言つた妖魔が倒れていた。

第三十六話：下には下が居る

「何か、辞世の句とかあつたら聞いてやるぞ？」

妖魔は答えない。大きな喉仏が動くこともなく、呼吸がされていないことが窺い知れた。

三好を宥められている間に事切れてしまったらしかった。城山は少々残念そうな顔をして、手に持っていた鉄パイプを放り出した。大きな金属音が響き、三好は初めて彼が得物を手にしていたことに気づいた。駆けつける途中、偶然見つけたものだった。

「何を……して？」

「ああ、いえ、ちよつと試してみただけですよ」

食えない笑顔で振り返る。三好は彼の返答に要領を得なかったが、城山はそれ以上語る気はないようだ。

三好がへたり込む壁まで歩み寄ると、半袖のパーカーを脱いだ。そして屈みこむ。

「何を……して？」

期せずして同じ台詞をはく。

「いえ、その」

そのパーカーの袖を三好の腰の辺りに巻きつける。三好は驚いた。だが抗議の言葉は出てこなかった。口も体も未だシヨック状態から抜け切れていないようで、うまく命令が下せなかった。一瞬動けない自分に対して何かしようとしているのかと不安が脳裏を掠めたが、どうもそういう気配はなかった。

城山は黙々とその作業を続ける。思いの他、彼の頭が顔の近くにある。香料入りのワックスをつけているのか、汗の匂いに混じって良い香りがした。

城山はすつくと立ち上がる。座ったままされるに任せていた三好は、自分の腰に目をやる。一昔前に流行った腰にシャツを巻きつけるファッションのようだ。だが、それとの差異はある。ああいったのは

シャツの大部分がお尻を隠すような格好だったが、これは間違で、前を隠している。ふんどしのようなようだと三好は感想を抱く。ふんどしだろつが前掛けだろつがこの際どうでもよく、城山の意図が全く掴めなかった。

そこで三好は自身の下半身に違和感を抱く。妙に湿っている。一度意識すると、今まで気づかなかったのが不思議な程に、その感覚はビビッドだった。頭が真っ白になっていく。もしかして。いやまさか。でもこの感覚は。否定と肯定が脳内でせめぎ合う。だがその実、否定の方は、ただの現実逃避に近いことも、頭の隅では理解していた。自身の感覚、加えて城山の行動、合わせて考えれば、答えはひとつしかない。

消えてなくなりたい。三好は口の中だけで呟いた。

腰には未だ力が入らず、結局自力で立ち上がることは叶わなかった。失禁して腰を抜かして、小便まみれのまま男に背負われる。そんな日が来ることになるとは夢にも思わなかった。夢に見ることがあったとしたら、それは間違いなく悪夢で、そんな悪夢と大差ない、有り得てはならないような惨状が、今自分の身に起こっている。そう思うと穴がなくても手ずから掘って入りたい。そんな夢想をしてもなお治まらない羞恥が全身を襲っている。間違いなく人生最悪の日である。

城山の背中を見る。広く力強い。足取りも、妖魔と戦闘をした後とは思えないほど軽く、危なげがない。いたたまれなかった。彼の堂々とした雰囲気と、自分の醜態。彼らを統括する立場の自分が、これではどちらが上だかわからないというものである。

「音毘さんの予知も案外、案外ですね」

城山はさつきから沈黙が落ちそうになると、思い出したように言葉を紡いだ。気を使っているのか、気まぐれなのか、測りかねるのが、妙に居心地が悪かった。腫れ物に触るような気遣われ方よりはマシだが。

「ええ。彼の予知も万能とはいきません。大体、低目に見積もって…… 70パーセントというあたりですか。的中率は」

存外落ち着いているな、と自嘲したくなる。いつもと同じような調子で喋れているのだから、城山の話し掛けてくるタイミングは絶妙なのだろうと理解する。沈黙は気まずい。気を逸らそうと話しまくるのも逆に気まずい。その中間を保ち続けているのは、やはり彼のコミュニケーション能力の成せる業なのだろうと他人事のように思う。

「まあ結構当たるけど、外れることもままある、って感じの数字ですわね」

城山は何かリーチくらいかと呟いたが、三好にはわからなかった。「……」

雑踏の喧騒。世界は元に戻り、帰還した二人は、十分な不審者たち。怪我した様子もないふんどし女を、男が背負って歩いている。奇異の目を向けられるのは一度や二度ではなかった。

また沈黙が落ちかける頃、城山の方から。

「しかし、あの妖人タイプというのは、おかしな奴が多いですね」

「そうですね。人に危害を加えないものも、珍しくないですから」

「でも、そういう奴等はどうやって食ってるんですかね？ 人は食べないんでしょう？」

「ええ。ただわたし達も彼らの生態系を把握しているわけではないんですよ。というより、むしろどの妖魔についても詳しいことはわかっていない」

無理からぬことである。隔離世はあちらの恣意的なものであり、またその間しか彼らに接触する機会というのではないのだから。

そうですか、と城山が返事するとまた会話が途切れた。三好は気が萎えるのを感じた。抑揚のない声に、自分への呆れが含まれているような被害妄想に囚われた。さりげなく気を回しているというのに、こちらから積極的に会話をしようという意図が感じられず、城山の気を害したのではないかと。弱気になっている。わかってはいても、

今の状態を鑑みれば、致し方ない。立場的優位など形骸に等しく、対等ですらない。威厳も何も失墜して余りある失態を見られ、今だつてもし放り出されたら路頭に迷うほかない。情けない。泣きたくなる。

「僕は」

「え？」

また淡々とした口調。嬉しさがある。まだ見捨てられたわけではない。まだ話しかけてくれる。まだ気遣ってくれている。困惑がある。こういうとき、こういう調子で話し続けるのが、果たして長所なのか短所なのかわからなかった。冷たいような気もするし、これもまた気遣いの一環のような気もする。

「僕は、先月、ウンコを漏らしました」

「は？」

「屁だと思っただんです」

城山が首を少し回して横顔が見えた。ほんの少し口元が緩んでいた。「でも違った。実が出たんです」

三好は最初わからなかった。どうして彼がこんな話を始めたのか。どうして出してみるまでわからなかったのか。そして丸々二回ほど意味を反芻しているうちに、彼の気遣いにはっとした。色々本筋から逸れた話を振ってみても、結局彼女の気が晴れないと判断したのだろう。それにしてももっとマシな励まし方はないのだろうか、と思いかけて、視線を下げて、また抑鬱的な気持ちになる。言えた義理ではない。

「パンツを処理しているとき、妙にすがすがしい気持ちになりました」

「……」

「これで、良かったんだとさえ思いました」
日本語で紡がれているのに、これほどまで理解に苦しむ言葉は初めてだった。

「僕は運命論者ではないですけど、いつかこうなるんじゃないかっ

て、そう思っていたんです。年経る毎にケツの締りが悪くなっていくのには気づいていたから……遅かれ早かれ、起こることだったと思っんです」

「……ひどい話ですね」

「でも、だからこそ、今体験していて良かったと思っただんです。これから先、そういった余裕のある精神状態で、場所で、漏らせたとは限らない。もしこの先就職して、サラリーマンになったらとします。大事な会議の途中、取引先で、初めてウンコを漏らしたとしたら、どうします？」

「いや、わたしに聞かれても。ていうか、そういう場面ではオナラだと思ってもしないでしよう？」

「そんなことはないですよ。出せる物は惜しみなく出すべきです。だけど屁だと思っただけの実である、この経験が無い状態で、そういった事態に直面したら、多分相当動揺すると思っんですね」

「……」

「僕が何を言いたいかと言うと、つまりは、無駄な経験なんて一つも無いってことなんです。たとえそれがどんなに恥ずかしいことでも、辛いことでも、それは必ず糧となり、よりよい精神の安定をもたらすんです」

「何か無理矢理いい話にまとめようとしてませんか？」

「……」

「まあ、心遣いだけは受け取っておきます」

目的のパーキングが見えてくる。いつの間にかやら、最低な話題に気をとられていて、周囲の様子を気にするのを忘れていた。自分の下着にも、人々の好奇の目も。

第三十六話・下には下が居る（後書き）

お食事の傍らに読まれた方、いらっしやれば申し訳ありません。まあ今更かも知れませんが。以後は出来る限り自重します。

第三十七話：CAN'T REACH HIM？

メールで済ませようかとも思ったが、こちらの都合で待たせているのだから、少し失礼な気がして、城山は電話をすることにした。かけてすぐ。いやまて、そう何度も電話をする方が迷惑じゃないかと背反した気持ちを抱いた。査定に向かう前にもかけていた。切ろうか切るまいか踏ん切りがつかないうち、呼び出し音三回を挟んで、電話がつながった。もしもしと応対する奈々華の声には険が無く、城山は安堵した。気づけば携帯を握る手が、じっとり汗ばんでいる。「もしもし。今ビルに戻って、少し野暮用を済ませたら、すぐ向かうから。うん。一時間ちよつとで行けると思う。うん。ごめんね。うん。ありがとう。はい。はい。それじゃあまた、後で」話を終えると、城山はふうと息をはいて電話を切った。

「どちらにかけていたんですか？ 随分緊張していたようですけど」「そうですね？」

声にハリがない。飄々とした感じで言おうとして、失敗した。

「ええ。どこぞの大統領と話すのかというくらい」

「大統領にタメ語のわけがないでしょう」

城山はあくまで空とぼけるつもりだった。背中の中の声を、よっこいしょと背中に乗せる。太ももの柔らかい肉が指先に食い込む感触。今はビルまで戻ってきて、車を駐車場に入れ、まだ歩行に不安が残るといふ三好を再び運搬し始めるところ。

「……妹さんですか？」

「……」

そつえば。三好には家族構成まで調べ尽くされているんだつた、と城山は渋い顔をする。

「隠すようなことでもない気がしますか？」

大方、シスコンだと思われるのが嫌で隠していたと推測しているのだろう。そんなことを恥じるのは違つのではないかと諭そうとして

いるのだらう。そうじゃない。言ってやりたかったが、結局城山は沈黙を選んだ。背の三好がいぶかしんで、何かに気づいたような雰囲気。まさか事情まで察したわけでもないだらうが、何か自分が踏み込むべきじゃない領域に足を突っ込みかけたことを悟ったのだらう。

エレベータの前に立つ。カゴ室が降りてくるまでの間、嫌な種類の沈黙が流れる。やがて到着を告げるチャイムが鳴って、難しい顔をしたまま乗り込む。

二階、三階、四階、五階、六階、そして七階。

「シャツ…… 洗って返します」

「洗わないで返してください」

「洗って返します」

語尾とチャイムが重なった。

「城山奈々華は兄を待っていた」

ぼつんと呟いてみた。それが今現在だけの話ではないような気がして、何か象徴的な意味合いを持っているような気がして、もう一度口にしてみようかと思いかけて、やめた。虚しく、惨めな気がした。兄からの電話を思い出す。どこか不安げな、なにか精神的な圧を受けたような、そんな声音だった。多分、あの泰然とした兄をあそこまで追い詰められるのは、世界で自分ひとりだけだらう。

「嬉しくない」

むしろ最悪。そのことは、決して独占欲を満たすようなものではなかった。そこまで自分は歪んでいない、きっと。だから、そんな健全な精神の持ち主である奈々華は、好きな人には笑っていて欲しいし、間違っても自分の顔色ばかりを窺うようであって欲しくなかった。

ガタンと大きな音がして、奈々華は文庫本から顔を上げる。読んでいるというより字面を追っているだけだったが、この場所に居る以

上やめるのも不自然だった。そして他にやることもなかった。

音を立てたのは、自分以外では最後の一人。彼女が椅子を引いて立ち上がったのだった。帰るようだ。机に置いていたカバンを肩に掛けて、奈々華に一瞥だけ残して、去っていく背中をぼんやり見つめる。これで図書室に残っているのは奈々華と、後は図書委員の女子生徒だけである。ちらりと部屋の掛け時計に目を向ける。五時過ぎ。ここのリミットは六時だったと記憶している。

平日。当然奈々華は学校へ通う。つまりは兄の送り迎えを必要とする。今日も今日とて、少しの嬉しさと、少しの申し訳なさを、ない交ぜにしたまま、放課後、自分の教室で兄のメールを待っていた。守られ、手間を掛ける身分であるから、本当は先に校門の方まで出て行っておいて到着を待つのが筋かと思うが、いやそんな事情がなくても彼女は兄が来てくれるというだけでそうしたい気持ちだが、それは出来ない。兄に言い含められている。自分が着くまで決して外へは出ないでくれ、と。そう、心配顔で言われ、事情も理解し、そのようにしている。やはり嬉しさと罪悪感をコインの裏表のように玩もてあそびながら、そうしている。それが彼女の日常となりつつあった。だけど、今日に限っては、その限りではなかった。放課後を待たず、メールではなく電話が掛かってきた。丁度休み時間だった。仕事の方でどうしても外せない事態になっているから、申し訳ないが迎えは少し待って欲しい。多分六時くらいになると思う。そういう内容だった。

奈々華は一つの可能性をすぐに危惧した。全校生徒を強制的に下校させる時間、七時までに兄が間に合わず、自分が一人で帰ることになり、そこで妖魔に襲われる。そのことではなかった。それもまた少しは考えないでもないが、それよりも嫌なことがあった。必要以上の、いや必要外と言ったほうが良いか、とにかくそういう責を感じてしまうのではないか。自分が兄の遅延に腹を立てる、という有り得ない考えに囚われ、萎縮してしまう可能性。それこそが嫌で、現実的だったのだ。すべては自分で蒔いた種が原因とは言え、これ

は彼女にとってとても辛いことだった。ややもするとそれこそが、辛いことこそが、自身の業に対する罰のような、そんな気持ちを抱いてしまうことすら、一概に荒唐無稽と鼻で笑うことも出来ないほど……

電話が掛かってくる。カウンターに座る図書委員がちらりと非難めいた目で奈々華を見る。マナーモードにしていたとはいえ、机の上に置いていたので、ブーブーとブーイングのように音を立てたのだ。慌てて取り上げて操作する。兄からだった。

「もしもし」

「もしもし。今ビルに戻って、少し野暮用を済ませたら、すぐ向かうから」

声がカラカラしている。言葉の端々に申し訳ない、という感情が読み取れる。向こうの電話口で、兄がどんな顔をしているのか目に見えるようだった。

「……うん、待ってる。六時半くらい？」

「やっぱりだ。どうして、どうしてこうなってしまっただろう。奈々華は前歯でぐつと唇を噛んだ。

「うん。一時間ちょっとで行けると思う」

「わかった」

「うん。ごめんね」

「謝らないで」

お願いだから。

「うん。ありがとう」

「気をつけてね」

「はい」

「まだ時間じゃないから、慌てないで、安全運転でね」

「はい。それじゃあまた、後で」

奈々華は電話を切ると、カバンに文庫本を突っ込んで立ち上がった。図書委員のほうは見なかった。だが、ここに居るのもそろそろ限界だろうと判断した。

ただ図書室のドアに手をかけた時、これから一時間ほど、ここを出て、何処でどう過ごすそうか、思いつかなかった。

第三十八話：サラダがあるから付け合せの野菜は蛇足

9月14日（THU）

警備員室の小窓から、五十代くらいの警備員が硬い笑顔を向ける。白髪まじりの頭はロマンスグレートと言ってやるには、少々本人に気品が足りない。少し笑うと、八重歯のかけた歯列が見えて、それがみすばらしかった。午前中に出勤するとよく見かけるもので、城山は顔を覚えてしまった。向こうが覚えているのかは知らない。とにかく愛想よく振る舞い、受付のノートに名前と所属を書いて、ご苦労様ですと声をかけて、エレベータに移動する。正面玄関から入ると、駐車場からあがるのでは、通る道は違うが、終いにはこの警備員室の小窓の前で道が交差する。エセ大理石の床をうつむき加減に見つめていると、後ろから声をかけられる。

「お、おはようございます」

首だけ振り返り、挨拶を返す。

「ああ、おはようございます。今日は今から出勤ですか？」

「ええ。昨日は……」

三好は口ごもる。

「昨日は、あの査定が終わってから、少し書類を整理して、すぐに帰ったんです。多分貴方より先に帰ったと思います」

「なるほど」

多忙な彼女だが、時折そうして早く帰ることがあるのだろうか。休みなどはキチンとあるのだろうか。統括、指示をする立場の人間は、彼女以外見かけたことがなく、職務上丸々の休みというのは厳しいのではないだろうか。城山は色々と心配になる。

「その」

エレベータが到着する。二人分の足音が、カゴ室に吸い込まれる。

昨日は一人分だったな、と城山はなんとなく思う。

「由弦にも話していないようですね」

「え？ 何が」

「その……」

後ろ手に組んだ両腕がわき腹の辺りでもぞもぞしている。

「ああ。心配せずとも吹聴して回ったりなんて気はさらさら無いですよ」

「ええ…… ありがとうございます」

城山としては、そこまで恥じ入るようなことでもない気がする。体の反応としては仕方の無いことである。歳若い少女であろうが、老齡の男性だろうが。

七階に到着すると、城山が先に下りる。

「あの、パーカーですが」

そう声をかけると、後ろで持っていたカバンを前に持ってくる。フアスナーを開くと、中から綺麗に畳まれた城山のパーカーが顔をのぞかせる。どぶねずみ色の随分くたびれた感じのそれだったが、柔軟剤やらなにやら使ったのか、新品同様とまではいかなくても、それなりの見栄えに戻っていた。城山は正直な感想を口にする。

「お貸しする前より綺麗になっているというのも、それはそれで変な気分ですね」

「ちゃんと洗っていたのですか？ 変な匂いもしましたし」

「変な匂いは……」

城山は危うく言っではいけないことを言いそうになった。

「タバコとか諸々まじったものでしょう」

意味ありげな間に気づいた風でもなく、三好は大げさなため息を一つ。

「まあ、男の人なんてそんなものかも知れませんがね」

そして話題転換。

「そうそう。ところで、以前お話していた刀の件ですが、今日にも届く手筈になっています。後で…… そうですね。お昼ごろ、お手数ですがわたしの部屋までいらして頂けますか？」

「はあ。もう届くんですか。わかりました」
それでお開き。城山は広間のカードリーダーダに向かい、三好はそのまま自室へと向かった。

業物とまでは言わないが、決してナマクラではない。それくらいの印象しか抱かなかつた。もともと刀の造りや種類に造詣が深いわけでもなく、まして興味があるわけでもなく、出来れば持ちたくなかつたくらいのものであるから、必然的に雑感以外でてこない。

「無理言つたんですが、早く用意できて良かったです」

「ありがとうございます」

刀を鞘におさめながら、自分が礼を言っているのに違和感を覚えた。「これからの一層のご活躍期待しています」

城山の微妙な感情に気づいた様子もなく、三好は満足げに二度三度、首を縦に振った。

「用向きはこれで終わりですか？」

城山は膝を立てる。

「あ、待つてください」

弾かれたように三好が立ち上がる。机のほうへ歩んで、紙袋を持つてもとの座布団に座りなおす。その動作が異様に速く、城山は思わず軽く身構えた。紙袋はちゃぶ台の上に置かれている。オレンジのそれはどこかのケーキ屋のものらしく、草書体が気取った雰囲気醸し出している。

「ごそごそその紙袋の中を漁ると、三好の両手がそこから二つの弁当箱を引き抜いた。デフォルメされた猫のキャラクターシールが貼られたものは少し小さめ。グレーのアルミ製のものはそれより幾らか大き目。新品然としていて、というより新品そのものらしく、キャラクターシールの代わりに、蓋のあたりに性能を誇示する販促シールがついている。コンパクト、錆びにくい。そんな文言のそれを、三好は慌てたように捲り取った。そして取り繕うような笑顔で言う。「お昼まだですよね？」

「ああ、まあ」

手製の弁当をご馳走してくれる、という流れなのはわかるのだが、どうして、という部分が判然としない。だがすぐに答えは三好の口から語られる。

「昨日は、ご迷惑をお掛けしましたから」

「ああ。なるほど」

それで新品の弁当箱まで用意して。

「ひよっとしてこの職場では、恩には飯で返す、とかいう習慣があるんですか？」

「え？」

「いえ、なんでもありません」

目の前に差し出された弁当箱に改めて視線を注ぐ。どうぞ、と言われたので、ふたを開ける。

白米に、のりたまのふりかけ。おかずの方は、焼き魚の切り身、鮭だろうか、紅く張りのある身が食欲をそそる。定番の卵焼き、豚の角煮、ツナサラダ。端でみずみずしいレタスとプチトマトが一团を形成している。

「鮭は味付けの好みが変わらなかったなので塩分控えめの薄味にします。卵焼きは少し甘めになっていますが、わたしが甘党だという理由だけではなく、一般的な味付けに近いのではないかと推測した次第です。角煮は一番苦労したのですが、時間があまりなかったので、ちゃんと味が染みているか不安です。サラダはきゅうりとツナをマヨネーズで和えただけの極々簡単なものです」

聞いてもいないのに、長広舌を振るう三好に、城山は唾然とした。十河のように口数が少なめだという印象があるわけではないが、このような早口の長い台詞を彼女から聞いたのは初めてだった。

「は、はあ。ご苦労様です」

城山がぼかんとしたまま、彼女を凝視していると、段々恥ずかしくなってきたのか、やんわりと頬や耳が赤くなっていく。

「とにかく、どうぞ。返礼ですから、遠慮なく召し上がってください」

い

所在無く空気を掴んでいた箸を見て、三好が促す。城山は困惑顔のまま礼といただきませすを口にして、箸をつける。

「どうですか？」

「ええ。美味しいです。地上の食べ物とは思えません」

「それは大袈裟すぎます」

くだらない遣り取りをしながらも、城山は食を進めていく。超のつく早食いを任じるだけあって、その動きはすばやく、五分ほどで力タをつけてしまう。

「おいしかったです。ご馳走様」

合掌。たちまち体がタールを欲する。

「いえ」

三好はその様に口元を緩めていたが、すつと笑みが小さくなる。そして何か言いたいことがある、という顔をした。あの、と口にするが、中々先が出てこない。本当はじっくり待つてやるべきなのだろう、とは思いながらも、早く辞してタバコを吸いたい。

「何ですか？」

「えつと、返礼と言っておきながら、またお願いがあるのですが」
城山は目だけで促す。

「あの、昨日のこと、他言無用にしていたきたたく」

ああ、と城山。そんなことか、と。

「さつきも言いましたが、別に誰かに話す気なんてないですよ」

「本当ですか？」

三好の口調には疑った感じは無い。ある程度は城山のことは信用しているようだ。それでも念入りに口止めをお願いしたくなるのは、彼女もお年頃ということだろう、と城山は結論付ける。

そういえば。その年頃の異性に手作りの弁当を振舞われたというのに、自分の心に浮き立った部分がないのに気づく。もちろんありがたくはある。他意もなくはないが、それでも自分のためにわざわざ面倒を被って拵えたのだ。感謝の気持ち湧くのは人として当然か

もしれない。だが、例えば相手が男であったとしても、同様の感謝を抱いただろう。つまり人対人の、言い方は悪いが最低限のものでしかない。もともと付加価値というものに対してあまり頓着しない人種ではあるが、それにしても色気のない話だと、内心苦笑する。いつからこんなに冷めてしまったのだろうか。

第三十九話：CAN'T UNDERSTAND

唯一の懸念材料は払拭されたといつて良さそうだ。

三好ハルは北側の小窓から差し込む斜陽に目を細めながら思った。彼の性格から言って、あそこまで言質が取れば他言しないというのは本当だろう。そも、彼の言葉通り、あまりメリツトのないことを率先してやるタイプには見えない。

「冷たくはないのかも知れないけど」

実際、あの合理主義的な考え方が、仮面なのか本当なのか、判断しかねた。だが、一つ言える事は、どちらにしても自分には都合が良かった。これが乃木のような愉快犯だったとしたら。榎のような自分に少なからず反感を持っている人間だったら。考えるにぞつとする。今となつては、同伴したのが城山でよかったとさえ思えてくる。もちろんベストは十河なのだが、ベターくらいには思っても良さそうである。

どこまでが返礼で、どこまでが釘刺しだったのか、自分でもわからない。助けられたのは事実だし、その後のケアも、ひどい話題ではあったが、励まそうという意思是感じ取れた。よくよく考えてみれば、自分の失態よりも酷い失態を話してみせることで、相対的に元氣付けようという作戦だったのかも知れない。だが同時に、あの阿呆にそこまでの深い考えがあるだろうかという疑問もある。

次に考えるのが方法論。あれで良かったのだろうか。困惑するばかりで、あまりありがたがられなかった。例えば今後も弁当を作つてやろうか、と提案してみても、おそらくは断られただろう。悪いですし、外に食いに行くのも好きなんですよ。そんな台詞を申し訳なそうに口にする彼の顔が目に浮かぶようだ。自分が随分恥ずかしいことをした気がしてくる。これでは自分が城山に好意を抱いているかのようにはないか、と。実際女が手料理を振舞うとなれば、少なくとも相手の男を憎からず思っている場合が圧倒的に多いのではな

いか。

頭を掻き毟りたい衝動に駆られる。調子が狂っているのは、昨日の不測の事態から継続して。どうしてあんな手段に出てしまったのか。男を懐柔するには手料理が一番だ、という狭くてわけのわからない思考の沼に漬かってしまってそこから抜け出せないまま今日を迎えてしまった。恥の上塗りをしてしまったのではないか。冷静な表情で、ご馳走様と言った城山を思い起こす。馬鹿のようだ。どうして自分ばかりが顔を赤くしたり青くしたりしているのか。返礼と言うことで良いじゃないか。現に彼にもそう説明したじゃないか。そしてついでに念を押しただけ。たったそれだけなのだから、いつまでも考えるようなことでもない。早く忘れよう。それがいい。

「三好さん」

「うはああい！」

突然ふすまの向こうから声をかけられて、三好は心臓が跳ね上がった。向こうから、逆にこちらの声に吃驚したような様子が伝わってくる。大丈夫ですかと気遣わしげな声は、十河のものだった。この場合についても、ベストだった。

なんでもないことと、入室の許可を立て続けに告げると、開いた襖からおおおと彼女の顔が覗いた。用向きを尋ねた。

「昨日城山の査定を行いましたよね？」

「え、ええ」

ぎくりとした。行ったは行ったが、思わぬ闖入者のせいではどこころではなくなってしまうと、本来の標的であるところのビッグキャットにも逃げられてしまった。

「どうでしたか？ もう終わりましたか？」

この場合は、テストの採点のようなものである。何も査定してすぐにつぶさに点数をつけるわけではなく、その後色々な考察を加えながら吟味していくものであるから、本当の意味での完了には少し時間差がある。

「ええ。まあ」

そして実際終わってはいた。昨日早めに帰ったのも、何も料理のた
めだけでもなかったわけだ。

「どうでしたか？」

「あのねえ。こないだは場合が場合だっただけに、特別に見せたけ
れど」

「わかってます。けど」

気になってしまって、と小さな声で付け足す。

「そうねえ。基本がなってないわね。まず」

三好が仕方なしに、差しさわりの無い範囲を話し出すと、十河は勝
手に三好の対面に座って、すっかり聞きの体勢に入ってしまった。

「隔離世が展開されて、真っ先にするべきことは？」

「え？ えっと、自分たち以外の標的が居ないか、つまり一般人が
巻き込まれていないかの確認、ですよ」

たとえ目前に敵が居ても、いったん距離を取って、周囲の観察にあ
たるべき。鉄則である。

「あの男、首をピクリとも振らずに、ビッグキャットを見ていたわ
非戦闘員の三好が居たというのはあまり言い訳にはならない。何せ

……

「相手はあまり害のないビッグキャットよ？ わたし一人置いて距
離を取ったって、ただちに何かされることはない。そういう意図で
選んだ相手だし、事前にそういう説明をしたの」
「なるほど」

「だというのに、少しオナラをされただけで、殺さん勢いで追い詰
めにかかるし」

「はあ」

「まあ、敵の撃退方法については、色々あるし、一概に殺処分にし
てしまうのが悪いとも言わないけどね。でも何なのかしらね、あの
野蛮人は」

「はあ」

「わたしにいつも下品な話を振るくせに、ちよっと妖魔に悪戯され

ただで、あんなに怒るなんて、身勝手じゃないかしら」

「はあ。多分城山も本気で殺してしまおうと思っていたわけではないと信じたいですが」

「どうかしら。人間性に問題ありよ」

さつきから支離滅裂である。あの手の妖魔の退治方法は当該職員に一任されていると言ったばかりである。フラワーマンの例のように、活動を停止させるだけでは、根本的解決には至らないことも多く、殺害が手っ取り早いのも事実ではあるのだ。

「あの。何をそんなにイライラしているんですか？」

「イライラなんてしてないわよ」

どんな表情をしていいかわからない、と言った風で十河が対面の顔を見る。

「それじゃ、人間性については下げたんですか？」

「……」

「三好さん？」

「細かいことは言えないわ」

実は上げてしまっている。こんなことなら下げてしまえば良かったと今日になって思うが、生憎と修正液を切らしてしまっている。

「そうですね…… あの」

「何？」

ぶっきらぼうな返事に、十河は更に別方面から探りを入れてみようかと思っていたが、言葉を変える。早めに退散したほうが賢明なようだ。

「あまり私情を挟まれるのは良くないと思いますが」

「挟んでないわ」

「はあ。まあそこまで悪い人間でもないかも知れませんが、多少ルーズで馬鹿なのは大目に見てあげませんか？」

「……随分肩を持つのね？」

「え！ いえ、そういうわけでは」

口ごもってバツが悪そうにしている十河の顔をしばらく見つめる。

あのような男に懸想するなど、理解が出来ない。もつとも、彼女本人から内心を聞いたわけではないが、恐らくは当たらずとも遠からず、だろう。女の弁当をケロッツと胃におさめてしまうような愚か者を、よくも。

「まあ、いいわ。査定は公平に行いました。基本的なことは引き続き貴方が教えてあげなさい」

それで話は終わり、という風に口を引き結んでしまう。十河はまだ色々と思うところもあったが、結局上司のなぞの剣幕に押されて、そのまま部屋を去っていった。

第四十話：職業適性

9月25日（MON）

外の空気が吸いたくなくて、人と会う可能性のない最近のお気に入りにスポットを思い浮かべた。板張りの床を歩いて、非常階段へ出るEXITマークの緑色の光をぼんやり視界の上方に捉えながら、重たい鉄扉を開けると、大きな音を立ててまた閉める。赤錆に侵された鉄製の柵に囲まれた、階段の踊り場で小さく息をはいた。

128万。城山が初めて手にした、いや正確には手に入れる予定の給与である。明細をもらって、先に額を知ったものの、未だ勤務中であるから、すぐさま引き出したりということは出来ない。

多いと捉えるべきか、少ないと捉えるべきかは、人によるだろう。この一月近く、がむしゃらに働いた。休日など数えるのに片手で足りる。アルバイト感覚で勤まるものではなかった。何度やめてやろうかと思ったか知れない。来る日も来る日も、つまらない職場に詰めさせられ、退屈な時間を過ごす。実はこれが一番辛いことだというのがわかった。いつスクランブルが入るかわからない状態で、いわば宙ぶらりんな精神状態で、娯楽に興じるにも何処か身が入りきらず、結局寝るか、じっとしていることが多かった。そしていざ出勤すると、いやがうえにも命の取り合い。十河とのチームワークは、楽な部分もあるが、面倒な部分もある。今までにも荒事の経験がなかったわけではないが、少なくとも誰かと共闘するというのはあまりないことだったので、ストレスや不自由も少なくない。

鉄の柵に背を預けながらタバコに火をつける。

がんばった、と思う。査定を特例で受けさせてもらってからは、少し給料が上がったという説明だった。結局本来の相手を倒すことは出来なかったが、それでも評価はされたということである。実力には素直な数字が帰ってくる仕事。それをやりがいと定めるしかない

のかもしれない。十河のように心に正義を灯すわけでもなく、真田のように目的意識を持ってしているわけでもない。ただ金が欲しい。それだけなのだから、これ以外に喜ぶべきこともない。実際に反映されたその額については、やはり客観的に考えると少ないという思いもある。だが今の状況を思えば、初任給で十分に一月暮らせるだけの報酬を払ってくれる場所などないわけだから、これでよかつたのだとも半面思う。あまり多くを望んではいけない。あまり高くを望んではいけない。自分なぞ人より効率的に生物を壊せるという点を除けば、ただの怠慢な大学生でしかない。

少し秋の匂いを含んだ風が前髪をいじって吹き抜けていった。セミの演奏会も旬を過ぎ、先日などはアキアカネを見かけた。

まあ普通にやっていけてるんじゃないか。対人関係のことである。十河も組み始めた当初よりは幾らか柔らかい対応を見せてくれるようになった。真田の言を信じるなら、心を開きかけているそうだが、真偽のほどは知らない。その真田ではあるが、あまり接点がなく、相変わらず馬車馬のようだ。申し訳ないという思いは依然少し残るが、経緯を詳しく聞くと自分から埋め合わせを買って出たということなので、あまり気に病むこともないのかなと最近は割り切っている。三好については上司と部下という形でそれなりにやれていると考える。もちろん例の件は他言はしていない。総じて五十点。あまり踏み込まず、踏み込ませず。それなりに、それなりに。

「かあ、ぺっ」

タンをひとつ吐き出す。だらりと口元から糸を引いて切れないので、加えて唾を吐く。鉄階段のギザギザに流れるでも広がっていく、白く泡立った唾液を見つめる。

生き物を殺す感触、斬る感触。肉を抉り、切り分け、骨を壊す、断ち切る感触。澱おひのように心の底に溜まっているような気がする。これがうずたかく溜まっていくと、一体自分はどうなるのか。清浄な、正常な部分がなくなると、全体が濁ってしまうのか。頭がおかしくなってしまうのか。

疑問がある。奴らは滅すべき存在なのか。奴らは、ただ自分の食欲を満たすために行動しているものが大半だ。少なくとも獣タイプと呼ばれるようなのは、そうだ。ライオンの子供は動物園で耳目を集めるが、もしその大人が街中で捕食に走れば、すぐさま銃殺されるのだろう。善も悪もすべて人間の目を通してしか語られない。奴らはただ純粹に本能や欲望に恭順なだけである。だったら、奴らのその食欲の犠牲になるのか、という話になる。それは無理だ。自分には破滅願望はなくて、守るべき存在がある。弱肉強食の摂理に忠実な奴らの土俵では、自分が強ければ奴らを殺す権利がある、ともわかつている。だが、やはり自分の知らない人間、そういった人間が食われるのを積極的に阻止しようという気持ち湧かない。そういう人間に牙を剥くからといって悪だと決め付けるには抵抗がある。自分は奴らを率先して屠るが、現場にあつて、それは自分や一応パートナーである十河の身を守るため、ただの一度もまだ見ぬ他人の危険の芽を未然に摘むという意思を持ったことはない。どこか弱肉強食のセオリーに則るなら、力がないのだから食われても仕方ないとさえ思ってしまう。わかっている。矛盾を孕んでいることくらいはわかっている。そういう理論でいけば、奈々華にだって力がないのだから食われて然るべきということになってしまう。だがそれは、許さない。結局、ひどく偏愛なのだ。顔も知らない人間がどうなるうが知ったことでないが、ひとたび気に入った人間を守り助ける為には、至極平然と命すら張る。おかしい。どこかずれている。捻じ曲がっている。知っている。

多分、向いていないのだろう。根本的に、この仕事に向いていないのだろう。命を賭けるとまでは言わないだろうが、少なくとも気には掛けないといけないだろう。その関係のない、面識の無い、情の湧かない、他者にも、そうしななければならないのだろう。無理だ。多分これから仮に一生この仕事を続けていくことになったとして、きつと最後まで出来ないだろう。例えばもし、奈々華と、まったく知らない人間が同時に危険に晒されれば、恐らくは両者を助けられ

る可能性の模索すらしないだろう。真つ先に妹の安全を確保しに動く。城山仁という男はそういう人間である。

短くなつたタバコを落として踏み消す。

まあ、今のところはどうかになっている。つまり民間の犠牲者は一人も出していない。だけど、これからそういうことになる可能性は、今の精神性だつたら小さくないかもしれない。そうなつたらそんなつた時だ、と開き直つたような考えを持っている。そこでクビになつたら、そのときはそのときだろう、と。

ぼんと弾みをつけて、もたれていた鉄柵から背中を離す。今月最後の勤務に戻ることにする。

真田くんの冒険(1)

〔8月27日〕

真田啓が立てた計画は、第一段階の大詰めに差し掛かっていた。予定より時間が掛かってしまったのは悔やまれるところではあるが、ともあれこの計画の第一歩が今日で完了すると思うと、真田の心にはほんの少しの安堵と達成感が去来していた。だが気を緩めてばかりもいられない。何せこれは第一歩、ただの一步目なのだ。まだまだ先は長い。

計画の発端は、丁度二週間前にまで遡る。まず、目的地に近づいてみた真田は、その外周に等間隔で設置された監視カメラの存在を疎んだ。壁の頂点につけられたそれは、建物の前の道路中央、外壁の下、と遠近を映すように、角度が異なるものが交互に設置されていた。これでは死角を探すのは難しい。そう判断した真田は夜間に出直した。昼間やって来た時に離れた所から遠視モードでカメラの形状をデジタルカメラにおさめ、型番を調べた。夜間は赤外線暗視に切り替わるカメラのようだった。一台あたりに吃驚するような値がついていた。

赤外線スコープを被り、その流れを追ってみたが、どうやら鋭角のつまり外壁の下の方を探るカメラの方がお休みのようだ。よくよく眺めていると、道の中央を映している方が、一定の時間を置いて下側を映し出すようだ。カメラのフィルムも無尽蔵ではない。これだけの台数のカメラ全部を二十四時間稼働させているのは機械のスペックとしても費用としてもバカにならないのかもしれない。

真田は周囲を見回した。少し古い街で、若者が多く住んでいる場所ではない。深夜には猫一匹見当たらない。加えて夜間に忍び込もうなどと考える人間は自分か、泥棒くらいだろう。テロ染みたキチガ

イの襲撃はあるかも知れないが、わざわざ夜間を狙う分別が残っていれば、そもそもそんな行動に移るとも思えない。また泥棒もこんな場所へ忍び込むとも考えにくい。ここに盗られて困るようなものがあるとも思えない。

真田はその日は、それだけの収穫で帰ることにした。

翌日、真田はある一軒の民家に忍び込むことにした。目的の建物が遠望できる位置に建っているという条件に合致したからだ。ブロック塀が高く張り巡らされていて、一旦敷地内に入ってしまったら、外から見られることが少ないというのも侵入の好条件である。また時間帯を選べば、この周辺は人通りが全くと言っていいほど途絶えることがある。お年寄りの一人暮らしや、寡数存在する世帯持ちも、核家族が多いようで、父親が仕事に出かけ、子供が学校に出かけると、専業主婦の母親は、家にこもって朝の連続テレビ小説なり、昼間のサスペンス劇場なり鑑賞するのか、つまり朝の十時くらいが狙い目だった。

油断なく周囲を警戒しながら塀の中へと体を滑り込ませる。腰を屈めて小走りに庭を抜けると、裏手に回り、勝手口の前に片膝をついた。持っていた鞆から強化プラスチック板を取り出す。鍵の輪郭に合わせて細長く切り出されたものだった。鍵穴に差し込んで二、三度捻る。当然鍵が開くはずもない。それが目的ではない。引き抜いたプラスチックには、細かい傷がついている。ここから鍵穴の形にやすりで削り、合鍵を作るのだ。

真田はそれを収穫とし、今日のところは撤退することにした。家の人間と出くわさないように、また忍者のような姿勢で庭先を駆けると、注意深く塀の影から外の通りの様子を窺い、無人であることを確かめてからずりと抜け出た。急いで帰って、夜勤に備えて仮眠を取っておくことにした。

更に数日が過ぎた。この数日間は家の人間の動向を窺うことに費や

した。一度主人が家を空けた時に例の合鍵を使って侵入し、各所に盗撮用のカメラを仕掛けた。目に付きにくい場所を真剣に吟味して選定したおかげで、現状不審に思われた様子もない。

邸宅には小高英^{こたかえい}というお婆あさんが一人で暮らしている。この英さん、今年で御歳七十七を数え、めでたく喜寿を迎える。息子夫婦との同居の申し出もあるが、どうにも嫁入りから長らく暮らしたこの家に愛着があり、ここで最期を迎えるつもりでいた。数年前に亡くした夫と同じように。

英さんは、朝の五時ごろに起床し、朝刊を読んだり、テレビを観たりして過ごした後、九時ごろに外出する。駅前の碁会所へえつちらおっちら歩いて向かう。そこで昼や夕方まで囲碁を楽しんだ後、スーパーで買い物をして帰る。夕飯を七時きっかりに摂ると、九時ごろにはもう就寝の準備をはじめ、同三十分ころには大抵、夢の世界へと旅立つ。大抵このサイクルから逸脱するようなことはなく、ほとんど毎日同じことを繰り返す、という感じだった。

真田は思う。毎日新しい刺激や、命の危機を掻い潜りながら生きる自分とは正反対の生活である。どちらが良いのだろう、とふと疑問が浮かぶのだ。妖魔を屠るたび、自分は生きているんだ、生き残ったのだと本能から出る喜びに打ち震える生活は、果たして幸せなのか。毎日同じようなことを繰り返し、新しい人間関係も、新しい娯楽もなく、ただ機械のように日々を送る生活は、果たして幸せなのか。考えても詮無きことだとはわかっていても、英さんを見ていると、時々このような思考に支配されることがある。

だがとにかく、こんな空き巣のようなことも、今日で終わりである。この家屋に忍び込んだのは、例の施設の監視カメラの動きを詳細に観察するためであった。今日で一週間、来る日も来る日も、仕事帰りの疲れた体に鞭打って、英さんの家の二階に忍び込み、窓から観察を続けた。根気の要る作業だった。動きの少ないカメラを追っているうちに、抗し難いほどの眠気に襲われて、自分で自分の腿の辺

りをつねることもあった。一週間全く同じ動きをするカメラに、休日と平日それぞれ一日ずつのサンプルで良かったのではないかなとど甘えた考えが浮かぶこともあったが、振り払った。

今日がそうだった努力の結実の日である。カメラは今日も、いつもと全く同じ動きをする。これはもう確定情報と見て良いだろう。

カメラは深夜の二時以降、過日見た飛び飛びの稼働状況へ移行する。二時以降も稼働を続ける、道の中央を映すカメラは、きっかり三十秒ごとに、下を向いたり上を向いたりする。これも一台ごとに交互で、丁度振り子のように動く。例えばある一台が、首を下にすると、その隣の台は、今まで下を向いていた首を上げる。規則正しいその動きを見ていると、階下で眠るこの家の主人と重なって、また哲学めいた考えが浮かぶ。やめよう。首を大きく振って、観測を終了する。望遠鏡をたたんで、畳の上に静かに置いた。なんにせよ、これで欲しかった情報は手に入った。もうここへ侵入することもないだろう。

第四十一話：CUT DOWN

10月1日（SUN）

扉を押すと、密閉度が高いのか、思いのほか重く、渋々両手を使った。まっさらな白い壁紙と照明が目にく、城山は自然と目を細めた。外は泣き出しそうな曇天どんてんなもの、この空間を対比的に明るく見せた。

「いらつしゃいませ」

愛想のよい男の店員がくりくりとした瞳を向ける。どこかあどけない。城山より年下ということはないだろうが、見た目だけはそう見えたと。

予約を確認されたので、名前を告げると、奥の待合に手のひらを差し向け、少々お待ちくださいということだった。観葉植物を間仕切りのように使った、奥のスペースには安物の革張りソファがポツンとあった。

エンジ色のそれに腰掛けて、手近の棚からスポーツ新聞を取り上げる。一面は昨日のプロ野球で活躍した選手がアップで写っている。そぞろに捲っていくと、わいせつな広告が踊るページで一旦手を止め、少ししてからまた繰る。芸能面にまで来ると、少し眉根を寄せると。

「城山さん、カットでお待ちの城山さん」

「はい」

新聞を棚に戻して立ち上がる。言われるまま案内される。

「今日はどうしますか？」

今日も何もイチゲンさんなだけだな、と皮肉めいた考えが浮かぶ。

「短くしてください。えっと、耳に掛かるくらいで」

「結構ばつさりいっちゃん感じで？」

「はい」

担当は、さっきの童顔の店員だった。自身は金髪にシャギーを入れて、トップのあたりをワックスでかき回したようにセットしている。ダメージジーンズと派手目の黄色いTシャツを着ていた。口調も軽く、よく言えば親しみやすい、悪く言えば軽薄な若者、という印象だ。

しばらく黙ってハサミを入れていた店員だが、少しすると話し掛け
てくる。

「最近物騒ですよね」

「え、ええ」

「なんか変死事件、っていうんですか、やばい死体が見つかること
多いですよね」

「らしいですね」

ジャキジャキと小気味いい音を立てて梳きバサミが城山の前髪を整
えていく。

「ちよつと前も、誰でしたっけ？ あの芸能人」

「ムツサカ？」

元は役者だったような、最近バラエティー番組なんかにもちよ
ちよく顔を出していた、半端な印象の三枚目。先ほどのスポーツ新
聞でも、哀悼が一通り済んだので、生前の女性問題が取り沙汰され
ていた。

「ああ、そうそう、あの人。顔が原型留めないほど殴られた後、下
半身がまだ見つかっていないとか」

下半身が妖魔に食い去られたことを城山は知っている。だからこれ
から先も見つかることはない。スクランブル過ぎて到着が間に合わ
なかったせいで起きた事件だ。

「グロイですよねえ。なんつーか、犯人は頭おかしいんですかね」

「どうなんですかね」

話に夢中になっているのか、徐々にカットが雑になってきている。
ハサミが切りきれず噛んだ髪束の束を引っ張った。顔をしかめたが気
づくでもなく、店員は続ける。

「どつなつちやうんですかね。日本」

「さあ」

城山は目を閉じる。話の区切りがついたところで、これ以上会話を続ける気が無いことをアピールする。もともとこういう人種は好かなかった。満面の笑顔も、美辞麗句も信用できない。愛想笑いと世辞だ。そういう業種なのはわかつてはいる。人好きのする性格を演じ、仕上がりには悪いことを言うわけにもいかない。仕事だとわかっているが、だからこそ苦手である。

ふ、と閉じた瞼を開くと、鏡越しに城山を見る青年の顔が、まだ何か話したそうにしている。鏡の中ではつちりと目が合ってしまった。青年は勘違いする。

「さっきの話の続きなんですが、知ってます？」

「……何を？」

ひどく億劫に口を開いた。

「集團催眠つすよ、シューダンサイミン」

城山は顔に疑問符。

「ネットとかで噂になってるんですよ。なんか、夜中に人が集まって殺し合いするとか」

「何それ」

荒唐無稽な話に思わず噴出しそうになる。あまりにマユツバで、誰かの悪戯ではないかと思っただ。城山のそんな様子に、青年は一瞬むっとした様子を見せるが、すぐに例の愛想笑いを浮かべる。

「それが、なんかそこから生還した人間が書き込んでるみたいで、しかも複数あるみたいなんですよ」

「……」

「マジなんですって」

「へえ。怖いですね」

最低限、おざなりな声色にならないようにする気遣いだけは辛うじて残っていた。

思ったより短くされてしまった前髪を手で引つ張ったり撫で付けたりしながら、城山は道を左に行くか右に行くかで迷った。右に行けば駅の改札で、左に行けば馴染みのパチンコ屋である。今日は夜勤なので、昼間は自由に出来る。眠くなれば、多少は仮眠が出来るというのは、この仕事の魅力である。むしろどちらかというと、昼間たっぷり寝ていると、職場でやる事がなくなるといって、わけのわからない事態に陥る。

大学には用がある。後期の授業が始まる前に、半期だけでも休学の措置が取れないかと、学生課に掛け合ってみるといって用事。もつとも奈々華の勧めであって、城山本人が考えいたったわけではない。ただ休日にもやっていたらどうかと、国公立のやる気のない職員の愛想のない事務対応を思う。休日まで出張ってきて必死に働いているとは思えない。加えて面倒である。大学には電車で通っている。通っているという表現が適用されるほどの頻度でないのが何ともふざけた話だが。駐車場もあるにはあるが、狭くて停めにくい上、手続き諸々が面倒で、結局申請していないためである。

パチンコ屋には行きたい。だがもう昼過ぎている上、休日の特にめばしいイベントも行われていない今日、わざわざ布施をしに行くのも馬鹿らしい。

どうしたものかと思案しているうちに、視界の端に人だかりが出来ているのを見つける。遠くからサイレンの音が聞こえてくる。

「おい、人が死んでるらしいぜ」

雑踏の中から、若い男女がひそひそ話をする声が聞こえてくる。

「マジ？　こんな真つ昼間から？　駅チカだよ？」

人だかりが割れて、警官と一緒に見知った顔を見つける。向こうもこちらを見つけて、口をおうと動かす。声が聞こえないのは、現場の警官が拡声スピーカー力を使って大音声だいはんじやうを発しているせいだ。近づくな、どっか行け。そういう内容だ。

真田がいつもの懐っこい笑みを浮かべながら城山の方へやってくる。

「おう。変なところで会うな」

「ですね」

真田は平然と歩いていくので、城山は付き合いながら、一度振り返る。いいのか。仕事で来たのではないのか、という疑問を言外に投げかけるためである。

「ああ、あれか？ 違う違う」

「そうなんですか？」

「普通の人殺しだよ。人が人を殺したんだ」

冷静に聞くとすごい会話だなと城山は思う。人を殺すのは大抵人で、いちいち口にするのは不自然だ。だけど、彼らにとつてはそれが自然である。彼らの認識の中では、人を殺すのは人が妖魔だから。

「じゃあどうしてここに？」

「ああ。たまたま通りかかったら、見ちまってな」

「すごい確率ですね」

思わず笑ってしまう。

「だけど、中に入ってたみたいですけど？」

「ああ。サツとも知り合いが居るんでね。それで、妖魔の、特別犯罪の可能性はないかって、はか諮られたってわけさ」

死体の形状を見ていないので、城山は何とも言えない。

「お前も、通りすぎりか？」

「ええ、地元民なんで」

「ああ、お前も八王女はちおうじょなのか」

「も、ってことは？」

「そう。俺も。しかしこんな身近に住んでたとは」

そういうことなら、すごい確率というほどでもないかもしれない。知り合い同士が同じ殺人現場に同じ時間に居合わせることまで考えれば、それなりにすごい確率なのかもしれないが。

「お前、夜勤か？」

「ええ」

「俺は久しぶりの休みだよ」

疲れたような笑み。

「ちと夜更かししすぎてこんな時間になってまってさ」

夜更かしというレベルではない気がするが。徹夜も通り越して、翌日の昼過ぎになってしまっている。

「帰って寝るべき。じゃあな、がんばれよ」

それだけ言っと、城山の返事も待たず、ひらひら手を振りながら改札の方へ消えていった。

第四十二話：シフトのこと

出社するとすぐに、十河と出くわした。広間の椅子に腰を落ち着けて、長机の上に紙片を二枚乗せて、交互とも同時ともつかない目の運びで穴が開くほど見つめていた。部屋に入ってきた城山に気づき、顔を上げる。

「おはようございます」

「ああ、おはよう。というか遅刻だぞ？」

二分くらいは誤差の範囲内だという認識は少なくとも日本では通らない。受け流すように首をすくめて、カードリーダーに向き合う。一発で読み込んだ。感度が悪いと、三好が新調を検討していたある日、城山が出勤してきて、ほんの出来心で社員証ではなく、パチンコ屋の会員カードを通してみたことがある。その時はきつちりエラーが出たのだが、間髪入れずけたたましい警報音が鳴り響き、おっとり刀で駆けつけた三好にこっぴどく叱られた。どうも社員証以外のものを通すと、警報装置と連動して異常を知らせる仕組みになっているそうだ。しかしよくわからないもので、その事件以来、非常にスムーズに社員証を読み込むようになった。丁度、普段使われずに凝り固まったツボを刺激して、体全体の代謝やら血行が良くなったような感じだ。

十河の横から顔を出して、何を見ているのか確認してみる。

「シフトですか？」

新しい月になったから、新しいシフト。月末締めのみ月末払いだが、25日以降、31日までのシフトは先月分のシフトの範疇で、1日からの分はこうやって月初めに貰う。もちろん締めた後の、その数日間の給与については、不払いなわけもなく、次の月に加算される。十河が少し椅子を引いて、紙片を見せてくれる。

「って、それ俺のじゃないですか！」

「あ、ああ」

「どうして十河さんが持っているんですか？」

「普段は自分のことを俺と呼んでいるんだな」

「質問に答えてくださいよ」

十河は目を瞬かせる。

「三好さんに貰ったんだ。後で城山に渡しておいてくれと」

「それでどうして、ガン見してるんですか」

またパチクリ。少し色素の薄い瞳が瞼に覆われたり現れたりする。

「チームなのだから、当然だろう？ 城山もわたしのを見てもらっ

て全く構わない」

城山は考える。あまりに十河が堂々としたものだから、ひよっとすると自分の方がおかしいのだろうかという気になってくる。この職場では当たり前のことなのではないかと。

確かに別に見られて困るようなものでもないのだが、一応は個人のものであり、城山の所有物であるのだから、見せてくれと一言断りを入れるのが筋ではないかと、城山は思うわけだが、自信が無くなってくる次第。どこか自分がひどく狭量な気すらしてくる。

「何か…… まずかったか？」

気づけば十河がしょぼんとした様子で、城山の様子を上目に窺っていた。

「ああ、えっと、いえ。どうぞ、気の済むまでご覧になってください」

くたびれた様子で白旗をあげるが、すぐに城山はあることに気づく。「でも、そういえば、自分のシフトだけで事足りるんじゃないですか？ 確か、ほかの人の出勤状況も乗っていた気がしますが？」

横軸に日付が伸びていて、それぞれ対応マスに昼、夜、公休とついている。縦軸には職員の名前が載っていて、ずらりとそれぞれのマス、すなわち彼らの出勤状況を伝える。

「……これだ」

十河が紙の一部を指差す。彼女のシフトの方で、彼女のマスの勤務時間帯を示す文字がカラフルである。

説明によると、シフトは三好の側ではこうして欲しいが、本人の方で前もって要望を伝えている場合で、都合をつけて欲しいという意思を込めたものが赤字。人員が余っているので出ても出なくても良いよ、という場合は黄色。その他、真田のようにヘルプとして他チームに加わる旨は緑。それぞれの色がそういう事情に対応しているそう。シフトはこれで決定じゃなく、あくまでも暫定的なもので、最終決定は10日過ぎくらいになるそう。また一旦は決まっても、何せ不測の事態が多い職種、随時変更などもあるらしい。

城山などは、調整の必要もなく、一枚目と丸つきり同じ内容で済んだので、三好が決定版を渡さなかったようだ。一枚目のシフトにも色など何もついていなかった。こちらが休暇中の大学生という、時間を切り売りできるほど持て余した存在だという事情を知っている彼女に良いようにシフトを組まれたという話のようである。ついでに言つと、こちらの都合で一時間実労が少ないという引け目もあって、それ以上要望を言おうという発想に至らなかった。案外したたかに足元を見てくるし、案外扱いが悪い。

「まあ事情はわかったんですけど。だけど、どうして？」

「どうしてとは？」

「だって僕と十河さんはいつも一緒でしょう？」

十河がドキリとしたようで、座ったまま体を強張らせる。視線をさまよわせ、落ち着かない様子になる。城山はどうやら言葉選びに失敗したらしいと理解する。

「変な意味じゃなく、チームなのだからそこらへんも調整してあるんじゃないですか、ということですよ」

「あ、ああ。そんなことはわかってる」

本当ですか、とぼそぼそ言う。聞き流したいようで、十河は三好のような咳払いをする。

「そうは言っても、我々も我々のしからみがあるんだから、そういうもいつも都合がつけられるわけでもないだろう？」

城山は少し意外な気持ちになる。怪訝な顔の十河に、思ったことを

言った。

「いえね。てつきり人命が懸かっているのだから、そういった私事は二の次だ、くらいは仰るのかと」

「わたしは、わたしに出来ることしか出来ない。体が二つも三つもあるのなら、そうも思うだろうが…… だからといって別に見捨てようとか言っているわけではない。そのためにここには複数の人間が複数のチームを組んで勤務しているんだろう？」

「なるほど」

そこらへんは割り切れているのか、と。 もう少し危うい精神性をしているのかと考えていたが、これで大人の部分もキチンとあるらしい。或いは城山が以前差し出がましくも諭すようなことを言った成果なのかもしれないが、そこらへんは彼は彼女ではないので正確なところはわからなかった。

「別にわたしが全てを救うとは考えていないし、そうする必要もない。誰が助けた方がいい。結果的に助かっているのならそれでいい。その上でわたしが助けられる命は、すべからく助ける」

決意表明のようだった。立派だと思った。だが、城山の心には妙なしこりが残る。その正体がよく掴めないまま、十河の方が照れくさそうにして、話を戻す。

「今月はわたしは野暮用があつて、空けることも多くなる。だから、少し変則的なシフトになるはずだ」

「はあ。寂しくなりますね」

「本当か!？」

「え?」

「寂しいのか?」

「え、ええ、まあ」

今更、社交辞令だったとは言にくい食いつきっぷりに、城山は戸惑った。

喜色に緩めていた顔を、しかし十河は少しして元に戻した。

「とにかく、寂しくても、がんばるんだ。ちゃんと臨時のチーム編

成もある。いいな？」

「は、はい」

やや疲れた顔でうなずいた。

第四十三話：UNLUCKY NIGHT

清澄な夜の空気を、剣戟の音が震わせる。一合、二合と斬り結ぶうち、城山の目は油断なく妖魔を観察し、その弱点、すなわち重点的に庇うポイントを炙りだしていた。銀に覆われた体毛の、深く、下腹部の辺りだ。

「十河さん！」

右の前足を振り上げて、切り裂くように爪を振るってくる。城山がバックステップで妖魔から距離を取る。牙はそれほどでもないが、鋭い爪は脅威となりえる。それを無闇やたら振り回すのではなく、確実に城山の隙を突こうというタイミングで、無駄なく振るうので少々厄介だった。十河と城山の視線が一瞬交錯した後、それぞれ散会。

城山の方を標的に定めたようで、背に生えた鳥のような翼をばたつかせ、加速装置のように空気を裂いて、駆けてくる。天馬と狼を混ぜたような姿は、そうしていると神々しいオーラを発しているかのような錯覚も覚える。

城山への距離を猛然と詰める妖魔は、しかし途中で歩みを止めざるを得ない。後ろに回りこんだ十河のクナイが正確に二枚の羽の付け根を穿ったからだ。妖魔が低い声で唸りを上げて、攻撃してきた相手を体ごと振り返る。爛々とした瞳には怒りの炎が灯っている。いかに直線上とは言え、動体にこれだけ寸分違わず打ち込めるとは……

城山は柄にもなく、気障な様子で口笛を一つ吹いた。十河には見えない位置だったのでやってみた。ヒューと囃すような音になって、直後、風になる。見えない位置、すなわち二人の間には妖魔の体がある。それが遮蔽物となっている。挟み撃ちの格好である。したがって、十河のほうを向いてしまった妖魔は城山に尻を向けている。必然、弱点と踏んだ下腹部も近くなっている。

「バカが」

低く落とした体で駆け込んだまま、目標まで最短距離で寄せて、トンと小さく跳ね上がる。刀を逆手に持ち、突き立てるように降った。降り落ちたるは、後ろ足の少し上。背中から寸分違わず、先ほどから過剰に守っていた下腹部を貫き通す。

断末魔は非常に聞き苦しく、ガチヨウを絞め殺すような声。ガーガーとやかましい。ペガサスを連想させていた、その妖魔の印象は城山の中で一新される。どちらかというと、危機管理の鈍磨した都会の鳩に近い。

刀を突き刺したまま、ゆっくりと距離を取る。少し暴れた後、横向きに倒れこんで動かなくなった。

「あれでもう少し知恵があると、本格的に厄介な相手なんだがな」
十河が呟く。城山も同感だった。戦力を二分して、挟み込んだ途端、どちらつかずに体を右往左往させるものだから隙だらけというものである。

死骸から刀を引き抜くと、互いに労う言葉もそこそこに、車に乗り込んだ。

「ふう。終わりましたね。しかし二件もとは」

シートベルトを締めると、助手席の十河に疲れた笑みを向ける。

「三時の一体は、違うチームがやってくれるとは言え、今日だけで三件ですか」

「文句を言っな。仕事だ」

「いえ、文句を言いたいわけじゃないんですけどね」

「だったら何だ？」

城山はタバコに火をつけると、すぐに一口吸って灰皿に置き、サイドブレーキを引いて、ドライブに切り替え、車を発進させる。タバコについてももう苦言を呈されることはなくなった。粘り腰の勝利と思っっているのは城山だけで、実際のところは言っても無駄だと十河が諦めただけのことだった。あまりうるさく言い過ぎて、疎ましく思われるのも避けたい、という思いも多少なり働いてはいたが。

「いえ。こういうのって時々あるんですか？」

以前にも言っていた通り、夜勤というのは昼間に比べて幾らか楽なことが多く、休憩回しと揶揄した十河の表現もあながち間違っていない、という認識だった。だが、今夜に限って言えば、昼間より忙しいかもしれない。何せ日も変わらないうちに、立て続けに二体の妖魔を肉塊としたのだから。

あの後、それぞれシフトを確認し終わると、例の掲示を見て、城山は驚いた。十時台に一件、十一時に一件、と妖魔の出現が予見されていたのだ。しかもそれを二つの現場が近いからと言って一つのチームで当たるように振られていて、しかも二つ詰めているうちの、城山十河のチームという、二重三重の驚きに見舞われた。申し訳程度に、三時台の一件はもう片方で、更にスクランブルが入った場合も向こうが対処してくれるという話にはなっていたが、スクランブルなど、所詮緊急事態で、もし向こうが出払っているときに入れば、自分たちが出る以外ない。あくまで原則ということだ。まあ起こるかもわからない事態の優先まで目くじら立てるつもりは城山にもないが。

「うっん。まあ珍しいことではあるが、奴らはこちらの事情などお構いなしだからな」

「まあ、そうですね」

わかっている。現に今まではこれほど忙しい夜は無かったわけだから、少なくとも夜より昼の方が辛いということは身に染みてわかっている。それがまあある程度は常態で、しかしたまにイレギュラーが出るのは生き物相手のことだから仕方の無いこと。わかっているのだが、だからこそ、夜勤は楽であって欲しい。そういうエマージェンシーに自分がぶつかるとは勘弁して欲しい。そういう思いだった。まさしく十河が洗面作って話した、休憩回しの側面というのに、どっぴり漬かってしまっているのが彼女の相棒だった。

「そう、不貞腐れるな。これで民間の被害を事前に防いだと思えばいい」

「……そう、ですね」

「それに、あれくらい物の数ではないだろう。身一つで戦っていた時もたいしたものだったが、刀を持つとそれ以上だな。その、なんと言っか、少し懂れる」

「……そう、ですか」

霧雨が降りだして、開け放っていた窓を閉める。フロントガラスには、滲んだ街の光が映っていた。

第四十四話：髪切った？

10月2日（MON）

ビルまで戻ると、城山が駐車を終えるまで十河は助手席におとなしく座っていた。最初の頃などは先に下りてしまつて、さつさとエレベータに乗つて自室へ戻つてしまつていたのだが、最近はこうして待つていて一緒に降りてくれるようになった。エレベータも共に乗り、戻つてからも、城山がパソコンを使うからと広間へ向かうのなつついてくることも珍しくない。

そして今日も同じような運びになつた。一旦は自室へ戻つたかに見えた十河はしかしすぐに広間へ戻つてきて、パンを焼き始めた。といつても、生地をこねてという本格的なものでは勿論なく、事前に買つていた食パンをトースターで焼き始めただけのことである。

キジ違いではあるが、城山のほうはウェブ上の記事を読んでいた。昼間見た、正確にはもう日付が変わつていたので、昨日の昼間見た殺人事件のことが少し気になつていた。といつてもすっかり忘れていたのだが、妖魔を二体ほど葬つているうちに、何とはなしに思い出した。思い出すと、モヤモヤした。自分が住む街で起きた、といつただけでなく、すごいのかどうかはわからないがそれなりに低いだろう確率でその場に居合わせたことが、何か奇縁のようなものを感じさせる。

刺殺のようだった。殺されたのは三十代の会社員男性で、ご苦労にも休日出勤で外回りをしているところを襲われたそうだ。首や腹を背後からメッタ刺し。救急車が到着した頃にはすでに息はなかつたといふことだった。

犯人の方も捕まつているようだ。こちらは二十代のフリーターの男。凶器は包丁、動機については不明といふことだった。

どうやら真田の言つたとおり、妖魔は関係ないといふことで間違ひ

なさそうだ。もともと彼の言を疑っていたわけでもないのだが。

「ん」

画面から顔を上げる。鼻腔をくすぐる香ばしい匂い。見ると十河が焼いたパンを持って城山の隣に腰掛けようとしていた。

「何を見ていたんだ？」

覗き込むでもなく、パンの乗った皿を城山の方へ寄越す。どうやら自分のだけではなく、彼の分も焼いていたようだ。半分に切り、サンドイッチになっている。挟まっている具をそれとなく確認すると、目玉焼きとウインナー、レタスにマヨネーズがかかっているようだ。

「いただいても？」

「わたしだけ食べるというのもいやらしいだろう」

「はあ。ありがとうございます」

誰の分とかは抜きにして、今も彼女の言う勤務中であって、休憩時間でもないのに、軽食をつまんでいるようで良いのだろうか。そう口にするのは流石に意地悪な気がした。それに彼女の頭が少し柔らかくなっているのだとしたら、それはそれでチームを組む身としては歓迎すべき事態だ。

「いただきます」

サンドされた具がこぼれないようにしっかりと持ち、かぶり付く。力リカリとした表面を噛み進んでいくと、芳醇で柔らかいパン本来の風味と、具材の味がマッチして、美味だった。運動をした後だったので、思っていた以上に腹がすいていたらしく、城山の咀嚼はとまらなくなり、一分とかからずペロリと完食してしまった。手を合わせてご馳走様を言う。そんな様子を微笑ましそうに見守っていた十河。

「わたしの分も食べるか？」

「え、いえ。いいですよ。十河さんが食べてください」

物欲しそうにしていたつもりはないが、確かに腹が減ってはいる。少し入れてしまったことで殊更意識してしまっただけらしい。

「いいから。そんなに美味そうに食べてくれると、わたしも嬉しい。

自分の分はまた作るから」

そう言つて強引に自分の皿を城山の方へずらす。なおも遠慮を言い募るうとする城山に優しく笑つて、立ち上がると、また調理場のほうへ行つてしまふ。

「ふうむ」

手持ち無沙汰な気がして、パソコンを操作して、データベースを立ち上げる。さつき戦つた「トビオオカミ」なる妖魔についてでもおさらいしておこうかと考えて、やめる。右上の赤いバツボタンを押して閉じた。なんだか十河のご機嫌を取ろうとゴマすっているような気がして嫌になつた。もっと素直に感謝して、サンドイッチをいただくことにした。

明日は、わたしではない。

そう言つ十河は申し訳なさそうだった。どうやら本当の本気で城山の言を社交辞令とは思つていないようだ。どこかズレていて、それが妙にかわいらしくて、城山は本当に自分は寂しいのかも知れないという気持ちにもなつてくるから不思議だ。

「それで、乃木さんでしたっけ？ どういう方なんですか？」

彼女の言つ野暮用というやつなのか、明日は、いやもう今日なのが、早速、城山は別の人間と組む手筈になっている。それが、今話題にする乃木強兵の木のきょうへいという男だという。

「……正直に言つて」

十河はまだ顔を曇らせたままだった。

「いや。その字を見てもらえばわかるように、中々の自信家だな」
強い兵。確かに粹すぎる名前だが。

「でも名前だけじゃ」

「それ、改名したらしい。まあ漢字を変えただけらしいが」

元は恭平だったらしい。問わず語りに、身の上を明かしたのだそう。初対面の十河に対して。これだけでも饒舌な一面が窺い知れる。饒舌というのは、大概是自意識過剰で自己顕示欲が強い人間だとい

うのが城山の経験上、言える。自信家という話にも説得力を持たせる。

「良い感じの人ではない？」

「さあな。ただ、正直に言って……わたしはあまり好かない」

城山は微妙な顔をして、髪の毛のサイドに手を入れる。まだ髪の毛の長さに慣れない。

「髪切ったんだな」

「ええ」

今更だな、と城山は思う。

「短いほうが良い」

「そうですね？」

流し目で見たり、伏目にしたり、忙しそうにしている。見られて禿げるものでもないのだから、見たいのなら堂々と見てもらって構わないのだがな、と城山は微笑。

「しかし、まあ、これからも知らない人間と組むことも多くなるんじゃないかな」

「すまないな」

「いえ。貴方にも、それこそしがらみというのが有るのでしょう？」

お気になさらずに

いつまでも限られた人間としか関わらない、というわけにもいかないだろう。働いている以上は。となると、遅かれ早かれという話である。それに、如才なく振舞える自信はある。何せ、目の前の十河とて、最初は随分と嫌われた状態だったのだ。世界中の人間を敵に回しているわけでもなし、彼女以上に険悪な状態からスタートということにはそうそうなるまい。

少し黙考していた城山に、何を勘違いしたのか、空気が悪いとでも思ったのだろう、十河が席を立つ。部屋に戻るのかと思えば、それでもまだこの空間には居るつもりらしく、コーヒーを入れると言った。

立ち上がった彼女の後頭部におくれ毛が少しあるのを見つけて、な

んとなく頬が緩んでしまった。

第四十五話：PERFUME

「お兄ちゃん、口元ケチャップついてるよ」

対面の席に座る奈々華に注意されて、ナプキンを取って拭いた。血糊のような赤さに、何となく彼女に見えないように畳んで皿の端に置いた。くすりと慈愛に満ちたような顔で笑う奈々華に、居心地の悪さを感じながら、彼女の皿を見た。半分以上は片付いているが、まだもう少しかかりそうだ。

本日も夜勤ということだった。一月しか働いていないのだが、それでも連荘というのは珍しい事態ではなかるうかと推量する。なんにせよ、上の意向に従うだけの自分にとつては、リヤンハン縛りだろうがパーレンチャンだろうが、甘受するだけのことだ。

「でも外食なんて久しぶりだなあ」

それでも、彼女がこれほど喜んでくれるのなら、夜勤というのも悪くはないのかもしれないという気持ちにさせられる。昨日は特に差し迫った用もなかったので、自分のほうを優先したが、今日は妹に付き合うことにした。

実は城山の方から誘ってみた。先日、迎えが遅れて奈々華を随分待たせることがあった。そのお詫びというのが一つ。すっかり家にこもりがちになってしまった妹の為に、たまには気分転換に外に連れ出した方が良くはないかというのがある。どちらも求められたわけではないので、それなりに気兼ねはあったが、誘った。彼女の方からは外に出たいと思っていてもやはり、言い出しにくいことではないかと思っただ。いわば遠慮の攻めというよくわからない心の動きの推移を経て、今日は外で一緒に食べないかい、と切り出してみると二つ返事で快諾された。どころか礼まで言われた始末。

「オムライスなんて、あまり高級感はないけどね」

「そんなことないよ。何処でもいいよ。何処でも嬉しい」

お兄ちゃんといけるなら。以前の彼女はそう続けたらう。恥ずか

しげもなく。だが今の彼女にそういった気持ちがあるかまでは、兄にはわからなかった。多分、無いだろうな。そう悪い意味で割り切ってしまった方が楽なことに気づいたのはいつ頃からなのか、もう城山自身覚えていない。

奈々華の様子をあまり嫌がられないだろう程度に窺いながら、食べるのを待つ。こんなに遅かったかと、記憶をほじくり返すが、もうそんな瑣末なことまでは思い出せない。奈々華は、あまり口を大きく開けないように意識して、口元を汚さないよう注意して、慎重にスプーンを動かしていた。

やがてそれから十分近くかけて食べ終わった。口元を丁寧に拭いて、城山と同じように皿の上に紙ナプキンを置いた。

「ご馳走様」

払いは当然、城山もちである。

「いや。もつと良い所でも良かったんだけどね、本当に」

奈々華は困ったように笑うだけで、肯定も否定もなかった。代わりにちよつと躊躇った様子で言葉を紡ぐ。

「お仕事、どう？」

ほぼ一月働ききった、その所感。

「うん。まあへっちゃらだよ」

「……」

「まあみんな良くしてくれるし、仕事自体は楽なものだしね」

本当かよ、と自分で言っていておかしくなる。

会話に詰まり、ぼんやり視線をさまよわせる。客の入りは五分というところ。夕飯時、平日、どちらをどれだけ考慮に入れて、どれくらいの入りで満足すべき数字なのか、城山にはわからない。加えて、客単価だとか、人件費だとか、食材費だとか、諸々考慮に入れるべきだと気づいた日には、もうお手上げ。くだらないことを考えているな、とはわかっていても、会話の続かない妹の顔をまじまじ見つめている気にもならなかった。

「出ようか」

そんな様子の城山に、奈々華の方から切り出した。

少し歩くと、閻魔こおろぎの鳴き声が輪唱のように重なり合っている空き地を過ぎた。すっかり秋だねと呟く奈々華に、そうだねとだけ返して、また沈黙が降りた。時計を見る。九時前にこつちを出れば余裕で時間内に着くので、丸々一時間以上の猶予があった。だけど、これ以上どこかへ行く気にはならなかった。

のんびりと歩く奈々華の歩調に合わせていると、やはりこんなに遅かったかと怪訝な気持ちになった。秋風が時折思い出したように吹いて、前を歩く彼女の髪の毛の匂いを攫って、城山の鼻の近くを通って後ろへ過ぎていく。ふ、とあることを思い出した。

「奈々華ちゃん」

「え？」

奈々華が首だけ振り返る。

「キミは香水とつけてる？」

「え。う、うん。つけてはいるよ」

月明かりに照らされた奈々華の顔は、喜びのような驚きのような表情をしていた。城山は困った。本当に思いつきに近くて、声をかけてみて初めて、続きの言葉を用意していなかったことに気づいた。どんなのつけてるんだい。そこはかとなくいやらしい気がする。ふうん、そっか。なぜ聞いたのかわからない。結局、それらしい言葉を見つげるのに、たっぷり三十秒ほどかかった。

「どこのメーカーの？」

「え？」

えっと、と困惑がちに会社の名前を告げてくれる。さっぱりわからなかった。

「えっと、家に帰ったら少し嗅がせてくれないかい？」

「……つきたいの？」

奈々華の顔に少し不穏なものを感じる。踏み込みすぎたのか、と背

筋が寒くなる。

「あの、無理にとは言わないから……」

「今無いよ。丁度きらしてる」

「そっか」

やはりこれは拒絶なのか。口をついて出そうになる謝罪の言葉を、しかし一旦喉元で止めて、神経を逆なでするような蓋然性がいぜんせいを持つていないか吟味する。早く謝った方がいい、ただ言葉は厳選されていなければならぬ。背反する難題を同時に押し付けられたようで、心臓が変な熱を持つ。口を開きかけた時、

「だから、知りたいなら、今」

「え？」

随分と間抜けな声が出る。

「今、嗅いで？」

どうにも言われている事の意味が、脳の表面で上滑りするばかりで、その中にまで入ってこない。奈々華が一步、二歩、道を引き返してきて、城山の正面に近い距離で立ち止まった。

「あの」

「知りたいんじゃないの？」

責めるようではなく、優しく諭すような口調。気がつけば城山は奈々華の首筋に鼻を近づけて、その匂いを嗅いでいた。熱病のように頭がくらくらする。いい匂いだ。純粹にそう思った。どれくらい嗅いでいたか、やがて城山の頭が目的意識を取り戻す。ああそうだ。呆けている場合じゃない。折角の厚意なのだから、よく嗅いで識別しなくては。もうこんなお願いは金輪際、逆立ちしても出来ないだろうから、今やらないと。

違う。すぐに答えは出た。仕事で何度もつけているのだから、流石に間違わない。

離れる。心のどこかに未練のようなものが巣食っているのに気づいたが、放っておいた。二、三度深く呼吸をして、頭を落ち着ける。

「ありがとう」

「ごめんなさい、じゃないのか。」

「うん。どうだった？」

「えっと、そうだね。検討してみるよ」

似た匂いすらしなかった。だったらなぜ。なぜあの時奈々華は狙われたのか。

「そっか。じゃあ帰ろう？」

ふっと笑って妹はまた背を向ける。のんびり歩き始める。

未だ疑問に対して憶測が飛び交う脳内で、一つ関係のないことを思い出す。前回の休みの時、先月末だ、彼女は香水が切れたと言って、新しいものを買ったばかりではなかったか。

第四十六話：怪物のスイッチ

コンビニに寄りたい、と言うと奈々華は店の外で待っていると返した。ポケットの中で揺れるタバコの箱が、随分軽いのが気になったのだ。半箱ほど残っているが、これから半日を職場に袋詰めになされるのだから、心もとなかった。やることがあまりないと、どうしても消費量は伸びる傾向だ。昨日あれだけ出たのだから、今日こそは個室で過ごすだけのサルでも出来る仕事になるだろうと予測していた。

レジに並びながら、先ほどのことを思い出す。嗅いでみると言われて、素直に従ったのは、何故だろうかとずっと考えていた。本当は香水について考えるべきなのだろうが、そっちにはばかり気を取られていた。

このごろ、今までより遥かに多くの時間を共有し、今日の夕食についても、嫌な顔一つせずに付き合ってくれた。

なるほど、自分は多分調子に乗っているのだ。実は城山の脳内ではもう答えが出ていた。また昔みたいに。そんな妄執が自分の中に確かにあるのだ。甘ったれたことを。自戒の念も同時にあるが、中々この妄執が振り切れない。何を考えているんだ。自分が彼女にしまったことを忘れたのか。ただ黙って罪滅ぼしをしていればいいんだ。それでも少しずつ払っていく。役割であり義務である。つまらない考えなど捨て去って、ただ彼女の為に動けばいい。機械だ。そういうロボットだと思えばいい。自分はそのただ一つの至上命題を忠実にこなすだけの機械だ……

「お待ちのお客様、こちらのレジにどうぞ」
はたと気づくと、反対側のレジに店員が入って、城山に呼びかけていた。

一度おおきく息をついて、そちらに向かう。タバコの銘柄を言って金を払う。ポケットにしまいながら、自動ドアをくぐると、秋空の

下、妹が異形の生き物に襲われていた。

城山奈々華は、兄をコンビニに見送ると、その駐車場の縁石の上でスカートを押さえつけながらしゃがみこんだ。ついていくという選択肢もなくはなかったが、結局外で待つことを選んだ。

そつと自分の首筋を愛おしそつに撫でる。やっと心臓が落ち着いてきたが、未だにそこには彼の息遣いや体温が残っているような気がした。体の芯にぼくと熱がこもる。時折吹きつける秋風から守るように、手のひらを当て続ける。自分の体温を兄の体温に見立てて悦んでいるなど、自慰のような気がした。

香水のことを考える。うそをついた。罪悪感や後悔より、喜びの方が強かった。これくらいは許されても良いのではないか、と思う。身を切るような寂しさや切なさを、耐え抜く、一つのカンフル剤として、これくらいのことには罷り通っても罰は当たらないのではないか。どうして香水のことなど、兄が聞いてきたのか。或いは気を惹きたい異性でも現れたのではないかと、考えるだに涙がこぼれそうになる。そんな弱くて情けない自分がぐつと歯を食いしばって笑っていられるために、これくらいは。

近頃は兄と過ごす時間が増え、こういう甘えた考えも必然的に生まれてしまう。また昔みたいに。もしかしたら。そんな妄想にも近いそれが、現実味を帯びて見えてしまう。甘えてはいけない。同時にそれを否定する思いもある。自分が兄にしてしまったことを忘れたのか。いけしゃあしゃあと、ふざけたことを考えてはいけない。

でも……
儂い希望に耽溺たんできしていた奈々華が周囲の変容に気づいて顔を上げた時には、すでに妖魔が彼女の目前に現れた後だった。

一撃。彼女の肩を掠めた角を、もう一度振りかざそうとした妖魔は、しかしその動きを止めざるを得なかった。腰から背中にかけて激痛

が走ったのだった。百足牛。一度退治した妖魔だったが、幸いと言
うべきか、この場合は不幸と言うべきか、弱点は以前のそれと変わ
らぬ位置にあった。つまり城山が飛び乗って肉を抉った背中は、急
所ではなかった。

しかし、その動きを止めることには成功し、前足を上げて体勢を崩
して城山を振り落とすことに腐心する。それしきのことと振り落と
される城山ではないが、今回はその動きに逆らわず、速やかに地面
へ滑り降りた。横から回り込み、すぐに奈々華を抱きかかえてその
場を退避する。

駐車場の端、アイドリリングストップを呼びかける看板の近くにおろ
した。

「大丈夫か？」

弱弱しい声で、うんと返してくる奈々華の肩に、城山の目線が釘付
けになった。

赤い血を見た瞬間、目の前が明滅するような烈火を胸のうちに感じ
た。

「ちょっと待ってて」

かすれた声でそれだけ言い残すと、妖魔に向き直った。一步、二歩、
進んでいく。殺すとか、殺さないとか、そういう問題ではなかった。
今まだ息があることが我慢ならなかった。子供の頃、自分の思い通
りにいかないことについて、駄々をこねる様に、愚直で強い感情だ
った。本当に耐え難かった。痛みにのたくるその姿すら、背後の奈
々華を恐れさせているのだと考えるだけで、噛み合せた歯がギチツ
と嫌な音を立てる。

弱点についての考察も何もなかった。全部壊してやる。目玉を抉り
出してやる。腸を引きずりだしてやる。脳漿のうじょうをぶちまけてやる。足
を全て折ってやる。生きてまま皮をはいでやる。

飛び掛った城山の瞳は、夜の闇にもわかるほど、凶暴な色をたたえ
ていた。

第四十八話：CHAOTIC DANCERS

「はい。そういうわけですから、少し遅れます」

事の顛末を、三好に告げると、彼女は了解を告げて、電話を切った。今現在は少し遅れながらも夜勤へと車を飛ばしている状態だった。八王女に妖魔が出ることは、スクランブルで音邑から彼女へも知らされていたらしい。事実、妖魔との交戦が終わり隔離世が解けたところ、いつか会った榎木と寺本がやってきた。

血まみれの城山を見て、ぎょっとした様子だったがすぐに、スクランブルのことを教えた。相手を倒す戦いが旨である筈の対妖魔戦闘にあつて、壊し尽くす戦いを終えた城山の様子は、彼らにとってもそれなりに衝撃的だったようだ。妖魔の血液や脳漿やらを全身に浴びて、氷のように冷たい表情で立つルーキーは、妹を病院に搬送するという話も受け付けず、榎木らが乗ってきた車に着替えがあるからというのも聞かず、奈々華を連れて去っていった。

叩きつけるように携帯電話を助手席に放った。背もたれに跳ねて、ドアの内側にぶつかって座席の上に落ちる。

「使えねえ」

音邑の予知も、対応する職員も。そして、少しならと、妹から目を離してしまった自分も。どいつもこいつも、使えない。クソの役にも立たない。

「何やってんだよ、俺は」

もう大丈夫だから、と気丈に笑った奈々華の顔を思い出す。もうそろそろ行かないとお仕事間に合わないでしょう。まだ血色の戻りきらない顔、震えた唇、キズテープの巻かれた肩……

「……馬鹿にしゃがって」

ほんの少しの間、そんな間隙を縫うように、まるで彼女に恨みでもあるかのように。

携帯が鳴る。丁度信号待ちに掴まっていたので、荒々しく引っつか

んだ。三好のつまらない小言なら無視してやるうかとも思ったが、奈々華から不安を訴えるような内容だったら、取って引き返すつもりだった。勤務など関係なかった。

「つち」

三好からだった。少し迷ってから、出る。

「もしもし。すみません。またスクランブルです。今一番近いのが城山さんだったものですから」

「……はい」

「場所は、かれはたい枯葉台の北西。行けますか？」

城山は口の端を歪める。目は笑っていないかった。

「城山さん？」

「ええ、わかりました。後で地図を送ってください」

「はい。時間は今から四十分後、間に合いますね？ お願いします。再び携帯を切る。交通量が多くなかったので、ハンドルを切って右折レーンへ入り込ませる。

「そんなに殺されたいなら、殺してやるよ」

ハンドルに乗せた右手の人差し指を、タンタンとタップし始めた。

乃木強兵が城山仁の名を初めて耳にしたのは、先月の頭のことだった。顔合わせの席で、いきなり古株の一人、牛島をいなしてしまったという話を真田から聞かされた。牛島の評価は、乃木の中では決して高くなく、たいした実力もないくせに威張り散らしている小物という印象だったので、ぶちのめされたことについては特に何も感じなかった。だが、その胆力や、そして真田が語る人物像を聞くうちに、ふつふつと興味が湧いた。

自分と同じ匂いがする。今こうして初めて彼の姿を見て、乃木はその印象を濃くした。あれは、笑顔のまま人を殺す、どこか欠落した人間だ。嬉しくなった。

抗しがたい欲望が、むくむくと鎌首をもたげてくるのを感じつつ、

そつと背中を見つめる。

三好からスクランブルを言い渡され、枯葉台の外れまで車を飛ばしてみる、そこには彼の血を滾らせるような光景が待ち受けていた。虐殺だ。妖魔の手足をもいだ後、馬乗りになつて顔も腹も関係なく殴りつけている男の背を見つけたのだ。

普通の人間が見れば、卒倒してしまつてもおかしくない光景に、全く違うことを考えた。ああ、あの男と自分ではどちらが強いのだろう。確かめてみたくなる。久しく封印していた、いやせざるを得なかった感情だ。だからこそ恐ろしく飢えている。殺し合いを渴望してやまない。

普段よくペアを組む、真田では全然足りなかった。それなりの実力はあるのだが、どこか不完全で、そして何より酷薄さが足りない。仮に彼に戦いを挑んだとして、おそらく相手は本気では戦わないだろう。乱心した相棒を説得しにかかるか、その場から逃げることにだけ心を砕くはずだ。それではつまらない。意味がない。

だが目の前の男はどうだ。まるで抜き身のポン刀だ。鋭くて、芸術的なまでに危ない。

ぼつぼつと肌が粟立つのを感じると、もういてもたつてもいられなくなつた。

城山は妖魔が息をしていないのを確認して、ゆっくりと立ち上がった。世界が少しずつ現実的な色や音を取り戻していく。目にかかりかけた返り血を手の甲でぐつと拭う。

瞬間、体を全力で捻つた。

城山が居たところを、恐ろしい速度で腕が通過していく。掌で持ち手を握りこんだ、腕の内側に添え木のようにびたり吸い付いた鉄の棒を、彼の優れた動体視力が視認する。距離を取る前に、その腕の生える先、男の体をめがけて思いつき蹴りを繰り出した。腕でガードされ、城山の足に鉄を蹴った感触だけが残る。改めてその反動を利用して数歩後ろへ下がる。

トンファーか。ねめつけるでもなく、城山は無作法者に目を向ける。「やっぱり気づいてたか。そうでなくちゃな」

見据えた先の男は、三十の半ばほどか。痩せ型の体だが、長身で、立ち居振る舞いに隙が見当たらない。何らかの武芸を嗜んでいるとそれだけで知れる。男は愉快そうに笑っていた。

「乃木強兵さんですね？」

城山は一度だけ、彼の姿を見たことがある。真田と一緒に居るところを広間で見かけた。会話したことはなかった。

「はじめまして、かな」

乃木は笑った。

「どういづつもりですか？」

乃木の笑みの質が変わる。にやっとふやけたような笑みは、一見人懐っこい印象を与えるかもしれない。だが注意深く見つめてみると細められた瞳の中に、嗜虐的な色が潜んでいるのにすぐ気づくだろう。

「今、僕は少し気が立っています」

城山のほうも笑った。その笑みを見て、乃木は確信する。本物だ。

「どうい理由かは知りませんが、あまりふざけたことをしていると……」

そしてその笑みがすっと立ち消える。

「殺すぞ」

乃木の体を駆け抜ける電流のような快感。ぞくりと背筋が冷える。これだ。これこそが自分の求める感覚だ。殺されるかもしれない、でも殺せるかもしれない。そういう極限のやりとりが出来る相手だ。乃木は興奮を抑えきれなくなって自然と声を上げて笑っていた。

「いいなあ。その目、お前マジでいいわあ」

職場内では、自分を高慢な自信家と見る者も居るようだが、それは自分に言わせれば全くのナンセンスだ。お門違いもいいところ。全く、少しもわかっちゃいない。自分はただ純粹に力の信奉者であるだけだ。だから力ない者には、戦う価値のない者には少しの興味も

湧かない。それが時として傲慢にも見えるのだろう。身勝手にも見えるのだろう。本当にわかっていない。

また力の信奉者ではあるが、自分が絶対だとは思っていない。そういう意味では謙虚であるとさえ思っている。だって絶対だったらつまらない。自分が死ぬかも知れない、そう思える瞬間があつてこそ、そう思わせる相手を倒した時に至上の快感を得られるのだ。まどろみの中よりも、ペニスの痙攣よりも、美食の後の人心地よりも、何よりも人生の中で最高なのだ。理解されなくていい。理解されるとも思っていない。それでいい。理解できない人間と殺しあつても何も面白くない。ただ自分と同じ、どこか壊れた人間と果たしあつてこそ、得られる感覚だ。

「なあ、殺し合わねえか？」
だからこれは快諾される。

「どいつもこいつも、死にたがりばかりですね」
快諾される。涙さえ出そうな喜びに、引きつった笑いが生まれる。
へへへへへ、と止め処なくだらしく。

すつと体を低くして、弾丸のように駆け出したとき、世界の様相が一変した。

第四十九話：金切り声明けたら

三好ハルは、癖のない猫毛を両手でかき回した。本当に追い詰められたときにやる癖で、いつか母にみつともないからとたしなめられたこともあった。

「何なのよ、いったい」

先ほど音邑がやってきて、たった今予見した妖魔の襲撃を伝えた。スケジュールのように箇条書きにされた紙を渡されたのは、かなり久しぶりのことだった。もちろん一体や二体なら、口頭で伝えていくだけである。つまりは、一度言っただけで覚えきれないだろうという配慮がなされる程の量ということである。

例を見ない。昼間には極稀にあることだが、夜勤でというのは記憶がない。

何かがおかしい。まるで昼夜が逆転したような状態だ。いや、逆転したわけではない。昼間にもこれまでとさして変わらないだけの妖魔が出ている。つまり夜勤帯に出る妖魔が爆発的に増えているのだ。これまでのサンプリングが全て水泡に帰すような異常事態だ。

何かが起こっているのだろうか。何か良くないことが。

「三好」

襖の向こうに人の気配を感じ、姿勢を正したとほぼ同時に声がかける。

「すまん。またスクランブルだ。場所は、さつきと同じ、枯葉台だ」
三好はふすまを開けようかとも思ったが、どうも音邑のほう落ち着かない雰囲気だった。早く部屋に戻ってまた予見に入りたいたいのだろう。邪魔をするつもりはなかった。だから了承の意だけを返す。そうして足音が遠くなりかけた時、立ち上がった襖を開けた。廊下に出て呼び止める。

「音邑さん。その……」

「なんだ？」

「えっと、城山さんと乃木さんは上手くやっていますか。そこまでわかりませんか？」

聞きながら後悔に襲われる。何故か城山の顔が浮かんで、つい聞いてしまった。保護者じゃあるまいし、当人同士も、もういい大人なのだから心配には及ばないはずなのに、尋ねたくなかった。

音邑は口を嚙む。そのサングラスの向こうが、見えなくて、彼が何を考えているのかわからなかった。目を見開いて驚いているのか。はたまた瞑目して言われた通り彼らの様子を見ようとしているのか。時計の長針が一周する頃に、おもむろに口を開いた。

「よくは見えんが、恐らくは大丈夫だろう。仲良く共闘とはいかんが、それでも反目しあって傷つけあっている様子は見えない」

「……そうですか。ありがとうございます」
「知らず胸を撫でおろしてる自分がいた。」

両の手に握られたトンファアを、押さえ込む。両手と両手が、がっぴりよつ。しかし膠着状態は長く続かず、すつと引いた乃木の右腕が、再び鞭のようにしなり……

あらぬ方向を打った。鈍い音がかすかに響き、空より襲い来た妖魔がよるめきながら、宙を舞って距離を取る。

「ここまで来てお預けたあ、本当に俺は神様に好かれていないらしい」

毒づくよりは自らを憫笑するような口調で言っつて、城山から離れる。「どうするんですか？」

夜空に浮かぶ場違いな生き物を眇めるように見ながら、城山は問う。ハーピー。実物を見るのは初めてではあったが、十河のたゆまぬサイト運営のおかげで、城山も姿形は予め知っていた。

赤茶けた羽毛を、体の至る所に生やし、なにやら身軽な鎧のようにも見える。胴体の部分は人間と変わらぬ様相で、足から陰部までの辺りがその毛で覆われていて、腹はまるで人間。へそまである。体

のつくりを見ると男性のそれで、筋肉質な体躯。更に視線を上げていくと、胸元から首筋までがまた羽毛に包まれている。顔もまた人と同じようなパーツを揃えているが、表情というものがまるで無く、マネキン人形のような印象を受ける。背中からは猛禽よりも力強く大きな羽が一对生えており、それを周期的にはばたかせて中空に滞在している。

「まあ、お前はすでに一体倒した後だろう？ 俺がやるう」

自分と城山の間でアンフェアがあるのが我慢ならないということらしい。だがそれは十河の義理堅さとは性質がまるで異なる。条件を同じくして、正々堂々とさつき言った殺し合いなるものをしたい、そういう意思が明確に見て取れた。

そういうことなら是非も無い。城山は民家のコンクリート塀に背を預けて、高みの見物といくことにした。

ハーピーが、まるで話がまとまるのを待っていたかのように、その瞬間乃木の方へ滑空していく。城山は目を細めて成り行きを見守る。その一方で、いつか見たデータベースの記録を、脳内から引っ張り上げる。確か、ハーピーの戦法はヒットアンドアウェイ。制空権という圧倒的なアドバンテージを生かし、滑空からの攻撃、撤退を繰り返し、獲物を弱らせる、そういうやり口だった筈だ。

情報に間違いはなかった。滑空し、人間なら足の指となっている場所、そこには鋭いカギ爪が生えていて、そいつで引っかくように攻撃を加える。そしてその成否に限らず、反撃を食らう前に再び空を舞う。堅実で理にかなった方法である。本能に刻まれた知恵か、聡いと評されるその頭で考えた作戦か、どちらかはわかりかねるが。乃木はその空からの攻撃を全て鉄のトンファーで受け、夜の闇に盛んに火花を散らしていた。タイミングを測っているのだとは城山はすぐに気づいた。そして彼が狙っているであろう具体的なカウンターの方法についてもおぼろげながら当たりにがついている。仕掛けるとしたら……

幾度目になるかもわからない滑空からの爪による攻撃。だが今度は

乃木は簡単に弾くだけではなく、攻勢に打って出る。トンファーと腕の間のわずかな隙間をわざと広げ、そこでその爪を受ける。いや絡め取るといったほうが正確か。狭間に引っかけた爪を、今度は武器と腕の間で締める。そしてそのまま腕を回して、ついにハーピーを地面に叩きつけた。そしてもう片方の手がその体に容赦なく振るわれる。残像が見えるような、鋭くて無駄のない振りだった。バキツと骨を砕くような音が無音の世界に波紋のように広がる。殴られたハーピーが頭から血を流し、息を大きく吸い込むのが見えた。肺に空気を溜め込むとき、腹がへこんで僅かにアバラが浮き上がった。

城山は勉強熱心な過去の自分をそつと心の中で褒め称える。上着のポケットから抜き出し、手の平で転がしていたパチンコ球を二つ、イヤホンのように耳の穴に埋め込んだ。

「きあああああああああ」

耳栓をしてなお、断末魔は鼓膜を震わせた。乃木のほうはと見ると殴った後すぐに距離を取ったようで、少し離れた場所で耳の穴に両の人差し指を突っ込んで耐えているようだった。

金属をしつちやかめつちやか引っかき回したような生理的嫌悪を起す声が、やがて小さくなり、完全に立ち消えるまで、ゆうに一分は掛かっただろう。

ハーピーの金切り声は、耳をつんざく。一番の懸案事項は、狡猾なヒットアンドアウェイ戦法ではなく、こちらだった。予備知識がなかったら、城山の鼓膜は破けていたかもしれない。まあその名を知って、伝承を知っていれば、加えて乃木の様子になんらか只ならぬものを感じられる洞察力があれば初見でもかわせるだろうが。城山は銀球をほじくりだす。

「へえ。用意がいいな」

乃木が歩み寄りながら声をかけてくる。城山は新人なんだから、金切り声のこと、一言くらい注意があっても良かったのではないか、と思う。そしてすぐ、自分を殺そうとした人間に親切を求めるなん

て、あまりに不毛なことだと気づく。

「……たまたま持ってただけですよ」

傍観している間に、上着のポケットに手をつ突っ込んだらあっただけ。いつものものと記憶を探ると、店員に箱を流してもらったときに、ぼるぼる零れたものを、勿体無いと拾ったはいいが、みみっちい気がして結局一緒に流してくれと言い出せずに、無意識的にしまったものだった。

「ところで、まだやりますか？」

殺し合い。

「んー。なんか興が殺がれたんだよな。しかもお前、本来徒手じゃないんだろっ？」

「ああ、気づかれましたか」

「見くびるなよ？ ……つとと」

乃木が言葉の途中で、あごを上げる。世界が元に戻り始めている。

「まあ、どっちにしろ、延期ってことになりそうだな」

戻ってきた世界。元の静寂だけど、どこかほっとするような郊外の風景。城山が予想したものはそこにはなかった。

「神様は、本当に日陰者には冷たいねえ」

ぼそりと呟く乃木の声が、場にそぐわない暢気な響きを伴って、城山の耳に届いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9254w/>

伏魔殿の常識は

2011年10月26日02時04分発行